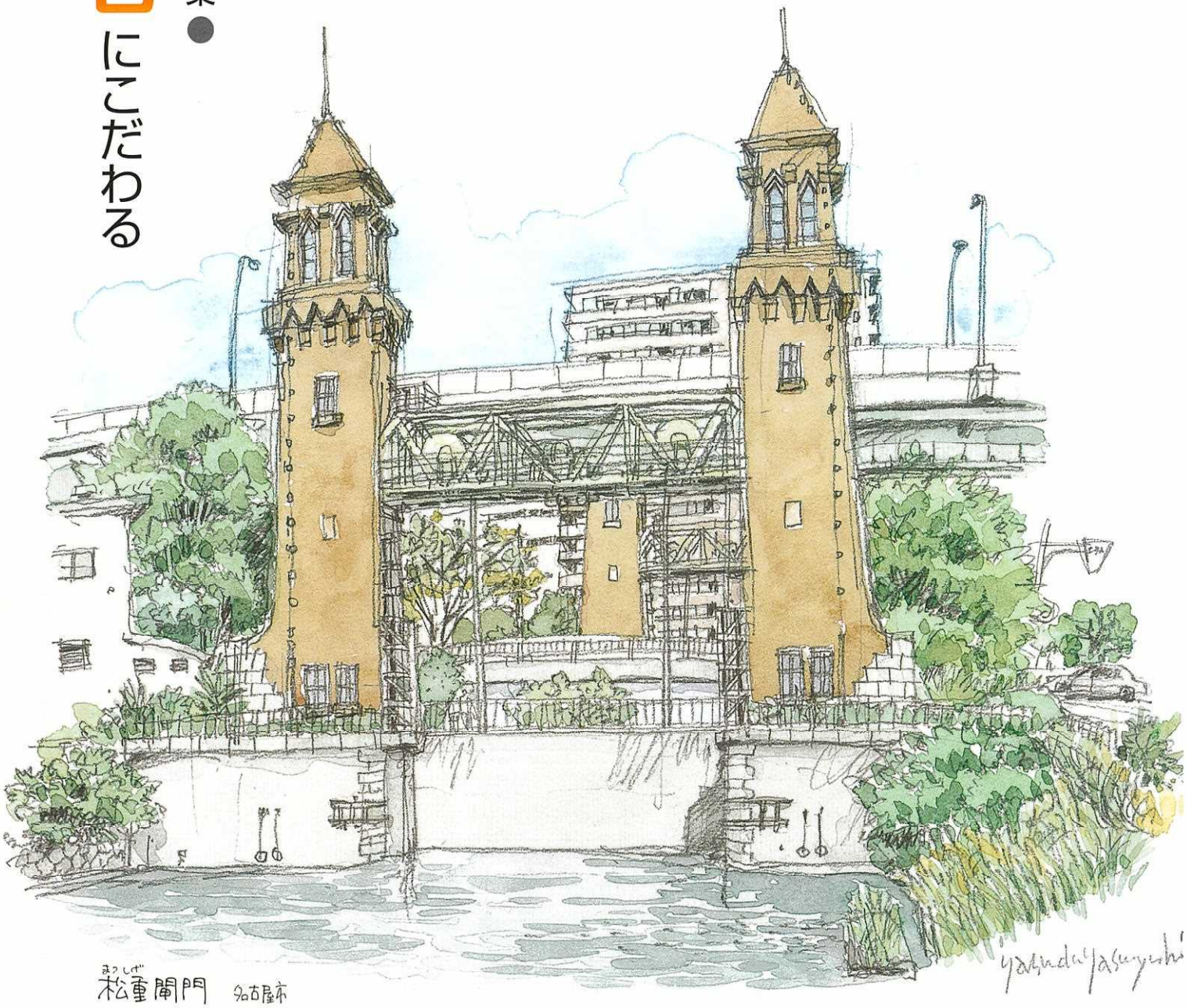
ISSN 0285-0486

国づくりと研修

98
AUTUMN
2002

●特集●

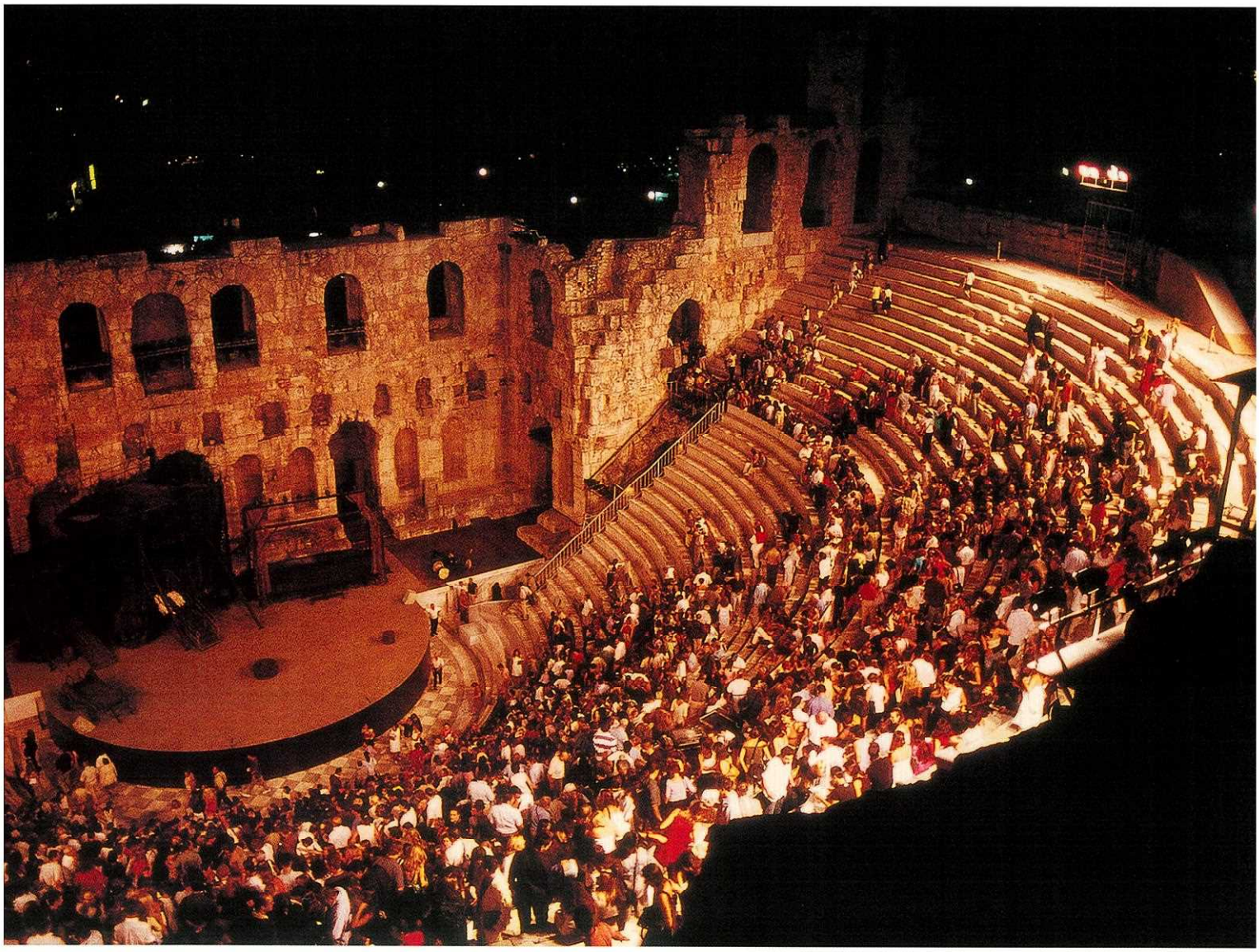
色にこだわる



松重閘門（まつしげ） 名古屋

江戸時代、名古屋の水運の要として開さくされた堀川と昭和初めに造られた中川運河の水位を調節するため、1932年に築造された。全盛期には8000隻の船が利用したといわれる。役目を終えた今も、印象的な姿が市民に親しまれている。

財団法人 全国建設研修センター



ヘロディス・アティクス音楽堂

紀元後 161 年に完成した音楽堂。5000 ～ 6000 人を収容可能。完成当時は、杉材を使用した屋根が付いていた。

ヘロディス・アティクスは父の代で巨万の富を築き、彼自身は元老院、執政官、領事などの要職をこなし、パトロンとしてギリシャ文化に大きく貢献した。

アーチ状の戸口や大窓を持つ典型的なローマ時代の劇場で、保存状態が良いので夏のアテネフェスティバルの主要会場となっている。当日はエウリピデス原作「アウリスのイフィゲニア」が上演された。

（撮影と文・橋本武彦）

国づくりと研修 98 AUTUMN 2002

CONTENTS

特集 色にこだわる

4 まちは、なに色？ 日比野克彦

6 対談 色彩とアメニティ
まちの美しさとは、豊かさとは
酒井憲一×葛西紀巳子

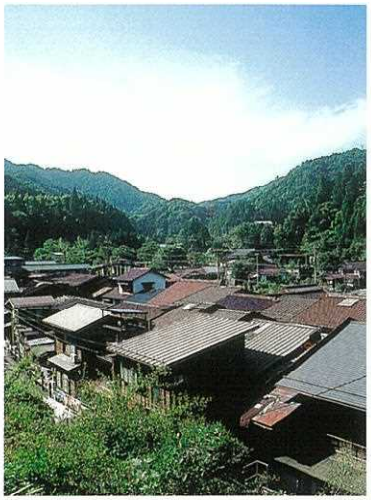
12 景観形成と色彩基準 吉田慎悟

16 まちの色とユニバーサルデザイン
～まちなみとサイン環境のあり方から考える 田中直人

20 地域住民が育む美しい景観 田村美幸

24 土木の色　爽やかな風景のために 篠原　修

28 日本の色彩文化を読む 小林忠雄



妻籠宿（長野県）

38 人物ネットワーク
坂本博之

42 講演抄録
『まちづくり、町の顔づくり』 青山佳世

34 土と木
日本の文化を守る橋・渡月橋 平野暉雄

54 まちの色　風土の彩り
景観行政と経済性 葛西紀巳子

36 旅で出会った匂い
冬の北陸は何といってもカニ 八岩まどか

60 ここに人あり－まちづくりと人
井上房一郎と音楽の街・高崎 昇　秀樹

56 近代土木遺産の保存と活用
沖縄の石造用水施設群 後藤　治・小野吉彦

50 土木史余話
中山道幹線の建設工事 沢　和哉

32 KEYWORD
平成13年度国土交通白書より

62 施設ウォッチング
ガスとくらしの歩みをたどる　GAS MUSEUM

64 OPEN SPACE
誰とでも触れ合えるスポーツをとおして、心も体も元気に／賞味期限切れ

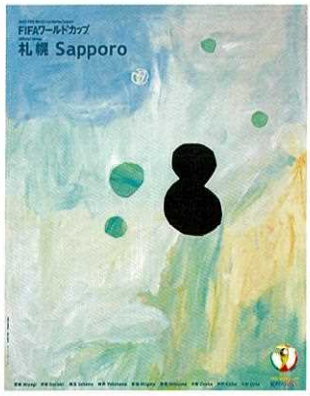
46 教育現場を訪ねて
学校裏の用水路を改修して、小さな自然をとりもどす　日野市立潤徳小学校が取り組む環境教育

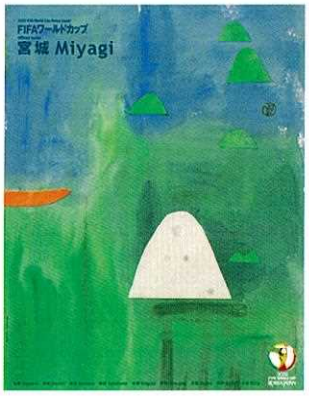
66 ほん
『ネクスト・ソサエティ』／『建築家がつくる理想のマンション』
『江戸・東京はどんな色』／『坂本博之・不動心』

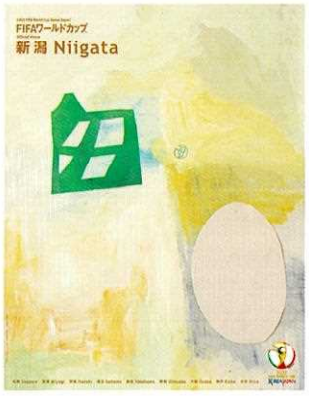
67 INFORMATION
西山芳一写真集・写真展／土木の文化財を考える会／地域住民による土木遺産活用

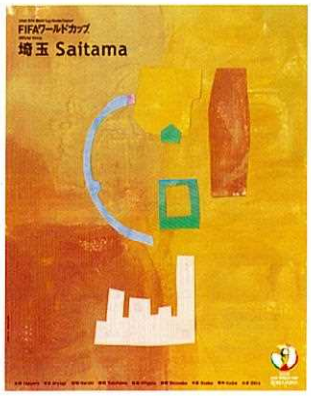
68 業務案内

edit & design
緒方英樹／高梨弘久
小野久美子／室谷麻美子



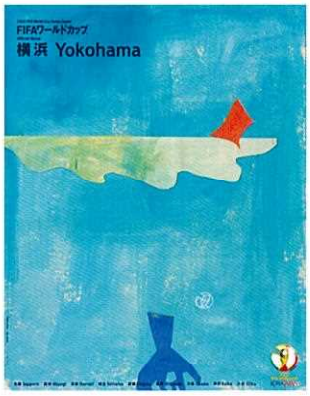


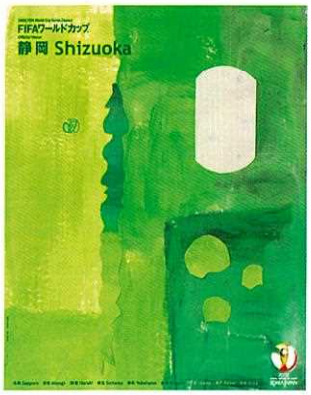


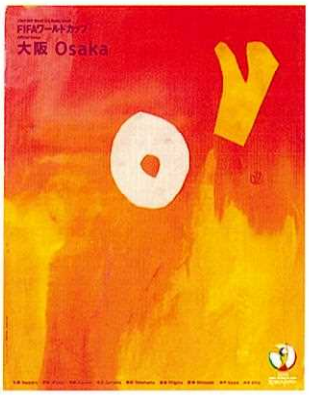


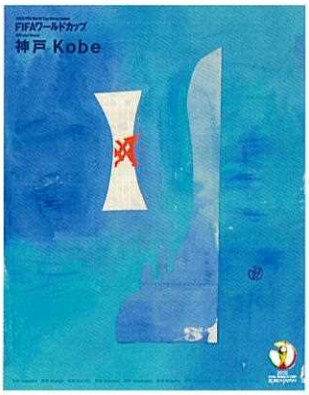
まちは、なに色？

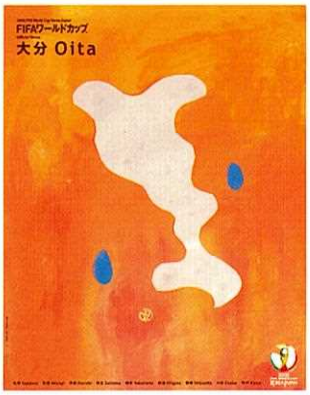
日比野 克彦









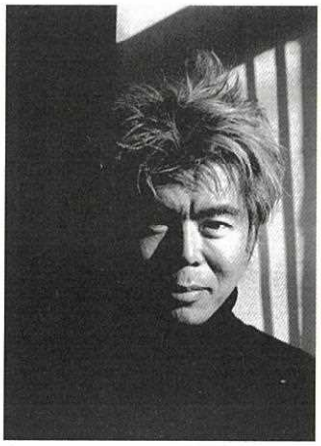


2002 FIFAワールドカップ™ホストシティーポスター　© 2001 FIFA

こんな話を聞いたことがありますか？「東京に本社のある企業のロゴの色は青が多くて、大阪に本社のある企業は赤が多い。その理由は東京と大阪の緯度の違いで、東京は青が、大阪は赤がきれいに見えるから」。そう言えば！といくつかの企業を思い起こしてみれば、うーん、あてはまる気もするし、必ずしもそうでないような気もするし、でも最初聞いた時は「それはありえる！」と思ってしまった。色は所詮、光がなくては見えないもので、朝、昼、夕方では葉っぱの色がちがって見えるし、春夏秋冬によっても空の色も空気の色も違ってくる。当然緯度が違えば光の射し込みかたも違う訳だから、きっと東京と大阪でも違ってきて当たり前かもしれない。

色は微妙である。色の数は無限にある。もっと極端に言えば同じ色は二度と現れないとも言える。色は刻々と変色し続けているものなのである。もっと言えば、私が見ている色とあなたが見ている色は同じ色を見ていても、はたしてそれは同じ色といえるのであろ

色にこだわる



© Kiyohide Hori

ひびの・かつひこ

アーティスト

1958年岐阜市生まれ。東京芸術大学大学院修了。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科助教授。1982年に第3回日本グラフィック展大賞、1983年に第30回ＡＤＣ賞最高賞、1995年ベニスビエンナーレ参加、1999年度毎日デザイン賞グランプリを受賞。絵画、舞台美術、映像、パブリックアートなど、多岐にわたり活動。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多く行っている。

最近の活動としては、2002FIFAワールドカップホストシティポスター国内開催都市全10種類を制作。日比野克彦展「HIBINO DATA ON OUR TIMES ～ある時代の資料としての作品たち～」2002年9月28日～11月15日目黒区立美術館にて開催。日比野克彦「初めて橋の上で立ち止まったのは何処ですか？」9月25日～10月20日ヒルサイドギャラリー。

展覧会の詳細はホームページ「Cafe Hibino Network」
http://www.inter-g7.or.jp/g7/hibino/home.html

うか？それぞれの目玉がそれぞれの脳で解釈している色を照らし合わせることなどできはしなく、せいぜい言葉をさがし、「赤なのだけれど、ちょっと渋い感じの柿のような感じの色かな」などと言ってみたりするのが精一杯である。

これほど色というものは手強い相手である。それは人間の優れた能力が色を識別することにたけていることのうらはらともいえる。いや識別するだけでなく、もっと手強い人間が色に対して持っている能力のひとつとして、色からイメージすること、という部分であろう。赤は情熱、青は爽快、緑は生命などと、色と感覚をつなげることが日常の中で自然に行われているところである。実際に見る色の判断ではなく、色が喚起させるイメージの判断で、色と付き会っている部分が大きいところが色の色たる真骨頂の罪であり魅力である。

まちを色に例えるとなどという荒技もこんな人間の能力があるから出来ることである。東京はグレーとか言い切ってしまって、そうであっても誰もが「東京はグレーしかないわけないよ」と小学生のようなことは言いはしない。「そうだね、東京はそうかもね」とイメージの部分の色を使ってくる。

つい最近、私がした仕事の中でこの能力を利用した仕事があった。それは二〇〇二年のワールドカップのホストシティーのポスターの仕事であった。日本中を熱狂させたあのワールドカップ！実に楽しい一ヶ月であった。バラ色の日々だった、などと余韻にひたることは置いておいて、日本では一〇都市で開催された、その都市ごとのポスターの制作を担当したのです。札幌、宮城、新潟、茨城、埼玉、横浜、静岡、大阪、神戸、大分のポスターを作るにあたって、私はそのまちを色に例えることを基本にデザインを進めていったのです。その都市が持っているイメージを色に置き換えると、なに色になるか？それは個人の勝手でいいと言えばそれまでですが、極端に札幌が赤で大分が白とは誰も言わないでしょう。それがイメージの共有のところになってきます。私がこの仕事の中で位置付けした都市と色の関係は、札幌＝白、宮城＝緑、新潟＝乳白色、茨城＝茶色、埼玉＝黄色、横浜＝水色、静岡＝黄緑色、大阪＝赤、神戸＝青、大分＝橙色、としました。

ではこの共有のイメージというものはいったいどのようにして出来上がってきたのでしょうか。その土地がもっている自然、環境、産物、産業、風土、人柄などが、そのソースとなっているのではないでしょうか。それは人為的に瞬時に出来るものではなく、年月を重ね季節が巡って有るべき色があるべきところに吹きたまっていく、そしてその色につつまれた人間が生活を続ける中で性格がいつのまにか育まれていく、そしてその人がもつ独自の色のイメージが出来上がる。

色は手強いです。色だけで存在する色はあり得なく、色は全てのものと関係を持っているのです。

景観形成と色彩基準

色彩計画家
吉田 愼悟

盤錦の環境色彩

今年の夏、北京でカラーデザインを行っている会社から盤錦（パンジン）の環境色彩計画の協力依頼があった。盤錦市は北京から北東へ六〇〇kmほど離れた位置にあり、空港がある瀋陽からは南に一二〇kmほど離れている。日本の地図で探してみたが正確な位置は分からないまま北京に入り、翌日車で盤錦に向かった。北京から盤錦まではよく整備された高速道路がつながっており六時間ほどで到着した。日本の地図には載っていなかったので小さな田舎町を想像していたが、盤錦市は石油産業で発展した人口一二〇万人にも達する都市であった。近年石油産業は拡大し、多くの労働者のための大規模な住宅建設が行われていた。

盤錦の街は双台子（シュアンタイジ）河を挟んで南北に二分されており、北側には古くからの低層の住宅も残っていたが、これらの住宅地も近い将来高層化されるという。河川の南側の地区はすでに新しい中高層住宅が数多く建設されており、全く新しい都市に生まれ変わりつつあった。

新しい中高層住宅はヨーロピアンスタイルを模倣したものが多く、色彩もこれまでの中国では見られなかったピンクやライトグリーンやペールイエローなど様々な色調が使われていた。昔使用していた煉瓦に合わせた赤茶色も使われていたが、塗装色の彩度が高くそれぞれの建物が主張し合う賑やかな景観をつくっていた。市政府もこのように建築物が勝手に主張し合う景観に疑問を感じ、外装色のコントロールの検討を始めたが、盤錦のような規模の都市の色彩コントロールは中国では初めての試みであり、その手法を模索している段階であった。

盤錦から北京に戻り環状線沿いに建設が進む住宅開発を見学したが、北京も盤錦と同じような状況になっており、高層の建築物には高彩度の鮮やかな色調が競って使われていた。これらの建築物の色彩計画にはいくつか興味深いものも見られたが、彩度が高い塗装色は耐候性にも問題があり数年後の退色した大規模な住宅群がつくり出す景観が心配になった。

■ 盤錦の環境色彩

鮮やかな外壁色の住宅開発

ヨーロピアンスタイルの中層住宅群

■ 北京の環境色彩計画

原色の赤や青で塗色された高層住宅群

鮮やかなオレンジ色が使われた高層住宅群

色彩のコントロール

日本でも六〇年代後半から、高彩度の建築外装色を好んで使用した時期があった。スーパーグラフィックと呼ばれたこの運動は、白い無機質な近代建築の持つ表情に対する批判も含まれており、瞬く間に日本中に広まった。スーパーグラフィックは実験的な興味深い建築の色彩計画をいくつも提示した

が、長続きはせずオイルショックの時期には下火になっていった。原色の赤や青や黄に塗装された外観は改修され、彩度を抑えた落ち着いた色調の外装色への塗替えが進んだ。

そのような流れを通して、我が国では都市環境における色彩のあり方について検討が積み重ねられ、建築物単体の色彩の目新しさや面白さではなく、地域の魅力ある景観が求められる時代になった。地域の景観形成のためのカラーデザインは七〇年代中頃から環境色彩計画と呼ばれ、その後都市の全体的な統一性を求めて策定された景観条例の中に色彩基準が設けられるようになっていった。私達は色彩基準に客観性を持たせるために、環境色彩調査を行い、現況の建築色を把握し、それらの色彩範囲を重視する色彩コントロールのあり方を考えていた。このような現況の色彩をもとに数値による色彩コントロールを比較的早期に行った兵庫県の例を最初に紹介する。

一九八四年に兵庫県から大規模建築物等の色彩基準を策定する作業を依頼された。この調査は過去四年間に建築確認が下ろされた三二一件の大規模建築物等の外壁基調色を調べ、採集した色彩をマンセル値に置き換え、建築外装色の色彩傾向を把握して色彩コントロールの基準を示す作業であった。県内の様々な地域で測色した建築の外装色をマンセル値に置き換え、色度図にプロットした。マンセル表色系では色彩を色相(Hue)、明度(Value)、彩度(Chroma)の三属性によって数値化しているが、現況の分析作業の中から景観への影響が最も大きな要因は彩度であることを掴んだ。兵庫県の大規模建築物等の外壁基調色の彩度別分布(**図表1**)を見ると、無彩色と彩度1のグループを足すと二二六件あり、それは全体の七〇・四%にもなった。そしてそこに彩度2のグループも加えると、二六四件で八二・二%に達した。このような低彩度色とは逆に鮮やかな強い色彩を持つ彩度10以上の建築物は、全体で七件であった。この高彩度色の建物は全体の二・一%にしかならないが、強く自己主張するために数値以上に印象に残った。建物の基調色は色相にも偏りがあり、全体に暖色系に寄っていることも分かった。寒色系の色彩はごく低彩度の領域でしか存在せず、中程度の彩度になると土の色に近いR系、YR系の色相に集中していた。報告書では実際に建築物の外装色に使われている慣例色の範囲を示し、この範囲を超える見慣れない鮮やかな色彩の使用を制限することを提案した。

図表1　兵庫県の大規模建築物の壁面基調色

	採集色数	構成割合
無彩色	121	37.7 %
彩色 1	105	32.7 %
彩色 2	38	11.8 %
彩色 3	12	3.7 %
彩色 4	13（2次色1）	4.0 %
彩色 6	13（2次色2）	4.0 %
彩色 8	9	2.8 %
彩色10	1	0.3 %
彩色11	1	0.3 %
彩色12	2（2次色1）	0.6 %
彩色14	3（2次色3）	0.9 %
その他	3	0.9 %
合　計	321	100.0 %

※２次色…外壁基調色以外で特に大きな面積に使用され景観への影響が強かった色彩

大規模建築物等の色彩指導基準

兵庫県の「景観形成等に関する条例」の大規模建築物等の色彩指導基準には「基調となる色は、けばけばしくならないように努める。その範囲は、マンセル表色系においておおむね次のとおりとする。①R(赤)、YR(黄赤)系の色相を使用する場合は、彩度6以下。②Y(黄)系の色相を使用する場合は、彩度4以下。③その他の色相を使用する場合は、彩度2以下。」と書かれており、建築確認申請の前に建築外装に使用する色彩の届出を義務づけている。彩度6・4・2という色彩範囲は調査によって得られた慣例色よりも広範囲となっているが、これは建築表現の自由度に配慮したものである。またこの大規模建築物等の色彩基準は景観の統一性を強調するものではなく、景観に対して影響が大きい高彩度色を抑えていくネガティブチェックの考え方が基本となっている。地域の景観は多様であり、色彩は建築の形態や素材とも深く関わって味わいのある景色をつくる。このような地域のきめ細やかなコントロールは景観形成地区の指定の中で住民と共に検討すべきであると考えた。

熊本カラーガイド

一九九八年に熊本県土木部景観整備課から発行された〝熊本カラーガイド…色彩景観ガイドライン〟では色彩基準を分かりやすくするためのさらにいくつかの工夫が見られる。熊本カラーガイドでは日本中の建築基調色の調査データを元に、建築外装用のカラーシ

まちの色とユニバーサルデザイン

～まちなみとサイン環境のあり方から考える

摂南大学工学部
教授 田中 直人

はじめに

どのような工夫をすれば、特定の利用者の要求だけではなく、より多くの、出来ればすべての人にやさしいデザインが実現できるか。今、ユニバーサルデザインという考え方が注目されている。このことをめざす多くの試みでは、寸法や形だけでなく、素材や色などの微妙な取り合いや配慮によって、工夫したものも多い。とりわけ、移動障害の問題解決だけではなく、情報障害の問題解決ということにおいては、サイン計画が大きな役割を果たしている。

サイン計画では、単に一つの案内標識をどのように設置するかという問題ではなく、人間を取り巻く環境をどのように構成し、その中にどのようなサービスシステムを連動させるかという環境デザインのテーマにつながる工夫が要求される。ここにおいて、サインというよりはサイン環境としてのデザインのあり方が問われることになる。筆者はサイン環境のユニバーサルデザインとして、サイン計画の「わかりやすさ」「幅広い対応」「安全性」「親しみやすさ」「美しいこと」の五つの原則を提唱している。[※1]

これらの原則を実現するために、サイン計画にとどまらず、多くのデザイン領域での展開が考えられる。「五感を刺激する環境デザイン」というアプローチを提案し、そのデザインの可能性を展開したのもそのような考え方が発端となっている。[※2]

この中で視覚に限って見ると、色はこれらのいずれの原則実現においても、有力な手がかりを与えてくれる。実際、私たちがまちの中で生活していると、いろんな場面で色がかかわっていることに気付く。身近な生活環境から宇宙の果てまで色に関わる問題がある。古今東西、多くの地域や国において、色にこだわり、色にその意味を象徴化するエピソードや物語は多い。色の話はたいていの人にとって興味深く、また、関心が大きいテーマである。主にはイメージなど環境形成にかかわる事柄と色のもつサインとしての意味に大別できよう。

本稿では、身近で生活環境に影響が深く、誰もが関心を持っていても、あるべき方向性を見出すことが厄介な「まちの色」について、ユニバーサルデザインの視点から、若干の考察を試みるものである。

まちのイメージと色

まちのイメージは地域の特質から来るもので、実際のまちの環境を構成している要素の影響が大きい。その地域に居住している住民と来街者では、地域の特質についての理解が異なるかもしれないが、それぞれに抱くまちのイメージは良きにつけ、悪しきにつけ、その特質の一端を物語っている。

震災前の神戸において、市民および来街者にまちの色とイメージに関するアンケート調査を行い、同時に市内の主要なポイントから実際のまちの色を計測し、考察を行ったことがある。[※3] 神戸のイメージを代表する色として、青、緑、白が多かった。青、緑は神戸の山や海、樹木等の自然要素に起因している。建物の色は遠景として白として捉えられているようである。また、近景においては、街路樹などの緑の影響が大きいが、建物の色や広告・看板など様々なサインの色も大きく影響している。

実際の他のまちでは「騒色」ともいうべき混乱した色環境が存在している場合が多く、必要なサインの役割が果たせなかったり、まちなみ・景観に落ち着きがなく、イメージも悪くなって

いることが問題になっている。環境と人間の関係、実態とイメージの関係において、色で表現される様々なデザイン領域がまちづくりでも重視されることが多い。

まちのイメージと色の関係については、物理的な環境を表出する要素としてだけではなく、生活者のこだわり、大切にする地域のイメージや個性にもつながる。地域のらしさや個性は、住む人の誇りや愛着にも関係し、CI計画やVI計画をはじめ、さまざまなデザインの展開においても重要な手がかりを提供する可能性が高い。地域のまちのデザインにおいては、マニュアル通りの「金太郎アメ」のデザインではなく、そこにしか味わえないような独自の魅力を大切にしたいものである。

サイン環境の原則と色のデザイン

①「わかりやすさ」と色

目で見てわかるのであれば、色分けすることは、多くの種類を理解するのに便利である。この場合、色分けされた色とそれぞれの意味の対応が十分に理解されることが前提である。例えば、郵便ポストの色がそうである。わが国では、郵便ポストは赤と相場が決まっているが、同じく赤の国もあるが意外と青や黄色など、いろいろである。また同じ郵便ポストにも種類があり、さらに普通便と速達便、あるいは国内便と国際便といった種類によって、色を変えて区別している。所変われば品変わるではないが、地域によって、色が表す意味も異なる。

色を記号として、区別して用いる代表例は、交通標識であろう。世界各国でも同じような交通標識が見られるが、微妙に違う。各種の制限や禁止に関する情報は明快な図記号と共に色の活用により、なお一層、わかりやすくする工夫がなされている。交通信号は交差点における車や人の往来に関する重要なサインで、青、赤、黄の色に付随する情報の提供の仕方に差がある。また、人や自動車だけではなく、デンマークでは、自転車のための専用走行路が路面の色分けなどで区別して整備されている（**写真1**）。

目の不自由な人に対する「わかりやすさ」のバリアフリーデザインの代表的事例に点字ブロック（視覚障害者誘導ブロック）がある。これは足裏の触覚を点状のブロックにして「警告」、線状のブロックにして「誘導」の役割をその色と共に担わせようとする工夫である。ユニバーサルデザインの視点からは視覚障害者にとって、仮に有効だとしても、他の歩行者にとってどうかという疑問もある。その敷設の方法がまちまちであることから、利用者からも改善要望の声がある。また、視認のしやすさからか、点字ブロックは黄色であるべきということになっているが、周囲の路面の色との関係では、かえって区別しにくいこともある。必ずしも黄色にこだわる必要はないとの意見もある。[※4] 都市景観のデザイン的な配慮からもどのような色を選定するかが重要である。すなわち、ここでは色をどのように組み合わせるかが重要なポイントとなる。点字ブロックを張りまわすのではなく、周囲の雰囲気を大切に視覚障害者の誘導ラインとして、また、車いすや乳母車の通行しやすい舗装として利用している例などもある（**写真2、3、4**）。何でもかんでも視覚障害者への配慮には点字ブロックを張ることであると思いこんでいるわが国の関係者にも再考してもらいたいものである。

写真1　デンマークの自転車の専用走行路
人と自動車だけではなく、自転車のための走行路を一方通行で都市内に整備している。交差点などでは、多くはブルーに路面を塗り分け、わかりやすくしている。

輝度比や明度差などの数値規定で具体的な色の見やすさを実現することも重要なことであるが、その根拠となる数値データについてはもっと多くのいろんな利用者の評価に基づくことも大切であろう。また、まちの色として、すべての人に安全快適な環境を実現するには、その部分だけの機械的な適用ではないバランス感覚が求められるのではないだろうか。

②「幅広い対応」

「幅広い対応」というのは、どのような状況に対しても出来るだけ対応していこうとすることである。よく議論される「点字ブロックの色は黄色が良いかどうか」も、暗い夜道には関係ない。夜の明かりがなければ、色がわか

らない。サインが見えないのである。必要な明るさを確保する配慮も忘れてはならない。内部に光源を入れた内照式のサインでは、グレアの問題を考慮すべきである。地と図の色のバランスや文字の大きさ、書体などを工夫する。外照式の場合、その光源の位置や種類によっても、見え方が違う場合があるので、想定している色や明るさが確保できるようにしなければならない。

難解な文字を多く並べるよりは、一目瞭然という効果を発揮するように、色や形を工夫することが必要になる。知的障害者や外国人、子供といったさまざまな人たちに「幅広い対応」を実現できることが肝要である。ピクトグラム（絵文字）や地図をうまく活用することもひとつの方法で、さらに、色の工夫を加えることで、よりわかりやすくなる（写真5）。

写真2　デンマークの歩道のデザイン
歩道の舗石の配列を工夫し、視覚障害者への誘導機能を果たすリーディングラインとしても有効であるが、車いすや乳母車の利用者にとっても役に立つ。

写真3　デンマークの歩道の誘導ライン
色と大きさを変えたブロックを張ることで、光の反射の具合を利用し、わかりやすくした誘導ラインの例。

写真4　周囲の芝生の緑との対比で誘導ラインの役目を果たす工夫
植物と石やコンクリートなどのような素材の色や質感の対比で、景観になじむ自然な環境を実現している。

③「安全性」

階段は転落などの危険が最も高い空間部位のひとつである。階段の段鼻は区別がつきにくいことが多い。同じような色や素材で仕上げると美しいデザインになると考えているデザイナーには申し訳ないが、高齢者や障害者などで目の不自由な人や階段の歩行が得意でない人にとって、それはきわめて危ないことである。そこで、階段の始まりと終わりの段に黄色のラインを入れるとよいということで、ある鉄道会社では、多くの駅の階段を改修したそうである。しかし、工事が終わって使用され始めた直後から、転倒する人が続出した。なぜかというと、白っぽい踏み面の階段に黄色では区別できなかったのである。当初の黄色のライン設置を要望したのも、危険だとクレームを発したのも視覚障害者の団体で、それぞれ違う団体であった。要するに機械的に黄色のラインさえあればと思いこんでいる関係者が多いことに問題がある。もう少しデザインをする時に、利用者の立場で床の仕上げに対してどのようにすれば良いか多くの利用者と実際検討すれば良かったのである。色だけではなく、安全確保のために階段に対する適切な照明、手すりなど他にも必要なことがある場所も多い。

プラットホームからの転落事故が多い。「白線や黄色の線までお下がり下さい」と言っても見えなければ、危険環境はそのままである。黄色の点字ブロックもここにおいて、必需の対策手段として用いられる。次善策とはいえ、もっと根本的に、すべての人の安全を確保できるホームドア方式などを基本に出来ないものであろうか。点字ブロックや色の工夫だけで、安全性を確保するには限界を感じる。

写真5　乗客の搭乗のゾーンを色分けする
空港で乗客の搭乗を座席の番号で、ゾーン分けし、その順番をコントロールするのに、手元に色分けされたカードを持たせ、かつサイン表示に対応する色の表示を適宜、順に行うというシステム。これであれば、目の不自由な人たちを除いて、だれでも自分の搭乗のタイミングを理解しやすくなる。

写真6　色分けされたごみ箱
色分けされたごみ箱が環境デザインとして、廻りのファニチャー類と共にサイン化されている事例である。この事例では、分けて捨てることの楽しさを色分けという子供や外国人でも楽しんで行える遊び心が感じられる。

④「親しみやすさ」

火は赤、水は青、というように、自然の事物が持つ色を直接的に記号にして意味を表せる場合はよいが、抽象的にその特質をすべて色に置き換える場合には一定のルールとして、色とその表す意味を対応させなければならない。ここにおいて国や地域、民族によって、その感覚の差が生じる。しかし、この地域性や歴史性こそが逆に、「親しみやすさ」を生み出すことにつながる場合も多い。同じような色であっても、微妙に違うが、それぞれに名前がある。その色自体を生活の中で使うために、生み出してきた材料や地域などに由来する名がある。言いかえれば伝統色というべき愛着のある色である。多くの文学や音楽の中にもそれらの名前が登場する。色の呼び名は「親しみやすさ」を表す表現でもある。実際の生活の場面では様々な「親しみやすさ」を生み出す工夫がある（写真6）。

色を使い分けたり、組み合わせることは、様々な物語性を演出することにも有効なことが多い。色分けすることで、よく利用されるのがレインボーカラーである。七つの色に建物の各フロアのサインを色分けしたり、様々な地域や場所、あるいは意味分けをあてはめるのである。

⑤「美しいこと」

路面表示やガードレールは、夜間でも白が最もはっきり見ることが出来るせいか、白の場合が多い。一方、雪の中で見やすくするため、黄色のガードレールを採用している地域もある。また、不意の段差や出っ張りなど危険箇所に注意の虎マーク（黄色と黒の縞）が付けられることも多い。これらはわかりやすいが、目立ちすぎる。場の雰囲気を壊すことも多い。雰囲気を保ちながら、わかりやすくするデザインが求められる。

逆に、歩道に車が侵入しないように、段差を切下げた所にバリカー（ボラード）が設置されるが、景観を考慮して、床の舗装面と同じような仕上げにしたり、割と目立たないデザインを心がける例が多い。ところがそのようなバリカーは目の不自由な人たちにはきわめて危険である。バリカーは目立つ方が良いか、風景になじむ方が良いか。「わかりやすさ」と「美しいこと」は両立するか、大きなデザインテーマである。

地下鉄などの鉄道の路線ルートについても、色分けによってその違いをわからせると共に、サイン計画として、案内サインにおいてはそのルートが色分けされることはよく目にするところである。さらに、車両の色にとどまらず、駅舎の各部の色彩計画にそのアイデンティティを表出する道具として展開される。

関西弁で言うところの「えげつない」デザインは、商業関係の広告看板でよく見られる。とにかく大きく、とにかく派手に主張する。命に関わる緊急のサインや危険回避の場合はともかく、看板広告はもう少しお上品に、色や形を工夫して、まちの景観を配慮すべきである。直接的な表現だけではなく、もっとユーモアとセンスを期待したい。

景観としてはなじませることが重要な方向であり、識別させることにおいては目立つことを方向性としなければならないという相対立する要求に対して、色をどのようにアレンジすべきかという課題がある。

おわりに

まちづくりや環境デザインにおいて、色とどのように付き合っていくかは大変興味深く、とっつきやすいが、難しいものである。デザインとして様々な要求に応えていくことは必要である。わかりやすいサインを付加していくだけでなく、まちの環境をもっと美しく、わかりやすくするために、まちの中の騒がしい色やものを整理することも大切である。まちの色を私たちの環境と心を癒し、美しく彩るハーモニーとするユニバーサルデザインが期待される。

【参考文献】
※1「サイン環境のユニバーサルデザイン」学芸出版社
※2「五感を刺激する環境デザイン―デンマークのユニバーサルデザイン事例に学ぶ」彰国社
※3「神戸の街のイメージカラーと景観の色彩調査について」日本建築学会一九九四年
※4「視覚障害者誘導ブロックに関する敷設者と利用者の意識から見た現状と課題―福祉のまちづくりにおける高齢者および障害者を考慮したサインデザインに関する研究」日本建築学会計画系論文集第五〇二号一九九七・十二

地域住民が育む美しい景観

公共の色彩を考える会
会長 田村 美幸

会の発端は《都バス事件》

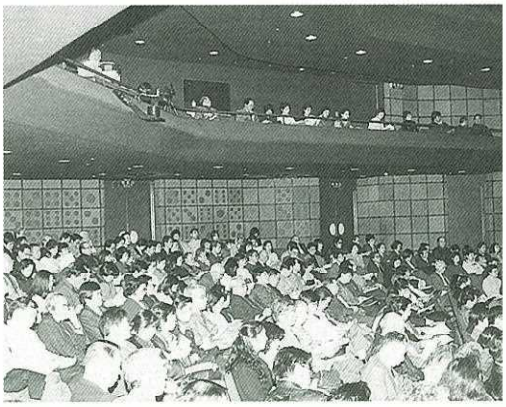
まず今年で発足二十一年目を迎えた「公共の色彩を考える会」の紹介をいたしましょう。

会の発端は一九八一年の《都バス事件》でした。それまでは【ブルーと白】を基調にしたカラーデザインであった都バスの車体が、突然【黄色に濃い赤の帯】という強烈なコントラストに塗り替えられて東京中を走り始めたのです。ただでさえ色彩の氾濫する街の中で「見るに耐えない」と、日本色彩研究所の理事会を中心に結成した「公共の色彩を考える会」が、当時の鈴木都知事に具申書を提出して改善を求めたのです。会の意見は聞き入れられ、専門家の委員からなる都バス色彩懇談会が設立され、実際に都バス四台の車体に塗色して都内を走り、都民のアンケートを基に、現在も走行している【ベージュにグリーン】へと塗り替えられました。

騒色あふれるまちを走る黄赤バス

当時市民が景観の中の色彩について声を挙げて、改善を求めそして聞き入れられたという事件は大変に珍しいことでした。この《都バス事件》がマスコミに取り上げられると、大変多くの都民の方から「自分もひどいバスの色だと思っていた」「よくぞ声を挙げてくれた」「どうぞがんばって欲しい」という電話や葉書が事務局へあったのです。当会はこれを機に、色彩を切り口にして日本の景観を考える会として、二〇年活動を続けてきました。

最初の十年間は専門家の集まりでしたが、十周年を終え私が委員長に就任してからは、誰にでも開かれた、日本の景観を良くしたいと思う市民の会と位置付けました。景観はそこに住む人の感性と文化の水準の現れと考えて、市民の意識を向上して行かなければ、日本の景観は良くならないと考えたからです。現在は三百名近くいる会員の会費で運営している、全国組織のボランティアグループです。


東京シンポジウム会場

東京シンポジウム

この二十年間、会としていろいろな活動を展開してきました。会が主催する催し物の大きな軸の一つとして、年に一回東京シンポジウムを開催しています。毎回テーマを決めて夫々の専門家を交えて意見交換をしています。シンポジウム参加者は日本全国から四百名を超えます。毎年必ず参加する会員以外のリピーターもいます。また地方の会員が中心になって催す色彩シンポジウムの支援をしたり、各地方自治体からの要請で、地域で催される研修会や講演会に、色彩専門家の会員を派遣したり紹介したりもしています。

「公共の色彩賞 ― 環境色彩十選」

活動のもう一つの軸としては、発足三年目から始めた「公共の色彩賞―環境色彩十選」です。今年で十八回目を迎えますので、日本全国から延べ百七十件以上の優秀な環境色彩事例を選んできたことになります。

そもそもこの賞を始めることになったのは、次のような理由によるのです。都バスの【黄色に濃い赤の帯】の色彩デザインを、私たちは『騒音』(noise pollution) に対して『騒色』(color pollution) と呼びました。まちという生活環境における色彩公害と捉えたわけです。マスコミによって報道された《都バス事件》のあと、会には幾つかの騒色事件の相談が持ち込まれるようになりました。《高崎駅前の蛍光赤色カメラ店事件》《巨大赤色ネオン広告塔事件》等々。初代委員長の小池岩太郎先生は、「当会が騒色公害の駆け込み寺だけになってしまってはいけない。日本の環境色彩を良くしていくにはどうするかを考えなくては」とおっしゃって、始まったのが顕彰事業である「公共の色彩賞」でした。「悪い事例だけを取り上げて文句をいうだけではなく、会として、それではどんな良い事例があるかを示して行こうではないか。」ということであったのです。

私達の賞の特徴は、自薦でも他薦でもよいこと。そして会として、その事例を推薦してくださった人に感謝状は差し上げますが、デザイナーや施主を誉める賞ではありません。世の中にこんな良い事例がありますよと、顕かにする賞なのです。

対象は公共空間におけるあらゆる景観要素、町並みのような全体的な景観から、工場、ビル、橋梁などの構造物、ストリートファニチャー、屋外広告物などの工作物さらには電車、バス、タクシーなどの移動物など、大きなものから小さなものまで広範囲にわたります。審査の際に重要視する評価点は、対象の色彩が優れているのは勿論のこと、その事例の裏にある小さなお話、どのようにしてこの色彩景観が作られたかまた、住民がどのようにかかわり今後かかわっていくか、そしてこの事例によって、今後周辺環境への良い波及効果が及ぶかどうかなどを審査します。

私自身第一回の審査委員を経験して以来、十七回の審査委員会に裏方としてかかわってきました。その経験から「公共の色彩賞―環境色彩十選」の入賞事例には単なる色彩の優良事例というだけではすまない、景観づくりの普遍的な共通項があるといえるのです。

公共とは

さてここで当会の名前にも使っている公共という言葉について若干の説明をいたします。公共というと行政の関係している空間と捉えられがちですが、私たちの定義する「公共」というのは私的な空間を一歩外に出たときから目にするあらゆる景観や環境を「公共空間」と呼んでいます。公共の場は皆と共有している場であると同時に自分が生活する場でもあるわけです。共有というのは、自分のものでもあり、自分以外の人のものでもあるのです。この共有するという概念が今の私たちには一番欠けている意識ではないでしょうか。「公共空間」は他の人と共有する場でもあるのですから、おのずからそこには他を思いやるというマナーやルールが必要になってきます。

色彩賞入選事例から

ここでわが「公共の色彩賞―環境色彩十選」の今までの入賞事例の中から幾つかを紹介することにより、いかに色彩が景観における大切な要素であるかをお分りいただけると思います。紙面の関係で多くは紹介できませんが、まちづくりにおいて多くの生活者や専門家また企業をも巻き込んで、その地域独特の工夫と個性とを持った景観づくりをしているかがよく分かる事例を挙げたいと思います。

「神奈川県・横浜市の色彩計画」

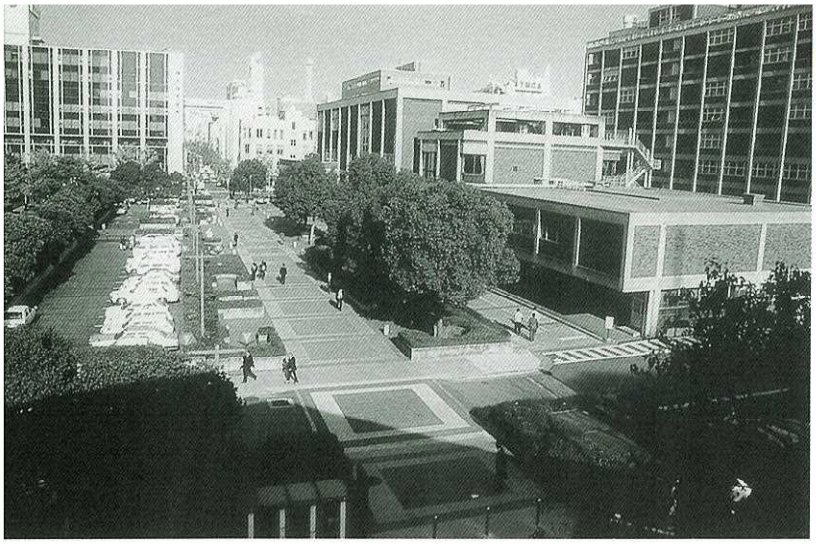
都市の色彩計画について語るとき、横浜市に触れない訳にはいかないでしょう。色彩賞第一回の「市庁舎周辺」から最近のみなとみらい21地区内の「汽車道」までその入賞事例は最多十件に及びます。私自身横浜市民であるので、横浜市の色彩景観は大変関心と愛着があります。

周知のように、横浜市には景観行政の先鞭をつけた都市デザイン室が、全国的にみても早くから設置されました。そして都市の色彩に注目し、行政が積極的に先導してきた色彩先進都市といえるでしょう。

例えば第一回入選の「市庁舎周辺」の色彩計画は、市役所前の楠木広場の

舗装面の茶色と白という色彩を基調色としました。広場に面している多くの建物の外壁を、そのビルの外壁補修工事があった際に一棟ずつお願いして、年月をかけて茶系統に変えてもらったのです。その中には民間のビルは勿論JRの駅舎も含まれています。計画して、最後のビルの塗り替えが終わったのがなんと十九年後といいますから、その粘り強さには驚かされます。

横浜市は〝歩いて楽しいまち〟というコンセプトをまちづくりの基本としています。従ってまちづくりを考える際に市民を巻き込まないわけにはいきません。そういった意味でも横浜は商店街も含めて、市民活動が大変活発な都市です。

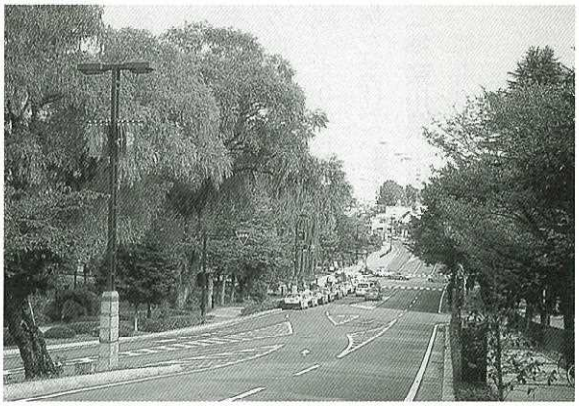

横浜市・市庁舎とくすの木広場

入選した事例を一つずつみてみると、横浜は日本の他の地域と較べて、決して古い歴史的遺産は多くないけれど、残っている横浜の歴史を大切にして、他の何処にも無い横浜らしいまちづくりを目指しているのが分かります。

「宮城県仙台市・大橋から青葉城址に続く道」

杜の都仙台の駅からのメインストリートである青葉通りの延長線上、大橋から青葉城址までがこの青葉山線と呼ばれる道路です。多くの公共施設が点在しているこの道路上の信号機、照明、県警ボックス、駐車場案内板などの道路付帯設備は伊達政宗の陣羽織に由来する茄子紺色で統一されています。

その後のつづき話があります。この事例の推薦者は仙台に住む当会の会員である村井さんです。村井さんは地元で数人の有志とともに仙台市の色彩を考えて行政に提言するグループを結成しています。そのグループで色彩賞入選の賞状を仙台市の担当部署にプレゼントし、大変喜ばれたという話です。

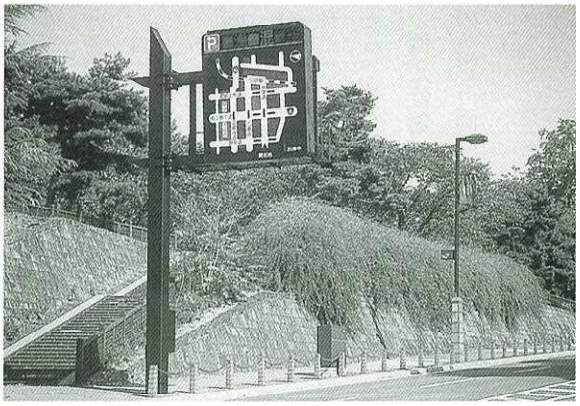

仙台市・大橋から青葉城址に続く道

市役所の人から「市民からは苦情ばかり持ち込まれるのに、お褒めの賞状を貰えて、こんなに励みになることは無い」と感動してもらったと村井さんから聞きました。

これぞ色彩賞の嬉しい結果です。そして彼らの希望はこれで終わりません。この青葉山線の色彩統一を、是非青葉通りでも行って欲しいと、今後市役所へ働きかけると言っているのです。市民と行政とのパートナーシップの重要性は自明の理ですが、市民からのこうした働きかけは今後景観を良くする上で大切な要素となるでしょう。

「島根県・大森銀山街道」

かつて十六世紀から十七世紀にかけて石洲銀を産出した大森銀山は、伝統的建造物群保存地区に指定されています。新しく家を建て直すときも、町並みに合った、地元産出の濃い赤色の石見瓦をのせた木造家屋を、地元の大工さんが建てています。

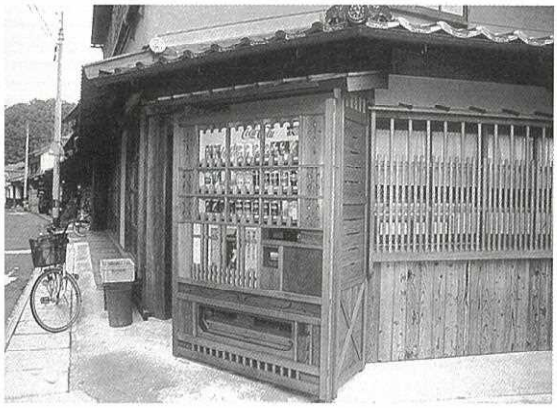

仙台市・大橋から青葉通りに続く道

ここは公共の色彩賞に二度入選しています。一回目はその町並みで、家並みのみならず、あらゆる細かいところに様々な工夫が凝らされています。それも専門家ではなく市役所の担当者と大工さんが、地元のお年寄りに聞きながら柿渋に煤を混ぜるというような昔の手法で、新しい郵便受けを塗ったりしています。その古色に対する工夫とこだわりを評価したのです。

二回目は町並みの中の自動販売機が入選しました。自動販売機については、

存在そのものが町並みを壊すという理由で、むしろ景観の阻害要素と捉らえられていますが、大森銀山のような観光地では、観光客へのサービスの一環としてもその存在を否定できないのが現実です。その現代的装置である自動販売機を、伝統的な町並みのなかで積極的に工夫することによりむしろ景観を良くするプラス要因に変えたことが評価されました。大変高価な自販機となったようですが、これも町並みに対する住民の理解と協力がないと実現できなかった事例です。

島根県・大森銀山街道の町並み



島根県・大森銀山街道の自動販売機

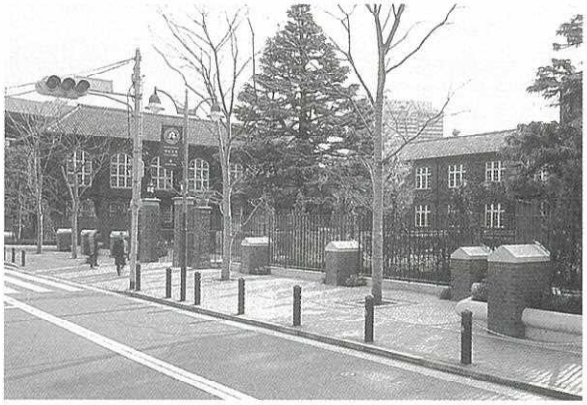
「東京都・立教大学キャンパス景観」

九〇年近く池袋にあって、地元住民に親しまれてきた立教大学の構内の六棟が東京都の歴史的建造物に指定されています。伝統的材料である「焼きすぎ赤レンガ」を使ったこれらの建物群の色彩を基調として、近年キャンパス内の建替え、改修整備を行ってきました。本館の補修にはこの「焼きすぎ赤レンガ」にこだわり、韓国からの輸入レンガで補修したといいます。

また、地域に開かれたキャンパスを目指している立教は、閉鎖的であったコンクリート塀を壊して、レンガ造りの校舎群に相応しい門や塀を新たにデザインしました。これは地元からの要望に応えたというのだから素晴らしいと思います。地域のシンボルに相応しい景観に仕上がったのはこの門と塀によるところが大きく、アクセントに白を用いて軽やかな仕上がりとなっています。

また豊島区も周辺地区の景観指導に、レンガ色に調和する色彩を用いるように要請しているといいます。区立の小・中学校は勿論、マンションや南側の都市計画道路の色彩まで、この町並みの色彩が波及効果となって広がっています。クリスマス時期には、正門の両側にある樅の木にデコレーションを施し多くの人が見物に訪れるということです。

大学と行政と住民とが、みなこのキャンパスを地域の財産として大切にそして誇りに思っている事が分かり、公共の色彩賞のお手本ともいえる事例です。



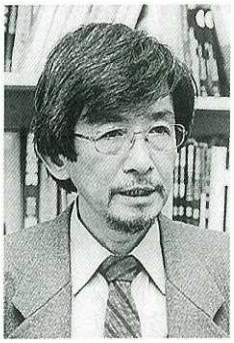
東京都・立教大学

おわりに

このように色彩賞に選ばれた町並みの事例をみてくると、地域特性を生かした環境色彩とは、その地域独自の歴史からの色彩を掘り起こして、地域住民が納得するものを選んでいることが良く分かります。時には行政指導で決定されるもの、また住民を巻き込み、さらに色彩の専門家の助言を得て、丁寧に時間をかけて考えられ、決められたまちは西欧の真似ではないまさに日本独自の歴史や地域特性から工夫された、他の何処にも無い景観といえるでしょう。これらの個々の集積が結果的に日本的な景観といえるのです。

土木の色

爽やかな風景のために



東京大学工学部
教授 篠原 修

基本は素材色

「土木・建築の基本は素材色です」。随分前のことになるが、建築家芦原義信先生は筆者のインタビューに答えて、こう言われた。その意味は、環境を形づくることになる土木や建築の構造物は形や空間で勝負すればよいのであって、色で誤魔化してはいけないということであろう。僕も全く同感で、石を使う川の護岸やコンクリートの橋、トンネルの坑口等に色を考えたことはない。しかし、橋も鉄となると色を考えざるを得ない。又街路の場合にも舗装の色は考えねばならない。ここ十五、六年程のデザインの経験から土木の色をどう考えているかを述べてみよう。

橋の色

橋の色を決める場合にも例に漏れず、周辺環境との調和がスローガンになっていて（本当に我が日本民族は「調和」という言葉が好きなんですね）、作業は架橋地点の色の調査から始まる。しかしこれは僕の経験から言うと、口で言う程簡単な話ではない。日本という国は四季の変化に富んでいるので、春の新緑、夏の濃緑、秋の紅葉、冬の枯木のどれに照準を合わせたらよいのか迷うのである。又、北国になれば雪が降り、周辺の風景は一変する。時に色彩の専門家と称する人が出て来て、色彩調和論を片手に説くのだが、これも疑わしい。色彩調和論なるものは同素材に塗られた、しかも隣接する色同士の関係を前提に組み立てられているので、橋の鉄、周辺の植物、下を流れる水、背景となる空（大気）と素材もまちまちなら隣接もしていない橋の色決めには適さないと思うからである。

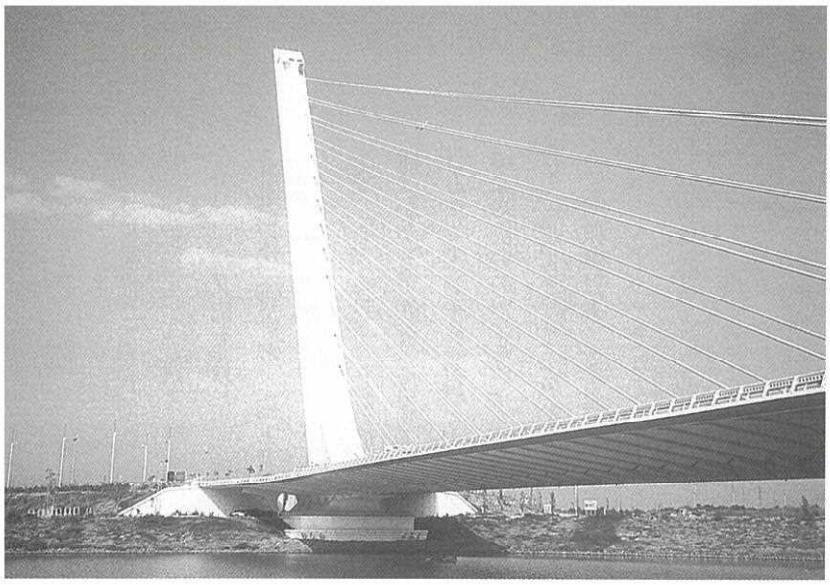
周辺環境との調和と同等に重要だと考えているのは橋の形と色の関係である。形にはそれに合う色というものがあって、橋の形の特徴を殺すような色は使いたくない。あたたか味を狙った形にはあたたか味のある色を、シャープな橋にはシャープな色を使いたいのである。橋も建築もやるスペイン出身のエンジニア・アーキテクト、S・カラトラバはオフホワイトの色しか使わない。鉄の構造物だから素材色というわけにはいかないが、形と空間を見て

江戸川区辰巳新橋。シンプルでシャープな形に合わせてシャープな色を選んだ。

下さいという自信があるのだろう。色味は使わないのである。

S・カラトラバの色の対極にあるのがテムズ川に架かる橋の色だろう。赤あり黒あり、ブルーあり。時には同じ橋がツートンカラーで塗り分けられている。やっぱり形に自信がないのか、とつい疑ってしまう。何度見ても余りよい趣味ではない。

という具合に考えていて、デザインを始めた頃は色よりも形を優先していた。恐らく土木、建築、ＩＤを問わず造形に係わる人間はそうなのではないかと思う。基本は素材色、色には余り煩わされたくないと思っている筈である。ところが普通の市民や子供は違う、ということに、いつの頃からか気づき始めた。我々は話をしていて、ところであの橋は何色だったっけ、と言われても色は覚えていないのである。形と空間を造るという商売柄、形のほうにばかり目がいくからであろう。しかし、市民や子供たちは、赤橋、赤鉄橋などと色で覚えていて、親しみを込めて橋をそう呼ぶのである。これはもっと色に気を使わないとまずい。橋を市民や子供たちに愛してもらう為には、と思い始めたのである。



Ｓ・カラトラバの橋の色は常に白である。（アラミージュ橋）

だから、名神高速道路の大山崎橋の色の塗り替えには随分気を使った。開通以来の色は鮮やかな朱色で、記録を調べるとシャンゼリゼ・ルージュにしたとある。何故京都にシャンゼリゼなのか不可解なのだが、わが国初の高速道路を華やかに演出したかったのかもしれない。当時の事情を知っている恩師の鈴木忠義先生に塗り替えてもよいかどうかを確かめ、ＯＫを貰った。問題は橋の直近にある小学校だった。校庭に立つと、なる程橋はよく見える。ここでも例に漏れず、赤橋の呼称で児童に親しまれてきたのだと言う（我が日本民族は調和も好きだが、赤も好きなんですね）。

橋を校庭から見上げ、走行するつもりになって縦方向に眺め、背景を空にして眺め、山にして眺め、一緒に考えた南雲勝志さんと利休鼠色に決めた。空にも山にも融け込んで品のよい色である。子供達が橋を今、何と呼んでいるか、些か気がかりではあるが。

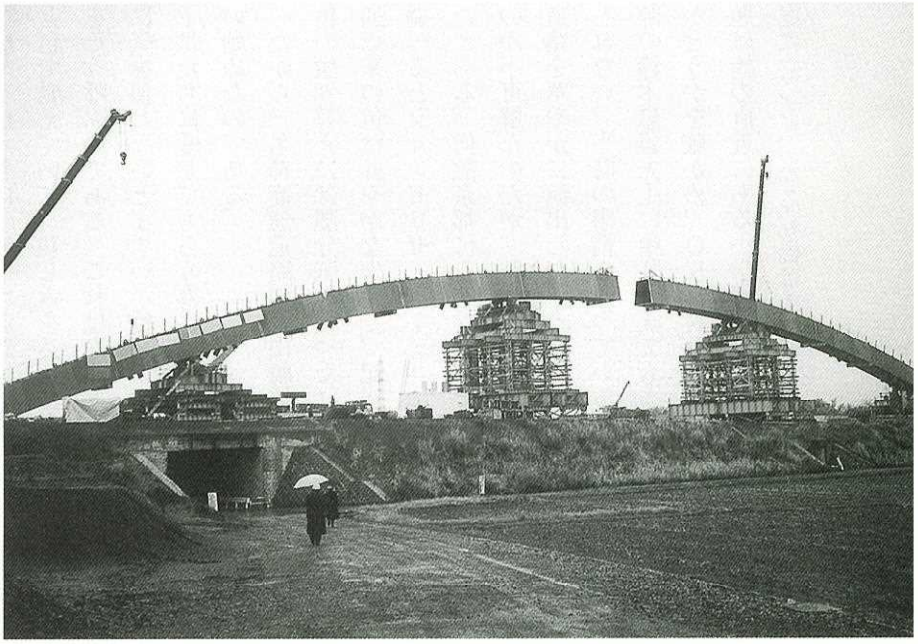
さて僕が橋の色をどうやって決めているか、それを簡単に紹介しておこう。まず始めにデザイナーと一緒に（この頃はもっぱら先述の南雲さんと組んでいる）、色見本から候補色を五、六選ぶ。塗料メーカーの類の見本は使わない。あれは満遍なく、もれのないようにという風に作られていて、良い色を出そうと考えているわけではないからである。伝統色の色見本を使う。次にその候補色を畳一畳大の鉄板に塗ってもらい、最後に現場で見る（最近の例では第二西海橋のように、より現実に近い

勝山市勝山橋。ここは難しかった。近くの山、遠くの山並、下を流れる清流九頭龍川。新緑に杉の暗い緑、冬の雪景色。苦心の末にアーモンドグリーンとした。

パイプを製作してそれに塗ってくれる場合もある)。近くから遠くから、空を背景に、又山を背景に関係者一同で(事業主体、設計者、施工者に加え出来れば地元の人々にも)、あれこれと議論しながら見る。最低でも二、三時間はかかる。鉄板の色見本を作り、当日もクレーンや作業員を手配しなければならないので手間は大変である。しかし、僕にとっての初めての鉄の橋である明和橋以来、東京湾横断道もその他の橋もずっとそれでやってきた。ちいさな紙に塗られた色見本を室内光線で見ても、何もわからないと思うからである。

俗に十人十色と言うように、色は人により好みがあって形よりも合意がとりにくい。色は難しいとずっと思っていたのだが、振り返ってみると面白いことに気づいた。前述のように現場で色をみて議論すると不思議なことに落ちつく所に落ちつくのである。そう意見が違うわけではない。思うに室内で紙の色見本やCGと称する本物とは全く違う色のモンタージュを見て、個人が勝手に想像するから意見がなかなか収束しないのだと思う。

橋の色決めについては各々に思い出があるが、極く最近の謙信公大橋の色の話をしてこの項を終わろう。色はコンペ応募の時から一緒にやっていた大野美代子さんとイエロー系でいこうと決めていた。理由は至って簡単で、橋が架かる上越市は十一月ともなるとしぐれ模様となって空は曇天となり、雪を交えつつの天気が三月まで続くのである。関東人の僕から見ると北陸の冬は暗く、重い。勿論、春も夏もあるわけだが、どうしても気持ちが暗くなる。冬に人々を元気づけようと思い、無彩色の環境に映えるイエロー系を、と考えたのである。



上越市謙信公大橋。現場での色彩検討の状況。曇天には稲穂色が似合う。

例によって鉄板に塗った候補色を見てもらったが、この時は地元の県や市の人々の合意は得られなかった。イエロー系の橋を見なれていないことに加え、気候のよい季節だったのでピンとこなかったのである。再度、今後は冬の曇天下で皆に見てもらった。成程、篠原さんの言っていることがわかりましたよ、地元の人がそう言ってくれた。よかった。但し、色彩の専門家、吉田慎悟さんの意見はもっとハイブロウなものだった。白いアーチリブに白い雪が降る。その方が詩的ですよね。それは僕にも魅力的なシーンなのだが、地元の人は余りに寒々しいと思うだろう。色は黄色ではなくて稲穂色と呼ぶことに決めた。

舗装の色

「篠原さん、どうしてパリという町の色はああいう風になっているのか、わかりますか」。これも芦原先生との話である。パリの町の色は建物が石灰石系の白、道路は歩道も車道もより暗い自然石のピンコロである。色味は無い。芦原先生の説によれば、女性が鮮やかな口紅を塗って町を歩く時、あるいは洒落た赤いコートを纏って歩く時、女性が美しく映えるように町の色が出来ているのだ、と言う。成程、言われてみればそうかも知れない。パリはファッションの町である。こういう具合に女性を大切にするという点からすると、我が日本の町の色はそのほとんどが失格である。騒色の町をいかに着飾って歩いても、鮮やかな広告、看板、色とりどりのネオンには勝てない。舗装も例外ではない。そこの所がなんとなくわかっているのか日本の女性は黒、白などの地味な色を着るのかも知れない。

それはさておき、街路のデザインに係ると現場の担当者はカラー舗装は何色にしましょうかと聞く。折角景観や

デザインに力を入れてやるのだから、アスファルトそのままや無彩色のタイルはないでしょうと思うらしい。こういう場面では芦原先生のパリの町の話をする。相手はわかったような、わからないような顔をして、しかし引き下がる。

カラー舗装も大変だが、模様はもっと手強い。七、八年前のある日、小倉の紫川の橋を見に出かけた。ジャーナリズムで一頃話題になっていた橋である。何とも妙なプロパンガスに火を灯す「火の橋」を見て、「太陽の橋」に廻った。ここには歩道面一杯にカラータイルでヒマワリの模様が描かれていた。何故ヒマワリか、太陽の花ヒマワリ、ゴッホのヒマワリなのであろう。

小倉市太陽の橋のヒマワリ模様。ともかく強い。その上を歩く人間は簡単に負けてしまう。

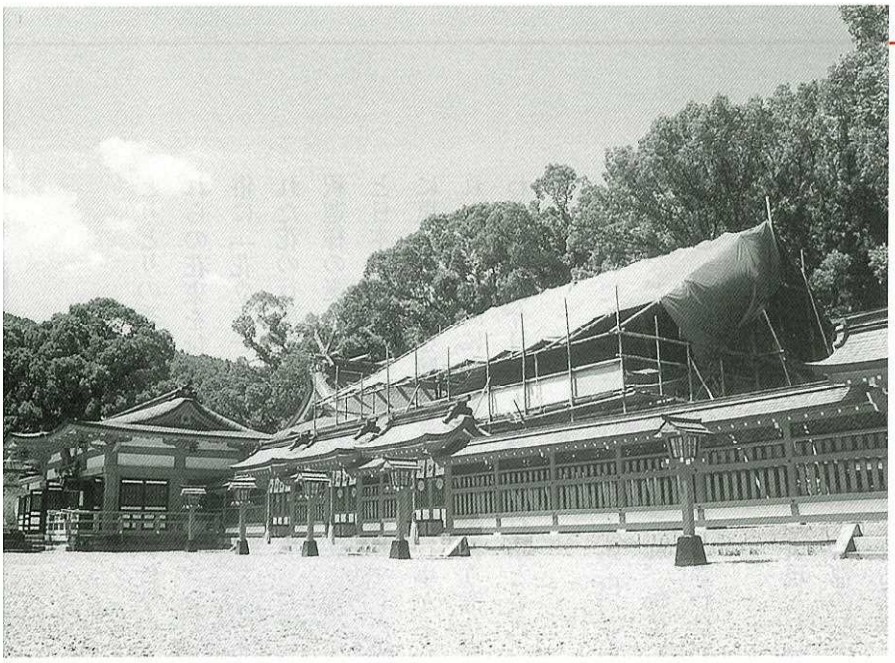
それは決して悪い出来ばえではなく、市庁舎のホールの壁にでもあったらよいのにと思うものだった。しかしそれが路面にあるとは。芦原説に従えば最悪である。一寸やそっとの着飾り方ではこのヒマワリには勝てない。女性が目立たないように、見劣りするように仕向ける装置であるとしか言い様はない。

舗道の目的は人をして舗装の状態などを意識させずに快適に歩かせることである。時にはのびやかにジョギングをさせることである。妙に模様を入れて目がチラチラするようではまずい。皇居周辺道路の整備では中村良夫さん、中野恒明さんらと討論して膝と足首にやさしいアスファルトを採った。場所柄、当時は仮舗装と受けとめた人も居たようである。何故石畳みにしなかったかというと、ジョギングにはげむ人を考えてのことである。ジョギングの路以外は石の舗装としてある。

前述の吉田さんによれば環境色の基本は土にあると言う。言われてみればその通りで、かつての道は勿論の事、家の壁や屋根の瓦もその土地の土で出来ていたのである。それでこそ風景の色合いはしっとりと落ち着いていたのだ。小野寺康君とやった浦安の境川ではINAXのソイルセラミックスを使った。土地の土を約三〇%混ぜることの出来るタイルだからである。浦安は漁師町で、かつての道にはアサリの貝殻が敷きつめてあったと聞いて、タイルの表面にはくだいた貝殻を混ぜてもらった。施工も終り間際になって見に行くと、実に足の裏にやさしそうである。思わず裸足になってその上を確かめるように歩いた。久しく忘れていた子供の頃の感覚がよみ返ってきた。やっぱり素材（土の）色かぁ。芦原先生のうなずく顔が目に浮かんだ。

浦安市境川のソイルセラミックスのタイル舗装。裸足で歩きたくなる筈です。

（酸化鉄）を混ぜたものを塗った櫛や木器が出土しているが、当時なぜ赤色を必要としたのかは不明。そして弥生時代にも土器にベンガラを塗った祭祀用と目される容器が出土しているが、この場合は神祭に伴う非日常的な容器として普通の容器と区別する必要があったのであろう。また古墳石室の天井部一面に或いは石棺内部の死者の周囲にベンガラ土を撒き散らした例があることから、古墳時代には暗黒の死者の世界と赤色との間に何らかの関係のあったことを窺わせる。そして奈良・平安時代には全体に朱色を強調した寺社建築が造られ、奈良の都の枕詞である「あおによし（青丹よし）」の表現のように、都には丹塗（ベンガラ塗）で真っ赤に彩色された寺社がいかに多くあり目立っていたのかが注目される。さらに江戸時代に赤色は疱瘡病など疫病退散や魔除けの色として使われ、赤い鎧を着けた鎮西八郎為朝や赤い肌色の金太郎の刷り物、赤本の類いが護符として売り出されていた。



熊野神社本宮（和歌山県）朱塗りの柱や梁が古代的である。

つまり日本では歴史的に赤色は呪術的力をもった色とされ、災厄をもたらす悪魔を祓う色と認識され、他方、祝意やハレ感覚を表現する非日常的な色として我々の生活文化のなかで息づいてきた。しかし、一方で赤は穢れたマイナーな色としてタブー視する傾向がある。特に女性の産褥にともなう血や月経の血などの出血を赤不浄と称し、漁村では忌み嫌う風潮があった。

黒色の色彩文化

こうした祝意を表すハレの世界と不浄を意味する穢れの世界という相対立する性格をもった色彩は、赤色以外にも黒色と白色がある。黒も古代の縄文時代からは漆に炭粉を混ぜたものを塗った容器が福井県の鳥浜貝塚や青森県の是川遺跡・亀ケ岡遺跡などから出土しているが、ここではなぜ黒色なのかは不明。

しかし黒色が世界で共通しているのは、闇夜のイメージから死後の世界を指し示した色の認識がある。その死後は永遠の闇の世界であるから人々にとって恐怖の対象となり、故に黒は常に宗教性をともなう色であった。わが国では中世に鬼女の棲み家を黒塚と称して恐れたり、黒い色をした鳥の烏や鵜はこの世とあの世を往来する鳥と目され、信仰の対象ともなった。例えば能登半島の気多大社で中世以来、毎年十二月に行っている鵜祭には、真夜中の海岸の暗闇に海烏（うみがらす）とも呼ばれる鵜を放ち、鵜が海の方向に翔べば来年は豊漁、陸を目指せば豊作とする吉凶占いを行っている。また死者の世界である隠國（こもりく）に由来する熊野信仰も三本足の烏、八咫烏（やたがらす）が霊鳥として信仰されてきた。

こうした黒色は、特に江戸時代になると武士たちが羽織の色として志向し始め、また吉原の遊女のあいだでも粋な感覚の色として新

葬儀には赤の宗和膳椀が使われる。
（石川県・金沢市）

たに嗜好性の強い色となって登場する。それは黒色の漆喰壁や門、塀などの建築塗料としても使われ、例えば江戸の下町では遊女を身受けし、妾として囲った家の塀は粋な黒塀とされるのが定番であった。さらに明治時代に入ると、文明開化を表す蒸気船をはじめ機関車、人力車、蝙蝠傘にいたるまで黒色で表現され、黒は近代を告げる最先端の色となった。

白色の色彩文化

他方、白黒をつけるというような囲碁の用語が物事の決着を示す意味で使われるように、黒に対立する色として白色がある。

白はわが国をはじめ東アジアでは素地や生地の色であり、無色を意味してきた。特に人が死ぬと葬儀には必ず白衣を着用する慣習が日本や中国、朝鮮半島に共通してある。それは人をはじめ、あらゆる生命体が死滅すると黒化するから、死者の黒に対して生命力を表す生地としての白を儀礼のなかで強調したからであろう。その背景には古代中国で考えられた陰陽五行思想の影響もあるが、特にわが国の場合は人の死の情況に際して、俗に黒不浄と呼ばれるようなある種の穢れ感覚をともなう点が、東アジアの他の民族と異なっている。すなわち日本人は死者には穢れがあるので、その穢れが自分に憑かないように白色の衣類を着用し、また塩などで身を清める必要があった。

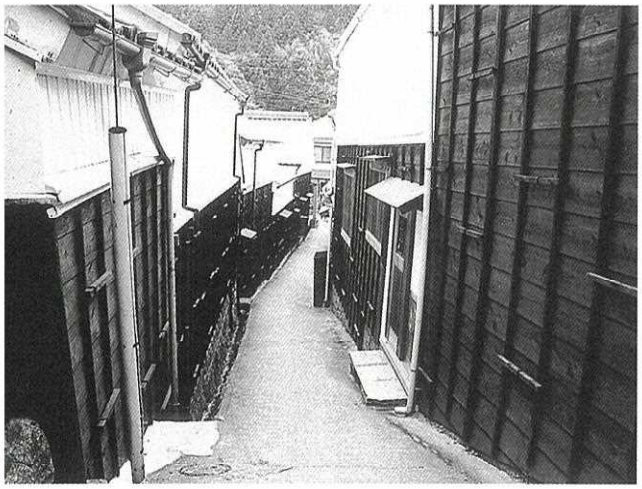
この場合の白は生命力を表す色であり、前述したケ（褻）の色ともいえる。ケとは本来日常性を表し、生きていく活力を示した言葉であり、このケの力が衰えた状態が「ケ枯れ」すなわち「穢れ」であり、視覚的には黒化した状態を示している。

さらに日本人は神を白色と考えてきた。神々の化身には白い髭の老人をはじめ白鳥、白鹿、白蛇、白鷹、白雉、白鼠、白狐、白狼など白い動物が神話や伝説で語られている。また正月のお鏡餅も正月様の神を象ったものとされるように、わが国の神々はわれわれの災厄を除去し、同時に日常性を維持し日常を豊かにしてくれる力をもつもので、それは穢れを祓い、ケの力を回復させることを意味してきたのである。祭や年中行事はそのケの力の衰えを回復するための仕掛けの装置であり、その回復の情況をハレ（晴れ）と称してきた。

したがって、このようなケ枯れ情況とは白が黒に変化すると同時に赤化するのもケ枯れであり、そのことは無色のものが有色に変化したことを指し示している。

話を最初に戻すと、日本の民家は白木や土壁、茅屋根などの自然素材で造られ、その佇まいがケの世界の表現となるが、逆に青丹よし奈良の都のような丹塗の建築群は黒の穢れと同じ穢れた世界となるはずなのに、一方で赤色は太陽や血を表すエネルギッシュで刺激的な色彩効果をもつことからそれを利用し、都にふさわしい色彩環境を造りだしてきた。いわば赤はわが国では都市を都市らしく表現するための最適の色と考えてきた一面がある。

以上、日本の色彩文化を若干でも読み取ってみると、単なる視覚的な表現文化とは言えない微妙な色の使い分け文化が見えてくる。色は特に近代以降になると社会的な記号、サイン化の傾向が強まり、そんな色に因む新たな比喩をともなった言葉の文化も登場し、より複雑な色彩文化が出現するが、我々日本人の根底に流れている色彩感覚は、長い間に血肉化されてきたものだけに簡単に消えることはなく、むしろ現在は日本人らしさを世界に示すことのできる最上の表現手段となっているのではなかろうか。



マンリン小路の黒板壁（愛知県・足助町）

我が国の国際競争力強化に今、求められていること

戦後日本は急速な経済発展を遂げたが、近年では国際競争力が著しく低下しているとの懸念がある。国際経営開発協会（IMD）の調査によると、成長率、産業基盤、政府の効率性等の観点から見た日本の国際競争力ランキングが、一九九七年の十七位から二〇〇一年には二六位まで低下したとしている。

では、企業活動が容易に国境を越えるという現況の中で、国全体の国際競争力を維持・強化していくためには、どうしたらよいのだろうか。以下のことが考えられる。

1. 競争力の高い産業が集積するように、企業から見て国際的に遜色のない経営環境を提供する。

企業からみて、魅力的な経営環境とはどのようなものであろうか。この点に関し、世界銀行の調査において、主要製造業にアンケートを行い、企業の活動拠点の立地を決定する上でどのような要素が優先されるかをランク付けしたものがある。これによれば、「先進的社会資本＝情報技術を通じて高度化され、革新的な供給者により提供される交通・コミュニケーションシステム」を備えているという条件が重視されている。したがって、国の競争力を確保し、一定の経済成長を図るためには、高度な機能を備えた国際交流・物流基盤を整備することが重要となる。

2. 経済の中心である大都市の競争力を高める。

競争力のある大都市における人やモノの集積は、産業や生活、文化において創造的な活動が活発化し、経済成長や豊かな生活、斬新な文化の創出につながる。国際競争力のある大都市においては、このような創造と発展のダイナミズムが展開され、国の競争力も高めることになるのである。そのためには、都市構造を改める等総合的な都市再生策を講じていかなければならない。

3. 産業の国際競争力を高める。

国土交通産業においては、建設・交通等の分野に係る技術、基準や制度についてグローバル化が進展しており、これらの分野において我が国の技術・基準が世界的な標準となるよう努めることは、我が国の国際競争力の強化のためにも不可欠であると考えられる。

国・地域の国際競争力ランキング

順位	1997年	2001年	順位	1997年	2001年
1	アメリカ	アメリカ	16	ドイツ	イスラエル
2	シンガポール	シンガポール	17	日本	ベルギー
3	香港	フィンランド	18	台湾	台湾
4	オランダ	ルクセンブルク	19	スウェーデン	イギリス
5	ノルウェー	オランダ	20	オーストリア	ノルウェー
6	カナダ	香港	21	アイスランド	ニュージーランド
7	フィンランド	アイルランド	22	フランス	エストニア
8	ルクセンブルク	スウェーデン	23	ベルギー	スペイン
9	イギリス	カナダ	24	チリ	チリ
10	アイルランド	スイス	25	イスラエル	フランス
11	ニュージーランド	オーストラリア	26	スペイン	日本
12	スイス	ドイツ	27	中国	ハンガリー
13	デンマーク	アイスランド	28	アルジェリア	韓国
14	マレーシア	オーストリア	29	フィリピン	マレーシア
15	オーストラリア	デンマーク	30	韓国	ギリシャ

注：国際経営開発協会（IMD）調査により作成。

KEY 75 WORD

平成13年度国土交通白書より

良質な住宅ストック流通に向けて

我が国の住宅整備の状況を見てみると、世帯総数約四四〇〇万世帯に対し、住宅ストック総数は、約五〇〇〇万戸と世帯数を上回る水準に達し、量的な面では整備が進んでいる。さらに、持家に関して言えば、戸当たりの平均床面積は、欧米のそれに引けを取らないレベルに至っている。

しかしながら、住宅総数のうち一〇%余りを占める空家ストックの内容をみると、建物の主要部分に腐朽や破損など不完全なところがある「大修理を要する」ものや、柱の傾斜、屋根のゆがみなど寿命が尽きていてこれ以上もたないと思われている「危険又は修理不能」のものも含まれているため、実際の余裕率は、相当落ちるのが現状である。

また、中古住宅の流通は欧米諸国と比べると極めて少ない。例えば、アメリカと中古住宅流通量を比較すると、アメリカでは十八・四戸／千人であるのに対し、日本では〇・九戸／千人（一九九八年）とアメリカの約二〇分の一程度に留まっている。

日米の人口1,000人当たりの住宅着工戸数及び中古住宅流通量の比較

注：アメリカ「Construction Review,Statiscal Abstract of United States」
日　　本「住宅・土地統計調査」（旧総務庁）、「住宅着工統計」（国土交通省）

このような、ストックの質が必ずしも高くない状況や、中古住宅の流通しない現状の要因として、適切なリフォームがなされていないことや、中古住宅流通のための環境整備がなされていないことが考えられる。

このため、リフォーム市場の活性化に向けて、

・標準的なリフォーム工事契約書等の作成・普及
・リフォーム事業者に関する情報提供システムの整備
・住宅部品の取り付け部分の標準化

などの施策を実施していくことが求められている。

また、中古住宅の流通促進に向け、

・中古住宅の検査制度、性能表示制度の整備・促進
・中古住宅の不動産市況情報の提供促進
・価格査定システムの構築

など施策の展開が必要となっている。

今後は、こうした施策を通して、新築だけでなく、ストックの有効活用を進めていく必要がある。

土と文　第十九回

日本の文化を守る橋・渡月橋

平野　暉雄［ひらの　てるお］
㈱景観技術センター代表取締役社長。景観設計・CGフォトモンタージュの業務に携わる。
立命館大学非常勤講師、土木を撮る会関西支部長。
著書に、写真集「日本の名景　橋」（光村推古書院）がある。

立命館大学で十数年、非常勤講師をしており、毎年、京都嵐山大堰川に架かる渡月橋について、この橋の桁の材料は、木か、コンクリートか、鉄か、何れかと聞くと、ほとんどの学生は木かコンクリートと答えます。実際は、鋼桁です。詳しくはSRC構造（鉄骨鉄筋コンクリート）です。

このシリーズでも述べられていますが、日本は木造の文化圏です。この橋も昭和九年までは木橋でした。

この橋が最初に架けられたのは、今から千二百数十年前奈良時代の可能性が指摘されていますが、確かなのは平安時代に入ってからです。嵐山周辺は平安京の洛外にあたり、風光明媚な処から院の離宮や多くの寺院が建てられました。橋の対岸には虚空蔵菩薩像が安置されている法輪寺があり、参拝する時にこの橋を渡ります。そして、寺が維持管理をしていたことから当時は「法輪寺橋」と呼ばれていました。鎌倉時代に入り貴族の避暑地、紅葉の名所としても定着し、貴族の舟遊びも盛んに催され、多くの歌に詠まれました。亀山天皇が「くまなき月が渡る」のに似ているという意味から「渡月橋」と名付けられたといわれています。

現在の位置に橋が架けられたのは江戸時代初期、角倉了以によって、大堰川の上流保津川の開削が行われた時です。その後何度も流失を繰り返しましたが、昭和九年全面改築にあたり、余りにも有名な景勝地の橋のため、外形上は従来の木橋の形態を保存し、かつ、規定街路橋としての強度を保つ必要から、単純鋼桁鉄筋コンクリート橋が採用されました。

なぜ、多くの方が木橋と勘違いするのか、それは、高欄と桁隠しが木で出来ているためです。そして、木橋の形態を保つために多くの工夫がなされています。

当時、鋼桁の場合は桁長二〇m以上が可能でしたが、木桁の長さより径間が決められているため、一径間一〇・三mそして径間数は十五径間全長一五八mとされました。

通常、幅員が十一mの場合四主桁程度ですが、桁高を低く押え、木桁のイメージを表現するため、桁間隔一mの十二主桁にしています。そして、実際、桁下から見ても、鋼桁は木の表現に近い高さ四二cm幅二〇cmのコンクリートでおおわれていて見えません。さらに、側面の桁隠しにより木桁のイメージになっています。

床板厚は平均二五cmですが、端部が見える所は桁隠しとの工夫で敷板としての厚さは五cmです。（現在は歩道部が設けられ、さらに十五cmほど厚くなっています。）外側から見た場合、主桁も敷板（床板）も見える所は木材としての大きさです。

高欄は檜材を用いた古くからの格子様式が採用され、洛中の三条大橋の笠木は磨き丸太ですが、ここは洛外なので角材が用いられて

晩秋の渡月橋

います。親柱は簡素な一尺（三三cm）角が使用され、より一層素朴な木橋の形態が保たれています。

橋脚は直径五〇cmの鉄筋コンクリート円柱が四本、一番目立つ外側に木製の斜杭が設けてあり、また、桁受け梁も陽のあたる部分は角材のイメージで、雰囲気的に木製橋脚に見える工夫が施されています。

この橋の技術には、京都の料理人の素材への工夫や、お客に料理をさし出す時、大きな男の手をいかに小さく見せるかという工夫のような、さりげない気配りがなされていて、料理人と共通したものが感じられます。

架け替えられて七〇年近く経ち、昭和五〇年には歩道部が取り付けられ、平成十三年には、老朽化に伴い修復がなされましたが、頑なに守られてきた木橋のイメージが、歩道の石張りなどで日本文化の橋から遠ざかり、少し無頓着になってきているように感じられます。

風光明媚な嵐山の自然を引き締める渡月橋は、平安時代から四季折々多くの人が訪れ、多くの歌に詠まれ、舟遊びなど盛んに催され、現在も年間約四千万人といわれる京都への観光客の心を和ませてくれます。また、法輪寺は十三参りでも有名です。数えで十三歳の春に参拝し、好きな字一文字を半紙に書いて福徳知恵を授かり、お参りのあと、渡月橋を渡りきるまでに後を振り向くとせっかく授かった知恵が逃げるという言い伝えが今日まで続いており、心に残る橋です。

ここ四〇数年自動車社会になり、機能性、安全性、便利さ優先の物つくりでしたが、日本の木造の文化、木の温もり、暖か味が感じられる敷板を敷いた路面、歩行者優先の橋になれば、より一層心和む橋になるでしょう。

世界に数少ない木造の文化、伝統ある木橋が多くかかることを望みます。

参考文献　松村　博「京の橋ものがたり」（京都文庫）

八岩まどか

冬の北陸は何といってもカニ

福井県越前岬

正月明けの一月末、冬の味覚を求めて北陸へと旅に出た。お目当てはもちろん越前ガニ。十一月から三月末まで福井県沖でとれるズワイガニは、越前ガニと呼ばれている。近海ものだけに、冷凍せずに水揚げされる。茹でガニもいいが、新鮮さを味わうには〝洗い〟が最高。冬でなければ食べられないものだ。口の中でカニ独特の甘みが広がっていく。

まずは公共の露天風呂「漁火」でひと風呂あびる。若狭湾を眺めながら入る温泉は開放感たっぷりだ。湯から上がってぶらぶらと歩き始めると、ホワッと美味しい匂いがした。露天風呂のすぐ前にある料理屋から漂ってきている。匂いに誘われて、今日はここで昼食。この店も結構美味い。カニ、焼き魚、煮魚、刺身など海鮮づくしの御膳が二千円ほどで食べられる。ここに寄っただけでも、越前海岸に来たという実感を味わえる。

実は、この露天風呂近くの越前くりや温泉に美味しいカニ料理を食べさせてくれる宿があって、泊まりたいと思ってきた。しかし残念ながらすでに予約客でいっぱい。漁師さんのやっている温泉宿で、カニづくしの料理が格安の値段で食べられるとあって、常連客が多く、冬の時期にはいつも満員の状態である。これではしかたがない。越前岬まで足を延ばして越前玉川温泉に宿をとることにした。もっとも、この時期には、どこの宿でもカニづくしの料理が出るから、食いそびれるということはない。その夜の食膳にも、カニ料理が並んでいた。

翌日、朝食をとってから、今日はどこに行こうかと迷っていると、「お時間がおありでしたら、越前岬をご案内しましょうか」と、フロントの若い男性が声をかけてくれた。いつものように汽車を乗り継ぎながらフラフラと旅をしている身なので、手持ちぶさたに見えたのだろう。せっかくの親切を無駄にすることもないので案内してもらうことにした。

越前岬は、日本海の荒波や風雨によって造られた断崖・奇岩が連なっている。しかも、まるで人が近づくのを拒むかのように、海際まで山の斜面がせり出している。そんな荒荒しい自然の表情に気を取られていた私だったが、ふと、山の斜面に目を移すと、あたり一面が黄色く染まっているのに気づいた。

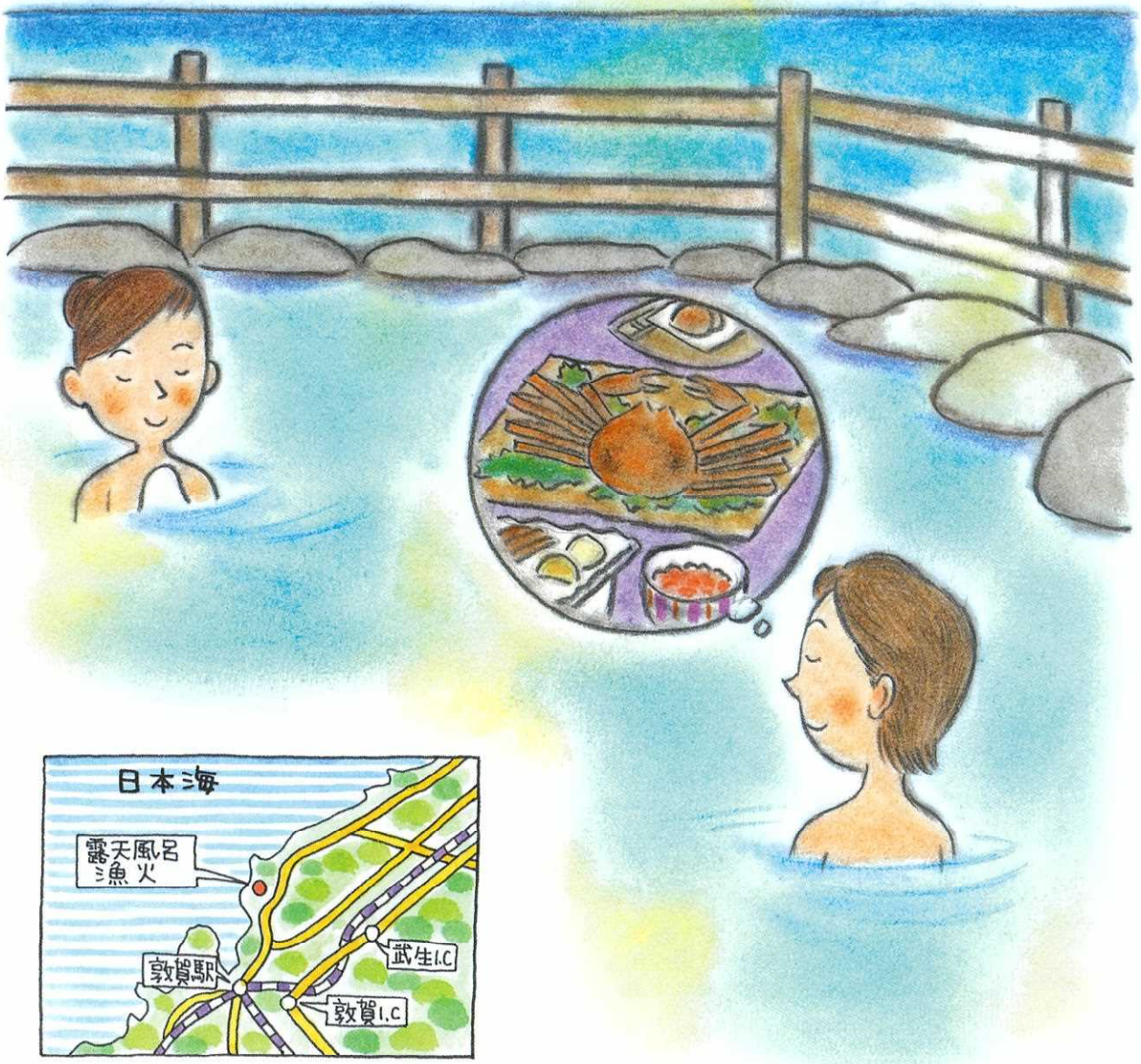
「水仙ですよ」

黄色の理由を尋ねた私に、運転手はそう答えると、近くに車を止めてくれた。近寄って見てみると、白い花弁の中心に黄色い鈴のようなものが突き出ている。まさに水仙だ。それにしても真冬の一月に水仙が咲くなんて……。と思ったら、水仙の花というのは十二月から三月にかけて咲くものだと教えられて、自分の知識のなさに恥ずかしい思いをしてしまった。

水仙は普通の植物のようにおしべとめしべが受粉して実を結ぶのではなく、球根が分球することで増えていく。だから虫に花粉を運んでもらう必要がないのだとか。

へーえ、水仙ってすごいんだ！

単純な私に苦笑しながら、「本当はかわいそうなんですよ」と運転手が言葉を続けた。水仙にもちゃんとおしべとめしべがある。はるか昔には、他の植物と同じように受粉によって実をつけていたのだった。それが生存競争に負け、少しずつ開花の時期をずらしていって、とうとう他の花が咲かない冬に花を咲かせるようになったのだ。まるで人間社会そっくりの話ではないか。そう聞くと、冬の厳しい寒風や吹雪のなかで咲いている水仙が、はかなく哀



イラスト・ヨシダケン

れな生き物に思えてきた。

私はちょっと感傷的になって無言で車に乗り込むと、再び走り出した。しばらくすると、「少しお疲れでしょう」と声をかけて、レストランらしい建物の駐車場に車を止めた。

「ここのトイレが面白いですよ」

そう言う運転手の顔に、いたずらっぽい笑いが浮かんでいる。まだトイレを必要としている状態ではなかったが、そこまで言うのならと、建物の奥にあるトイレに向かった。女性用だから当然個室である。どこにでもあるようなそのドアを開いて、びっくり！　日本庭園がそこにあったのだ。しかも鳥のさえずりまで聞こえてくる。隣をのぞいてみると、やはり庭園なのだが、造りが違う。五、六カ所ある個室すべてが異なるデザインの坪庭になっていたのだ。

越前岬はとても不思議な世界だった。

［やついわ・まどか］ノンフィクションライター。熊本で生まれ、東京は江戸川のほとりで育つ。温泉、匂い、性などの幅広いテーマで活躍中。『温泉と日本人』『匂いの力』『トランスセクシャル～「心の性」で生きる』などの著書がある。

子どもたちとの約束

何でしょうね。そんな坂本さんの思いを支えているものは。

僕自身負けを認めないところがあって、勝つためにやるんだというのを信条にしていますから。ただ、子どもたちのために約束を果たしたいなという気持ちはあります。

和白青松園の子どもたちは、畑山戦のとき垂れ幕をつくってテレビの前で応援していたそうですね。

あの後、「兄ちゃん、勝つまでやるんじゃろ」と言われた。自分の気持ちを先に言ってくれた。すごく嬉しかったです。あの子たちの気持ちを考えたら、簡単に引退なんて言えません。

インターネット上に「こころの青空基金」というホームページを設けて、子どもたちの支援活動もやってますね。

ちょうど二年くらい前に始めたんです。賛同してくれる全国の皆さんにも寄付してもらって、パソコンを贈ったりしています。結局、そういうことがきっかけで何かが広がったらいいなと思ってます。

周りの人たちがまずそれをしないと、そこの世界だけ止まってしまう。子どもというのは無の状態ですから、間違ってないものを教えないといけない。止まっている世界で何かを探そうとして、間違ったものを吸収してしまうことだってあると思うんですよ。どんなに困難な状況でも、子どもたちには絶対に環境のせいにしてほしくない。僕がボクシングと出会ったように、自分の夢を見つけてほしい。自分の好きなことに向かって、突っ走ってほしい。そうすれば、夢があれば、人間は強くなれる。そう思います。

子どもたちとメールの交換とかもやってらっしゃるとか。例えば、どんな会話を？

まあ普通の会話です。「卒業旅行には東京へ行くけん、一緒にご飯食べようね」、「悪いことしなかったらいいよ。何でも先生に聞いてんだからね」といったら、「ドキッ！」って返ってきたりして、かわいいですよ。

前回登場の内館牧子さんが書かれた『私の青空』からもプレゼントがあった。

ええ、出演者の人たちがグローブにサインしてくださって、それをオークションにかけたお金を青空基金にしています。

ジムの外に、七夕飾りがありましたね。

あれも、「こころの青空基金」でやっているんです。短冊を一口百円で買ってもらい、願い事を書いてつるすんです。もともと七夕チャリティといって、この時期にやっています。ここのジム（角海老宝石ジム）の広報もサポートしてくれていて、活動の範囲が広がってきています。そのおかげで、園の子が大学へ入る時の入学金に充てることもできました。

大阪の施設とかにも訪問されてますね。

全国の施設の園長先生とかいろいろお手紙をもらったりしています。いまは和白青松園の基金ということでやっていますが、ゆくゆくは、全国に拡げられたらと思っています。

つらいときこそ、一歩前へ

坂本さんから見て、現代の若者についてどんな印象をお持ちですか。

「いまの若者は」って、僕が十五、六歳の頃から言われていましたが、どこかに骨のある奴っていると思う。でも、勉強でも何にしても、「来週からやろうかな」とか「今月遊んで、来月からやろうかな」とか、ちょっと弱いところは確かに見えますよね。僕は思うに、やっぱり始まりは「いま」なんですね。そう思った時点で、そこがスタートであって、今できないやつは、明日もできないなと。

そして、自分が自信を持てるようになるには、やっぱり自分からそういう環境の中に入っていった

り、つくっていったりしないとむつかしいんじゃないでしょうか。

まずはそういう場所を見つける。そういう人は、待っていても絶対チャンスってこないから、まず自分が動かないといけない。自信を失ったり、何か嫌なことがあったりして、「もういいや、あしたにしよう」とか思うことは、結局止まっているわけだから、つらいときほど前に出ないと。

まあ、何かを見つけろと言ったって、これはなかなかすぐに見つけられるものでもないですしね。待っていても、向こうからやってくるものでもない。

ただ、一つのきっかけがあれば、その人の人生って一八〇度変わることもあるんじゃないですか。僕自身が、小さいときに施設で、たまたまボクシングの試合をテレビで見て、本当に変わりましたからね。ものすごい衝撃が走った。すごい世界だなあと。自分もあっちの世界に行きたいと思った。

けっして、あきらめない！

試合の時、ドボルザークの「新世界」がかかりますよね。何か特別の思い入れが？

一〇代のときにこの曲をぱっと聴いて、「ああ、これいい曲だな」と思っていて、「よし、おれがメーンイベンターになったら、絶対この曲を使おう」と決めていたんです。そして、初めてメーンイベンターになったのが九三年、それからずっと使わせていただいています。

クラシックが好きなんですね。

ええ、昔から。詞がないほうが何かいろいろイメージできるというか。休みのときとか、雨が降ってるときに、ゆったり家の中で寝ころがったりしてね、「この曲、ああ、こんな感じでつくったのかな」、「これはたぶん寒い国の人がつくった曲かな」とか想像して、見ると「ああロシアか、当たってたな」と。

たとえば、どんな曲ですか。

モーツァルトから入って、シューベルトでも何でも聴きますよ。坂本龍一とかでも曲だけのものが多いですね。

ほかに、好きなことは？

趣味ってさほどないんですよ。休日は体を休めていますから。ああ、将棋は好きですね。小学生のときから。将棋って何か人生に似ているところがあるなと思ってね。

たとえば、一回の失敗とかがあっても、いろいろ考えた手で立て直せるというようなことがありますね。つまり、「おまえはだめなんだ」と言われたとしても、それはまた覆せる、逆転できるということです。長い時間、一手に一時間くらいかけて、やっと一駒動かすんです。その考えている間にいろいろなことを考えさせられたんです。

歩がいきなり金になる。生き直しができる。挫折が終わりじゃない、ということですね。

僕も四度の世界タイトルに負けて、「坂本は引退だ」と書かれる。でも、最終的に決めるのは自分自身じゃないですか。納得させるのも自分自身だし、自分がいい方向に進むためには絶対あきらめたくない。その結果、いまがあるわけですから。

ボクサーって、何かほかの職業とかで似ているものは考えられますか？

何ですかね…。アーチストとかミュージシャンの人と対談したときとかに、すごく共通する部分があるというのは感じますね。

あの人たちは、ステージに上がることによって自分自身を表現したり、それまで凝縮した時間のなかで自分との闘いがあるじゃないですか。詞を書かなきゃいけない、うまく歌えるだろうかと。そういった部分が何か似ているような気がしますね。

全国でたくさんの人たちが坂本さんから勇気をもらっています。そういう人たちに伝えたい言葉をお願いします。

僕は小さい子どもたちに会うときにはいつも、遊びながらでも冗談半分の中でも言うのは、「あきらめるな」というその一言ですね。

自分の夢でも何でもいいんだけど、「ああ、きょうは負けちゃったな。でも、あしたは勝とうな」という気持ちを持ってほしい。「どうせうまくいかないからいいや」とかではなくてね。

勝つためには勝つための過程ってあるじゃないですか。何で勝ったのか、その過程が大事なんじゃないでしょうか。その積み重ねが、勝ったときの喜びを倍にしてくれる。ただ「勝ってしまった」じゃなくて、負けたときにこそ大事なものがあるんで、そのときにどうやって這い上がるか、それを大事にしてほしいなと思います。

（構成・緒方英樹）

講演抄録

まちづくり、町の顔づくり

青山佳世

本稿は、去る四月二五日、(財)全国建設研修センター主催による「平成十四年度土木施工管理技術研修講師セミナー」での講演から、その要旨を収録したものです。

町の顔に出会う旅

皆さんは旅をしていますか?

では、自分のまちのことは知っていますか?旅をすると自分のまちの良いところが見えてきますよ。

私は旅番組のレポーターを務めていたこともあって、全県はもちろん、市町村では六〇〇から七〇〇くらいは回っていると思います。その中には非常に印象に残っているところもありますし、どんなところだったか思い出せないようなところもあります。それはやはりまちの特色ですとか人との出会い方が影響しているのではないかと思うんですね。

そこで、最初に群馬県の新治(にいはる)村にある須川宿のことをお話ししたいと思います。ここは上州と越後を結ぶ三国街道沿いの宿場町だったところで、二〇年ほど前から「たくみの里」づくりを通して町おこしをやっています。かつての旅籠を職人さんに工房として使ってもらい、観光客は竹細工やわら細工の作業を見学したり体験することができます。

このあたりは車がちょうど行きかえるくらいの道幅なんですが、旅籠の面影を残す家並みとともに小川が流れていて、今も近所の奥さんたちが野菜を洗ったりして使っているわけです。私どもの番組では、そうした須川宿の人たちの暮らしぶりも表現しようと、あるお宅の奥さんにお願いして、野菜を洗っているところを撮影することにしました。

撮影にあたって「今でもそうやって野菜を洗っていらっしゃるんですか」と奥さんに声をかけると、「家にも台所はあるんだけれども、土のついた野菜を洗うにはこうやって流れている水の方がきれいでしょう。これは清水だし、野菜もしゃきっとしておいしいのよね」とコメントしてくださって。やはり、地元の人たちの暮らしぶりは、その土地の素朴な語り口で教えてもらって初めて見ている人たちに伝わりますね。

それから、この須川宿から車で五分ほど行ったところに湯宿(ゆじゅく)温泉があります。昔は街道沿いの湯治場として栄えたんですが、今は小さな旅館が数件あるだけの本当に小さな温泉地です。共同浴場が四軒あって、旅籠に泊まった方も、地元の皆さんも普段から利用しています。今やどこのお宅にも内湯があるんですが、それでも地元の方たちから愛されている場所ということで取材しました。

共同浴場で地元のおじいちゃん、おばあちゃんの入浴シーンを撮影している間、私は建物の前で待っていたんですけど、そのときすぐ前にコンクリートでできた箱のようなものから湯気が出ているのが目に入りました。

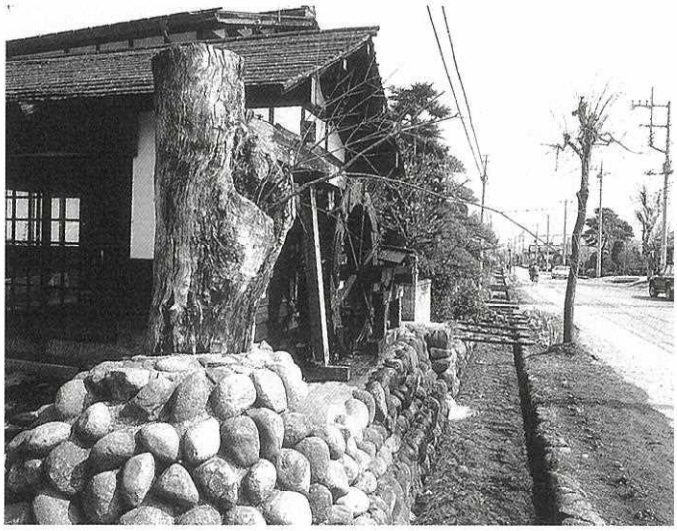
「なんだろう?」と思っていると、向こうから天秤棒を担いだ作業着姿のおじさんがやってきて、そこからお湯を汲み始めたんです。

「この温泉、どうするんですか?」と思わず声をかけましたら、「これから家に帰ってお湯に使うんだよ。コーヒー入れても美味しいぞ。ところで、あんたこの温泉に入ったか?いいお湯だよ。おれなんか一日に二回も入るよ」と。「そりゃ、極楽ですね」と私が言うと、「いやぁ、極楽極楽。わっはっは」と高らかにお笑いになって帰っていかれました。

ここには旅のポイントがいくつも詰まっていますね。町並み、風景、目に焼き付いたなんともいえないたたずまい、それから地元の人たちとの会話、出会い、その土地ならではの暮らしぶり、そういった〝町の顔〟が凝縮されています。だから番組にとっても、私個人にとっても忘れられない、非常に思い入れの強い旅になりました。

あおやま・かよ

1959年愛知県生まれ。フリーアナウンサー。NHK『おはよう日本・季節の旅』で5年間、関東甲信越226カ所を旅して様々な出会いやその土地の魅力を伝える。現在は『こんにちはいっと6けん』で番組の企画とリポーターを務める。国土交通省・交通政策審議会委員をはじめ官公庁・団体などの委員、評議員などを多数歴任。



須川宿（群馬県・新治村提供）

魅力をいかすまちづくり

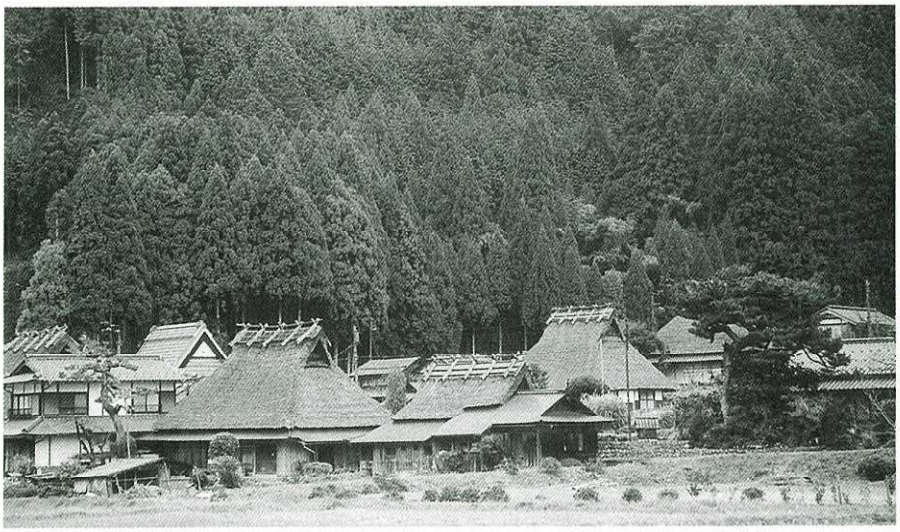
京都府の美山町は、去年日本観光協会の「優秀観光地づくり賞」で金賞に選ばれました。ここは高雄をちょっと北に上ったところにある北山杉の産地で、二〇〇軒あまりの茅葺き集落が残っています。茅葺き集落といっても白川郷のように文化財になるようなお宅は一軒もなくて、普通の生活をしている民家が自然にとけ込むような感じで残っています。

たまたま開発に乗り遅れてしまったとか理由はあるのでしょうが、それよりもここが素晴らしいのは、住民一人一人が茅葺き集落を誇りに思っていて、葺き替えにお金はかかるもののあえて残そうとしているところです。そして、京都や大阪に茅葺きサポーターのような人が大勢いて、茅葺き集落をなんとか残そうと応援しています。まちでも保存に力を入れていて、単独の予算で葺き替えに補助金を出す仕組みをつくって、地道に守ってきました。

ここに行くと本当に心がのびのびします。京都って、ちょっときらびやかなところがあったりするんですが、少し足を延ばすとこんなに落ちつく場所があるのかと思う空間が広がっていますので、京都に行かれたらぜひ寄ってみてください。そうすることが、茅葺きを残そうと頑張っている人たちの励みになりますし、都会の私たちは安らぎを受け取れるという、非常にいい関係が生まれてくると思います。

よく私たちが行っていいなと思うまちには、昔ながらの風景が残っているといいますが、それは手を入れないまちじゃないんですね。

湯宿温泉共同湯（群馬県・新治村提供）



京都府・美山町のかやぶき集落

これからの観光は、手を入れているんだけれどもつくりすぎていないというのが大事だと思うんです。手を入れなければ寂れていく、でもそれを磨いていくことによって古いものにもひなびたニュアンスが出てくる。こんなまちを実現していただきたいし、今日ご参加の皆さまも何かの一助をやっていただきたいと思います。

対話がつくるいい関係

去年一年間、産経新聞に「川を楽しむ」というエッセイを書きました。地元に流れる川を自分たちで綺麗にしようとか楽しんでいこうという人たちをクローズアップして、私も一緒に楽しみましょうというスタンスで取材しました。

ついこの間は石狩川支流の千歳川に行ってきたんですが、ここでは平成七年から「雪中植林」による一人一本、三〇〇万本の植林運動をやっているんです。なぜ「雪中植林」なのかというと、苗木と培養土を入れた紙ポットを雪を取り除いた地面に置いて雪をかぶせておくと、春にとけた雪が水代わりになって、苗木が土の中に根を張り、植樹が上手くいくんだそうです。

今、北海道では水源地の森づくりとか緑を増やそうという動きが活発で、住民の関心も高く、雪中植林のイベントにも定員の三〇〇人があっという間に集まったそうです。こうした住民参加の動きは全国的にあって、最上川でもモモカミバスターズという流域の人々が川を綺麗にしていこうという運動をしていましたし、長良川では何千人もの人が集まって一斉清掃をやっていました。

こういう動きを見ると、「住民参加の川づくり」なんてタイトルが出てきますが、本当に市民の川に対する思い入れが感じられて、嬉しくも頼もしくも思います。これらの運動の経緯は、もともと市民が関心を持って行政に働きかけたということもあるんですが、やはり河川の担当者が「流域の人たちと一緒に川をつくっていかなくちゃいけないんだ」という姿勢に変わったことが、住民と行政を近づけた大きな要因だろうと思います。

私も一〇年ちょっと前までは、本当に河川のこともなんにも知らない一市民でした。でも、機会あるごとに行政の方から説明していただくうちに、どうしてその工事が必要なのかをだんだん理解できるようになりました。

千歳川流域の森づくり「雪中植林」に参加する子供たち

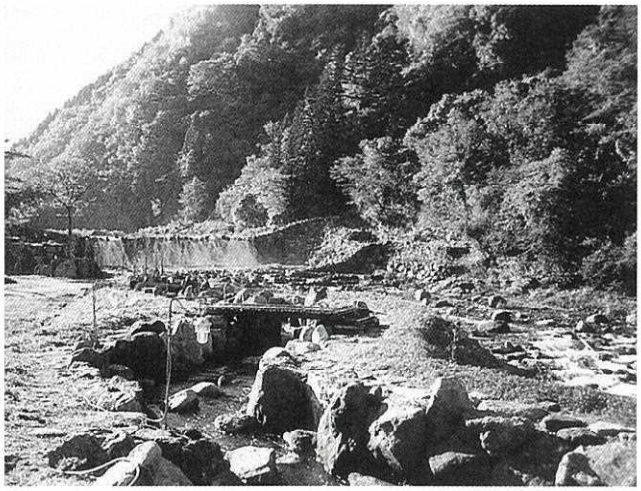
これは、皆さんの地元の方にも同じことがいえると思います。今まで行政も自分たちで決めていけばことが運んだことを、住民にかみ砕いて説明したりするのは時間も労力もかかるでしょうが、そういうことの積み重ねがこれからの事業を進めていく一番効果的な方法だと思うんですね。上手くいっているときもいかないときも、絶えず住民の皆さんとコンタクトをとっていると、何かあったときにそういう人たちが応援団になってくれると思います。

まちづくりのサポーターを増やす

そうしたサポーターを増やしていく試みとして私が感動したのが、岐阜県上宝村の奥飛騨温泉郷です。ここは四方を槍ヶ岳・穂高連峰・焼岳などが囲むように連なった谷沿いの温泉街で、露天風呂が一八〇もあるんですね。新穂高ロープウェーからは槍ヶ岳や北アルプスが一望できて、本当にいい土地柄なんですが、いったん大雨が降ると土砂や濁流に見舞われ、万が一焼岳が噴火するとその影響をもろに被るという土地でもあります。ですから観光地として万一の不安も大きいのですが、上宝村ではその危険を逆手にとって奥飛騨温泉郷の特徴にしましょうという感じがあるんです。

ここでは「奥飛騨女性砂防サポーターの会」が結成されていて、旅館やお土産物屋をやっている女将さんたちが、防災の勉強会を開いています。なぜこういう会をつくったのか聞いてみますと、「神通川水系砂防工事事務所の人に頼まれたから」と言うんですね。やっぱり官がつくったのかと思ったんですが、よくよく聞けば、村では日頃から災害に備えていこうとまちを挙げて運動しているので、女将さんたちも工事事務所の呼びかけに自然に加わることになったんだそうです。

会ができるまでも防災意識は高かったそうですが、専門的なことやいざという時に何をすればいいかが全然わからなかったんですね。それが、工事事務所の担当者が足繁く通って、火山の動きや砂防施設の役割などをレクチャーする中で女将さんたちの自主防災の意識が強くなっていきました。つまり、ここは危険なところだけど、万が一のときには自分たちが災害についてよくわかっているから、お客さんも安心して来てくださいという意識がみんなの中に広がっていったんです。


奥飛騨温泉郷の砂防施設は観光名所ともなっている

住民というのはなかなか災害を意識する機会も、勉強をする機会もないわけです。本来は、意識の高い住民の活動を自治体なり国なりがサポートする形が望ましいのですが、まちによってはそこまで意識が高まっていないところもあります。そのときに要になるのは、やっぱり国の事務所だったり県や市町村の担当者なわけですから、皆さんもどれだけ住民を磨き上げていくか、そして、ご自身が一住民として一緒に何をやっていかれるかを考えていくことが必要だと思います。

最後に皆さんにお願いしたいことは、土木の専門分野を修得されることはもちろん重要なことですが、それ以外に大事なのは自分のまちへの愛情だったり、思い入れだったり、そういうハートの部分なんじゃないかと思うんですね。ですから、ぜひ旅もしていただいて、〝町の顔〟と出会い、人と出会い、しなやかな感性と発想を持っていただけたら嬉しいと思います。そうした柔軟な姿勢こそが、これからのまちづくりに求められてくるだろうと思います。――長時間にわたりご静聴ありがとうございました。

（構成・小野久美子）

学校裏の用水路を改修して、小さな自然をとりもどす

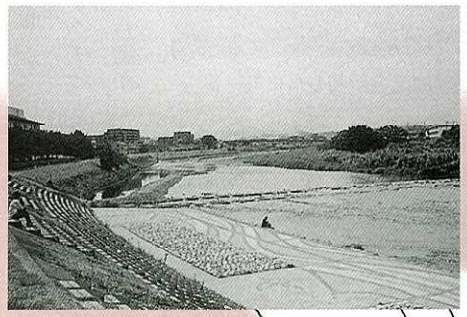
― 日野市立潤徳小学校が取り組む環境教育 ―

用水路が市内をめぐる都心近郊の日野市

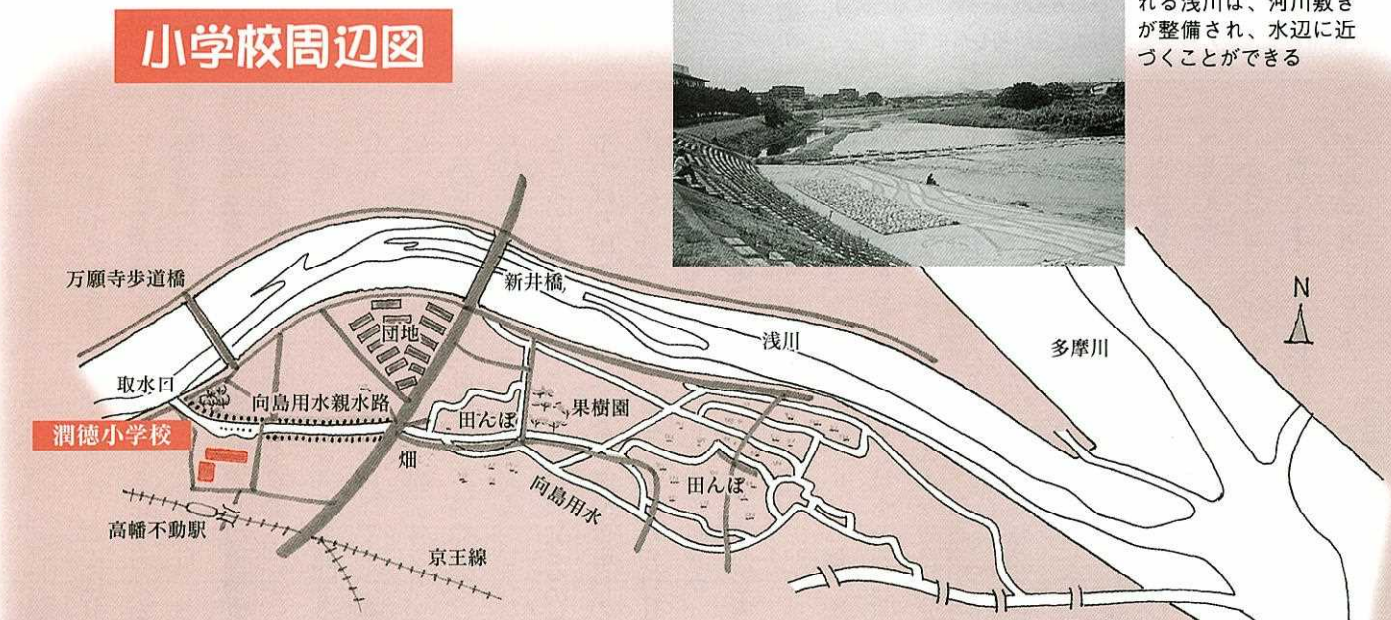
都心から電車で三〇～四〇分のところにある東京都日野市。交通の便がよいことから、ベッドタウン化が進んだ、約一六万七〇〇〇人余（二〇〇二年九月）の人口を抱える都心近郊の街である。市の大半はなだらかな丘陵地帯と平坦地で中央に浅川が流れ、その昔は東京の穀倉地帯といわれるほど、豊かな田園地帯であった。新田開発は江戸時代中期からで、水は浅川から農業用水路を引いていた。今でも一八〇km余の用水路が市中を巡り、田畑を潤している。

向島用水は、その用水路のひとつ。浅川が多摩川と合流する手前、万願寺歩道橋の少し上流に取水口をもち、浅川の南側約一二haの田畑に水を供給している。

改修前の用水路は、日本の多くの水路と同様に両岸をコンクリートで固め、人が立ち入らないようにフェンスで囲われていた。潤徳小学校裏手の敷地境界にも、この用水路の一部が流れていたが、一九九二年度（平成四）から始まった整備改修工事によって、多様な



潤徳小学校の北側を流れる浅川は、河川敷きが整備され、水辺に近づくことができる



潤徳小学校の正門

親水路の下流にある、生徒が稲作体験学習をしている田んぼ

生物が生息する親水空間がつくられ、格好の環境学習の場となったのである。

日野市がリードした用水路の自然回復

コンクリートの用水路を昔ながらの小川にもどすきっかけは、一九九〇年に建設省（現国土交通省）が「多自然型の川づくり」を提唱してからであった。日野市は「人と自然が親しむ環境づくり」を行政課題に掲げており、自然豊かな親しみやすい水路づくりは、市が取り組もうとするテーマとうまく合致したのだ。市では、農林水産省の補助事業も利用して、向島用水路をコンクリートで固める前の姿、「川らしい川」にもどすことに決める。そして、ちょうどこの水路に接する潤徳小学校の子どもたちにも、これを機に身近な自然に接してもらおうと、学校裏の水路幅を広げてビオトープとし、学校側から水路へ自由にアクセスできるような向島用水親水路の整備計画を進めていった。

この事業を推進してきた中心的存在が、市の水路清流課（現緑と清流課）である。全国でも珍しい課の、珍しい試みを、学校・教育関係者や地域の人たちに理解し、協力してもらうため、説明会や意見交換などを実施。かなりの時間を費やしてコンセンサスを得ていったという。

さらに、完成後の維持管理についても、草刈りや樹木の剪定、清掃作業などを市が積極的に行っており、そうした点が、今年で九年目となる親水路の親しみやすさ、利用しやすさに大きく貢献しているものと思われる。

安全で安心できる昔ながらの川づくりプラン

水路に接する市立潤徳小学校は、全校生徒数五七六名（二〇〇二年五月）で、高学年が各二クラス、中低学年が各三クラスの中規模学校である。周辺の環境は、近年ベッドタウン化の勢いが増し、幹線道路の交通量も激増する中で、豊かだった自然環境も徐々に失われつつある状況だ。

さて、水路のフェンスをはずし、人が自由に水路へ出入りできるということは、万一の事故も考えられる。そうした懸念に対処するため、防犯や安全に留意した計画を行っている。まず、学校の防犯上の工夫は、フェンスの代わりに植栽をして、簡単に外部の人が

整備前の水路は近寄り難い場所だった
（パンフレット『向島用水親水路』より）

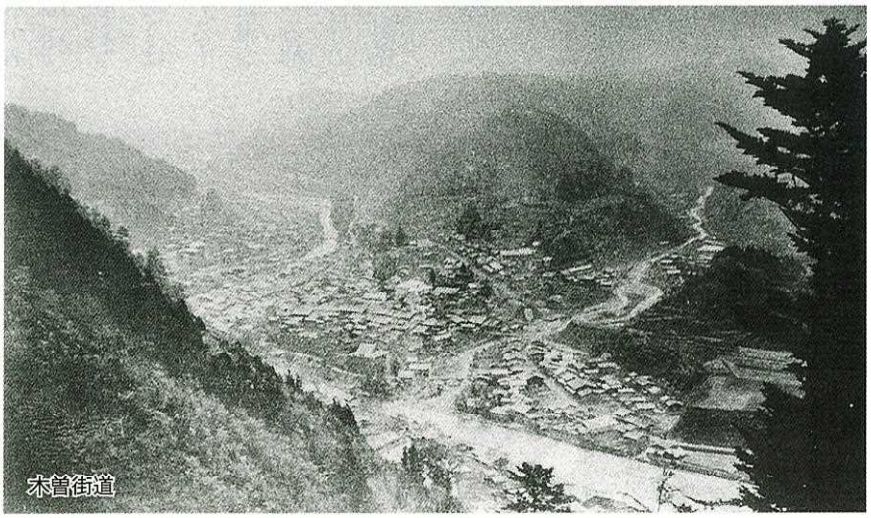
市の緑と清流課の人が周囲の自然について子どもたちに指導する

美しい水に蘇った川では、小さな魚がすくえるようになった

護岸のコンクリートを取り外し、水際を昔日の姿にもどした親水路。中央杭の左側に学校があり、水際を大きくカーブさせてビオトープにしている

6月に行われたプールでのヤゴ救出大作戦

中山道幹線の建設工事


木曽街道

土木史余話 4

交通史研究家
沢　和哉

日本人によるルート調査

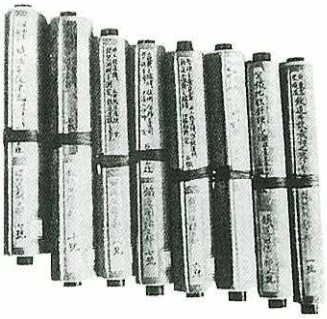
明治二年（一八六九）十一月、日本政府で東京から京都、大阪、兵庫に至る幹線の建設が決定したが、その経路については、東海道、中山道、いずれを採用するか決定していなかった。

翌三年六月、政府は民部省准十一等出仕・佐藤与之助（一八七一年政養と改名）、同准十等出仕・小野友五郎の両人に、東海道ルートの調査を命じた。

佐藤与之助は、羽後国（山形県）遊佐郷の出身。幕末、勝海舟の門に入り、蘭学、砲術、測量術を学んだ。安政五年（一八五八）、日米修好通商条約の締結により、翌六年開港された横浜港については、当初神奈川を開港することになっていたが、佐藤は横浜港の綿密な測量を行い地形上から横浜にすべきことを海舟に進言。横浜の開港を実現させた人物。

また小野友五郎は、常陸国（茨城県）笠間の出身。幕末のころ勝海舟について長崎におもむき、オランダ人から航海術、測量術を学び、万延元年（一八六〇）、幕府の使節が乗船して渡米した咸臨丸では、航海掛として活躍した人物であった。

鉄道助・佐藤与之助（政養）


佐藤政養文書

二人は、横浜から日ノ村に出て大磯を経由。箱根の険はさけて、富士山の裾野を通り沼津に出た。

さらに吉原、岩淵、静岡を経て、石部村の海岸より、宇都ノ谷峠をさけて、藤枝の東方から大井川を渡り、浜松、豊橋、御油、岡崎、鳴海から名古屋に出た。さらに清洲、大垣、米原を経て、草津、大津から京都、大阪へ出るルートを徒歩で調査した。そして明治四年一月「東海道鉄道之儀ニ付、奉申上候

書付」をもって政府に復命。

この復命書には、各地の里程、地形等を記した「東海道筋鉄道巡覧書」を添付した。

そして、この復命書の中で、幹線のルートについては、東海道よりも中山道の方が望ましいとの意見を述べたのだった。

つまり、東海道筋には船の便があり、街道の輸送も発達しているので、鉄道の利用は運賃の関係もあって、きわめて低いことが予測される。したがって、交通の不便な中山道に鉄道を建設すれば、これに支線を加えることによって、山国の開発にもなるというものであった。

次いで政府は、明治四年三月小野友五郎に板橋宿から京都を経て大阪にいたる中山道ルートを調査させた。また次に述べるように、お雇外国人にも、明治七年と八年の再度にわたって中山道ルートを調査させたのだった。

二代建築師長・ボイルの調査

明治七年（一八四七）と八年の再度にわたって中山道ルートを調査したのは、明治五年四月、二代建築師長としてオリエンタル銀行の推挙によって来日したリチャード・V・ボイル（Richard Vicars Boyle）であった。かれの採用にあたり、鉄道差配役のカーギル（William Walter Cargill）は、日本政府に対して「ボイルはインドの鉄道建設で叙勲された優秀な技術者で、豊富な経験の持ち主である」と紹介したのだった。

ボイルは明治七年五月、神戸から京都を経て中山道に入り、高崎にいたり、支線として敷設予定の新潟を往復して東京にいたる経路を約二か月半かけて調査した。このとき、かれは建築師・ゴールウェー（William Galway）、キンドル（Claude W. Kinder）の二人に三国峠の経路も調査させた。

さらに翌八年九月、技術一等見習・鵜尾謹親、会計掛・上田勝造、ポルトガル人書記役・F・リベロー（F. C. V. Riveiro）をともない、横浜から高崎を経て中山道を調査しながら神戸に帰着した。

二代目建築師長・ボイル

技師・原口　要

実に東京～岐阜間、田中～上田～新潟間、東京～西京間と七六六マイル（約一二二六キロ）に及ぶエネルギッシュな調査であった。

この調査の模様について、技師・原口要（明治十六年に新橋建築課長）は、大正四年（一九一五）一月、「鉄道時報」紙上において、次のように回顧している。

「雇外国人の連中は、出張は須く国守大名の礼に據るべしと言ったもので、技師長のボイルと云う男が中山道踏査に出かけた時の如き、わざわざ名古屋の殿様の網代輿に乗り、靴やバターや、何から何まで捧持の人を定め、全く大名行列で行ったもので、そして輿の中から附近を一瞥して指揮をしたものである。

其れから又、新橋庫内に長柄の大傘が多数あったが、あれは雇外人が出張の際、田圃の間には一定の座を設けさせ、是がため五名の大工、三十余人の人足を同伴せしめて、到る処に座を設けさせ、外人が腰をかけて居る間、例の大傘を捧持させたものだ。

斯る有様で、外人跋扈（わがまま）と来ては言語道断であった・・・」

また、ボイルの調査に随行したポルトガル人・F・リベローは、中山道調査で食料不足に苦しんだことなどを、大正十年（一九二一）の鉄道五〇周年記念祝典の席上で、次のように回顧している。

「北方線の測量に出掛けた時の如き、ビスケット、缶詰、其他食料を二ヶ月の予定で携帯したが、山中辺をやる時分には皆平げて仕舞い、握り飯、茄子の塩漬、鮨などで我慢したものだ」

ボイルは、この調査にもとづき、明治九年（一八七六）九月、幹線ルートは山国開発の立場から中山道が望ましいとする「中山道調査上告書」を、鉄道差配役・カーギルを経由して日本政府に提出したのだった。

中山道幹線に着工

明治十六年（一八八三）九月、政府は東西両京を結ぶ幹線として中山道の敷設を決定した。

これは、佐藤政養やボイルの調査結果にもとづく意見。さらに外国船から攻撃されやすい東海道よりも中山道にと国防上からの軍部の要請などを背景としたものであった。

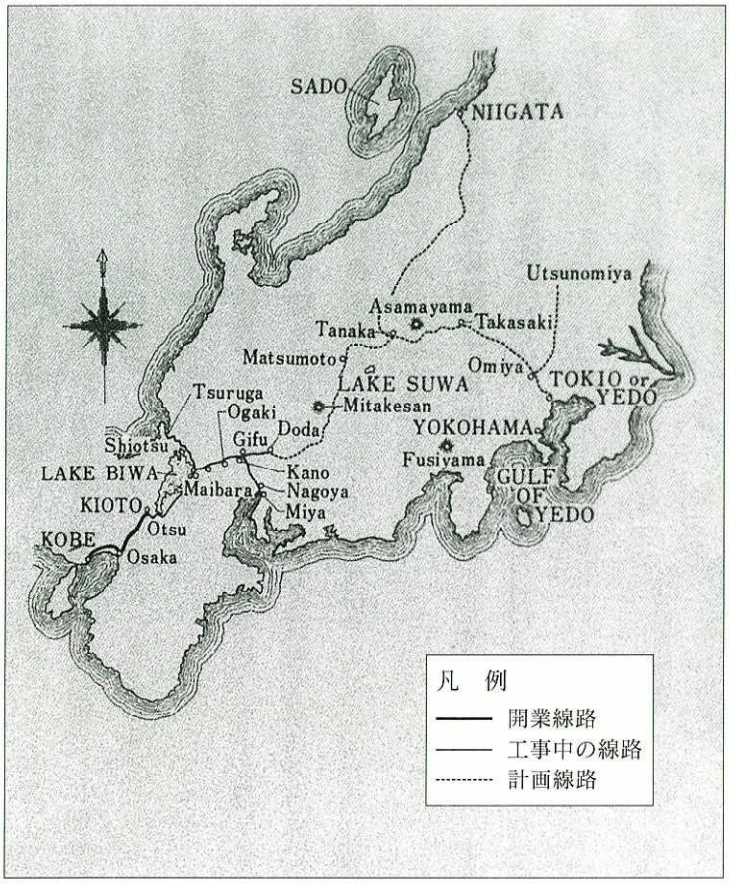
中山道線のルートは、「中山道幹線経路図」にも示すように、日本鉄道会社の終端・高崎駅から田中、松本、土田（どだ）、加納（岐阜）に至り、大垣に達するものであった。

いずれにしても中山道幹線敷設の決定にもとづく、敷設の指令を受けた鉄道局長・井上勝は、建設資材の運搬を水運によることとし、知多半島の武豊（たけとよ）港と、新潟県の直江津港に陸揚げすること。さらに直江津港からは上田方面に向けて運搬線の建設をすすめることとした。そして工事は碓氷（うすい）峠、木曽の渓谷に重点をおき、中央で接続させる予定で東西から着工したのだった。

明治十七年五月、まず西部線の大垣～加納（岐阜）間二八キロを起工。一方、東部線は同年十月高崎～横川間一九キロを起工した。高崎～横川間は、烏川、上碓氷川、下碓氷川の架橋が主要工事で、中でも上碓氷川（三一メートル）は、地形が山間でとりわけ狭く、当初川の中に橋脚、橋台の代用として高さ四・五メートルのやぐらを組み、その上に五〇フィートの鈑桁二連を架設した。

明治十八年十月高崎～横川間を完成。したがって上碓氷川橋梁は仮り橋で開通し、二十年五月、技師・原口要の設計したスパン一〇三フィートの錬鉄製トレリス形上路橋桁に架けかえられた。

一方、西部線は明治十八年九月、加納（岐阜）～名古屋間を起工。すでに着工していた大垣～名古屋間を含めて、この区間はほぼ平坦な地形で、工事はわずかな築堤と、木曽川（五七一メートル）、揖斐（いび）川（三二一メートル）、長良（ながら）川（四六二メートル）の架橋が主なものであった。

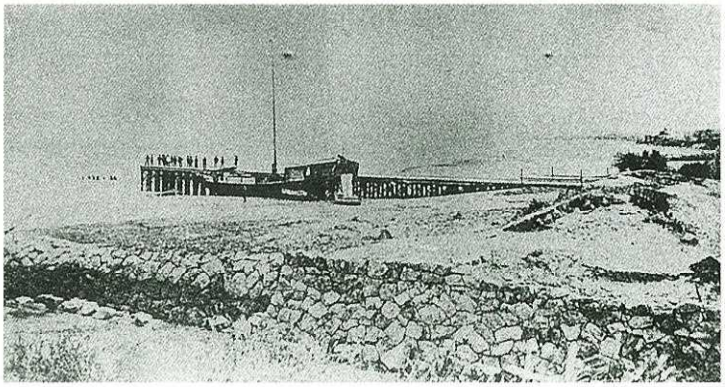


中山道幹線経路図

三橋梁ともお雇外国人技師・ポーナル（Charles Assheton Whately Pownall）の設計したダブルワーレントラスを、木曽川（二〇〇フィート九連）、揖斐川（同五連）、長良川（二〇〇フィート五連と一〇〇フィート四連）に架設した。

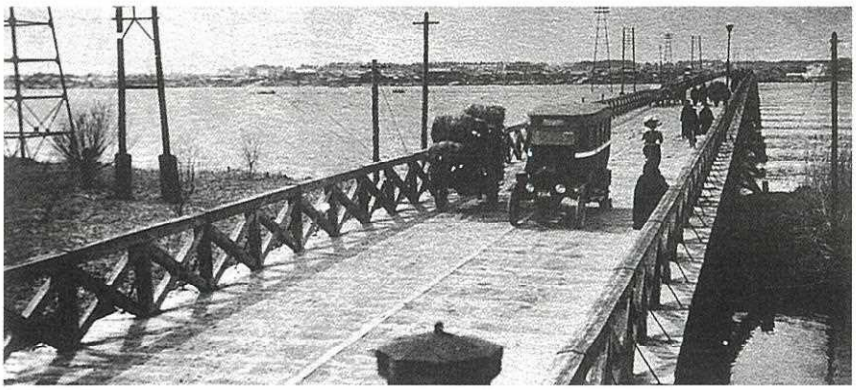
こうして大垣～名古屋間の工事は、明治十九年六月名古屋～木曽川間を完成。幹線経路変更後の翌二十年一月、木曽川～大垣間を完成したのだった。

また、木曽、揖斐、長良の三橋梁とも、


中山道幹線建設資材陸揚げの武豊木製桟橋

幹線ルート変更（明治十九年七月）後の完成で、揖斐、長良の両川が十九年十二月、木曽川が翌二十年四月であった。

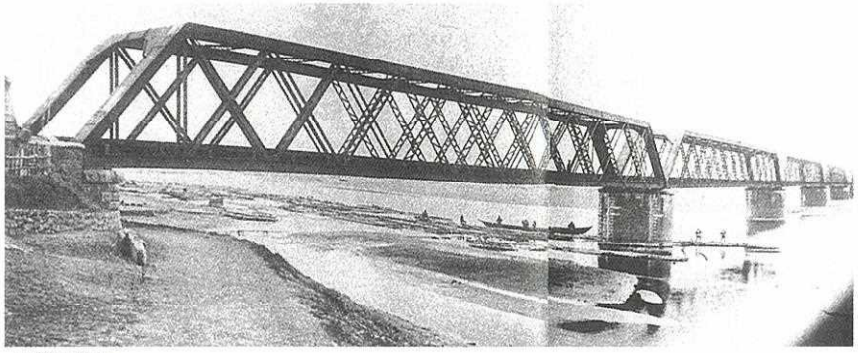
なお、地形がとくに悪かった碓氷峠の工事は、「横川村ヨリシテ入山道ヲ登昇スルノ道筋ハ、東京、西京間ニ於テ最峻急ナルモノナリ」とボイルも上告書の中で述べているように、そのルートさえ容易に決定しなかった。入山峠越え、和見峠越え、碓氷峠越えの中尾ルート（最終決定）の各線の比較調査に歳月を費やし、幹線変更までには完成することができなかった。



信濃川にかかる万代橋
（明治35年5月、新潟市内の鉄道停車場はこの付近に設置された）

幹線ルートを東海道に

草創期の鉄道建設において、そのトップの地位にあったにもかかわらず、井上勝は常に現場第一線にたって工事を指導した人物であった。「雨の日も、強風の日も、草鞋、脚絆姿で井上さんは現場を走りまわっていた」と、後年多くの部下が証言しているところである。



木曽川鉄橋
（明治18年10月中山道幹線として着工、明治20年4月東海道線として完成。571メートル）

中山道工事においても、明治十七年五月から五四日間をかけて、五人の部下を連れ、沿線の工事状況（予定された田中～新潟間の支線を含む）を視察してまわった。ほとんどの行程が徒歩で、乗り物としては乗馬、馬車、人力車、渡し船などを利用したにすぎなかった。とりわけ六月二八日の清水峠越えは命がけの強行軍だった。

井上自身が、困難な中山道の工事に疑問を抱いた時期は明らかではない。かれ自身、明治三九年（一九〇六）三月の「日本帝国鉄道創業談」の中で、「着工一年余」と記しているので、視察から帰京後のことであったと推測されよう。

明治十八年二月には、少技長・原口要に、政府に内密で再度にわたって東海道線を調査させた。さらに同年井上は、三等技師・南清に碓氷、木曽地方の実測を行わせ、両線の距離、建設費等の綿密な比較調査をもって、幹線経路の変更を政府に上申。この結果、明治十九年七月幹線の東海道変更が指令されたのだった。

ちなみに、中山道筋を精力的に調査したボイルは、明治十年二月満期解任後に帰国。その六年後の十六年四月、日本政府でわが国に功労のあった外国人の叙勲が行われた。

しかし、ボイルはその対象者にはなっていなかった。

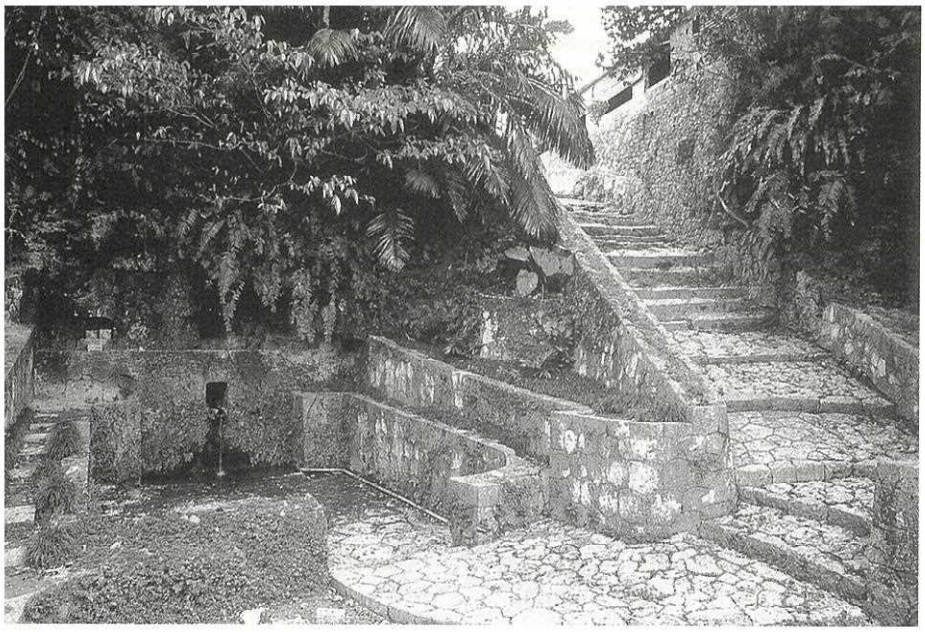
さっそくロンドンの日本公使館を訪問したボイルは、森全権公使に「私は日本の鉄道建設には人後に落ちない努力をしてきたのに、私が叙勲されないはずはない。何かの間違いではあるまいか。まことに遺憾である」と強い不満をぶちまけた。しかし、ボイルの主張が認められることはなかった。

もし仮に、中山道幹線が実現していれば、あるいはボイルも叙勲の対象になっていたかも知れない。島崎藤村も「夜明け前」の中で、かれの業績を高く評価しているのである。

［さわ・かずや］交通史研究家。徳島県出身。日本国有鉄道総裁室修史課で『日本国有鉄道百年史』の編集・執筆にあたる。著書に『日本の鉄道一二〇年の話』『鉄道に生きた人びと』『鉄道―明治創業回顧談』（いずれも築地書館）など。

沖縄の石造用水施設群

本文・後藤　治（工学院大学建築都市デザイン学科助教授）
写真・小野吉彦



（右・カラー）
喜友名泉（宜野湾市、国・重要文化財）
米軍基地内にあるため普段はみられない。見学するには市教育委員会・管理者等に事前の連絡が必要。

我如古ヒージャーガー（宜野湾市、市指定文化財）
傾斜地を降りる石段。

沖縄の石垣

石灰岩や珊瑚石を積み上げてつくった石垣。これが、沖縄の伝統的な土木遺産を代表するもののひとつであることはよく知られている。

例えば、世界遺産に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のなかにも、そうした石垣は多数含まれている。なかでも「グスク」と呼ばれる城の石垣は著名である。首里城、今帰仁城、中城城等の石垣は、観光用のパンフレットにもしばしば登場する。

用水施設も、そうした沖縄の伝統的な石垣がみられる土木遺産のひとつである。石材や石積みの技法は、城と同じである。けれどもこちらは、世界遺産に含まれていないばかりか、その存在を知る人も比較的に少ない。今回紹介するのは、この用水施設のうち、代表的な数例である。

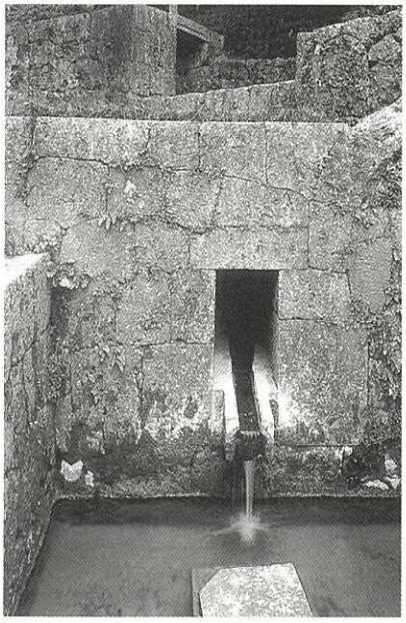
施設の概要

用水施設は、地元では「ヒージャー」「ガー」「ヒージャーガー」等の名で呼ばれている。これは沖縄地方の方言で、それに漢字をあてると、「ヒー」は樋、「ジャー」は川、ガーは「井（泉）」ということになる。用水施設をみると、この語が施設の形状をあらわしていることが知られる。一般的な施設の様子は、おおよそ以下のようである。

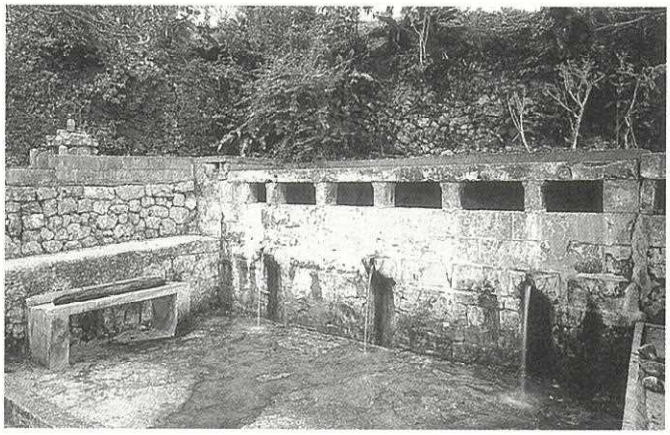
施設は、全く人工的につくったものではなく、伏流水が流れ、かつ、その水が溜まる天然の岩盤上に位置する。こうした自然の良好地を選び、そこに人工の石垣等の構造物を付加する形でつくられている。このため、急傾斜地を背後にもつ裾状の地にあることが多く、進入路として、傾斜地上方から降りる石段がつくられていることが多い。

水が溜まる部分は、石垣を組んだり掘り込んだりして、水が多く溜まるように工夫されている。大規模な施設では、水溜の部分がいくつかあり、男女用・家畜用等の機能に応じて使い分けられている。この水溜が「ガー（井・泉）」である。石段を降りた場所に井戸があるので、「ウリ（降り）ガー」と呼ばれることもある。

伏流水が流れる部分にも石垣が組まれ、水が水溜に流れ込みやすい形につくられている。そして、水が水溜に流れ込

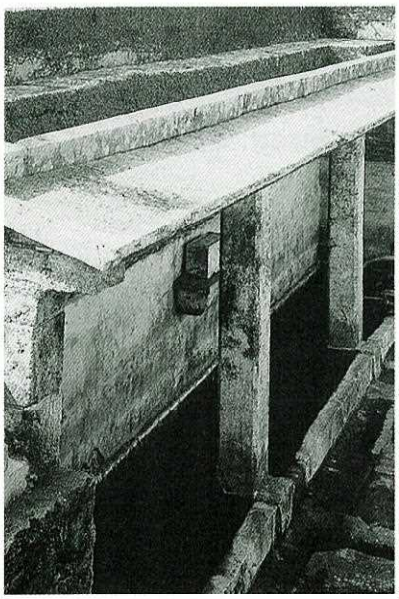


森の川（宜野湾市、県指定文化財）
現在は公園のなかで保存されていて、用水施設としては現役ではなくなっている。

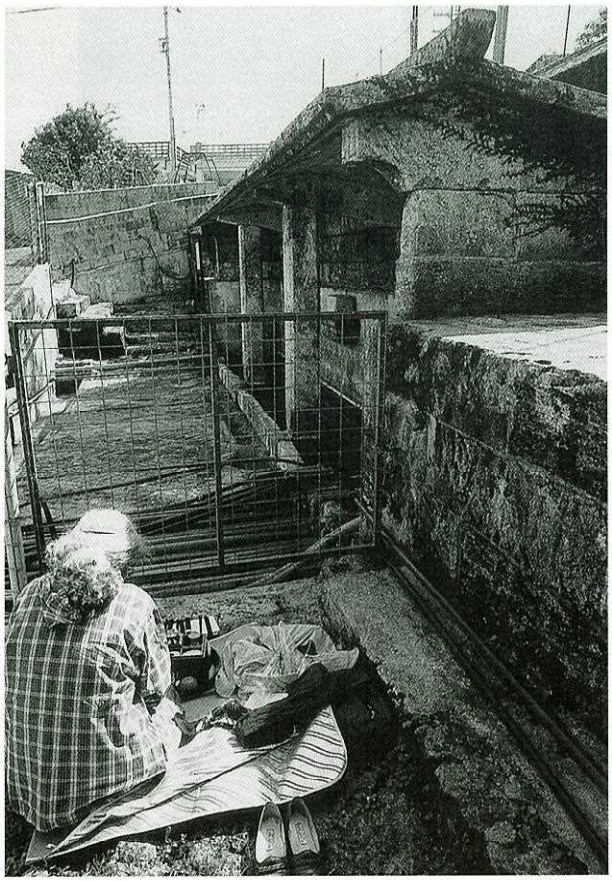


仲村渠ヒージャー（玉城村、国・重要文化財）

む部分には、水吐き口となる穴をあけた石垣が積まれ、穴には樋口状の石を置くことが多い。この水の流れる部分が「ジャー（川）」で、樋口部分が「ヒー（樋）」ということになる。



潮平ガー（糸満市、国・登録文化財）



潮平ガー参拝に訪れる人の様子。

信仰対象としての施設

筆者が、こうした用水施設の存在を知ったのは、平成二年度に沖縄県が実施した県内の伝統的な信仰に関わる建造物の調査（参考文献参照）に関わったためである。当時、文化庁の文化財調査官であった筆者は、この調査指導のために現地を訪れ、その存在を知った。このことからわかる通り、用水施設は信仰の対象になっており、かつ、その多くが国や地方の文化財として指定・登録されている。

沖縄県は、降雨量が多い。けれども、岩盤による地盤が中心のため、水はすぐ流れてしまう。したがって、様々な用水の確保は深刻な問題である。土木技術が未発達の時代には、伏流水が常時流れる場所や水が溜まる場所は、貴重な水源地であり、信仰の対象にもなっていたのである。

現在でも、各地の用水施設を訪れてみると、それが用水施設として利用されているだけでなく、信仰の対象であることがみてとれる。例えば、施設のなかに石造の祠を祀る等、信仰の対象となる場所が、水溜や石段等とは別につくられていることが多い。またそれだけでなく、施設にしばらくいると、実際にそれを拝みに来る人をみかけることもある。

施設にみる近代

石垣は伝統的な技術である。また古くから信仰の対象にもなっていた施設のどこが近代土木遺産なのかと思われる方がおられるかもしれない。

けれども、用水施設の建設年代を調べてみると、多くが明治以降の近代につくられている。またそれだけではなく、施設内の構造物の細部をみると、時代が降るほど、近代的な工夫や変化が加えられていることが知られるのである。それは、人工の構造物によって水を制御しようという考え方によるものである。

水源確保のために水を効率的に溜めるだけであれば、水溜である「ガー」の部分だけを充実させればよい。実際に、用水施設のなかでも建設年代が明治より前に遡ると推定されるものは、実際に井戸部分の石垣だけが充実していることが多い。

これに対して、近代的な用水施設では、「ガー」と「ヒージャー」を巧みに組み合わせて、水が樋口から流れる姿を意識的に見せ、水が水溜に貯えられる様子を人工的に演出しようとする姿勢がうかがえる。そして、それは施設の建設年代が降るほど明確になる。

喜友名泉

水溜が男用（ウフガー）、女用（カーグヮー）の二つに分けられている。前者は飲料・洗濯等に、後者は家畜の水浴びや洗浄等に用いられた。写真はカーグヮーの部分。

各地の近代的用水施設

喜友名泉（チュンナガー）では、水路の出口に吐き口をつくった石垣を積むだけの、比較的に簡単な演出である。この石垣は、施設内に置かれた石造の香炉にある銘から、明治二二年（一八八九）に新たに積まれたものと推定される。つまり、それ以前からあった水溜に、明治になって人工的な演出が加えられたものと推定される。

これが、明治二五年に現状のようになった我如古（ガネコ）ヒージャーガーになると、水の吐き口が高い位置になり、そこに樋口が取り付けられている。このため、喜友名泉と比較すると、水に対する演出がより人工的になっている。

森の川は、喜友名泉と我如古ヒージャーガーの中間的な形式である。森の川は、尚敬一三年（一七二五）には石垣が築かれたという記録をもつ。けれどもその形式からみて、近代に入って改修され現状のようになったと推定される。

さらに、大正元年（一九一二）に現状のようになった仲村渠樋川（ナカンダカリヒージャー）では、吐き口のある石垣はみられず、そのかわりに人工的な石造の水槽がつくられ、水槽の高い位置に樋口がある。このため、伏流水がどの位置から流れてきているのかわからず、水は水槽から供給されているかのように演出されている。

大正末年に現状のようになった潮平（スンジャ）ガーの構造は、仲村渠樋川とほぼ同じである。ただし、水槽部分に屋根がつくられるなど、意匠がより人工的になっている。

垣花ヒージャー（玉城村）

伏流水が流れる部分に樋口をつくり、水溜には簡単な石垣があるだけの形になる。こうしたヒージャー中心の施設も、近代的な施設が登場する以前から存在した伝統的な形態と考えられる。

近代と現代

近年、各地でダム建設に対する反対運動がおきるなど、人工的な土木構造物は、あまり人々に好かれない存在になりつつあるように思える。これに対して、生態系や環境の保全に対して、人々の関心は高い。このため、近年の施設では、法面や水辺等に植物が育成されるように配慮するなど、土木構造物が自然物に馴染んでみえるようにするための様々な工夫が考案されている。これは、自然の水源地に対して人工的に演出を加えようとした沖縄の用水施設とは対照的である。

現代の施設と沖縄の石造用水施設を安易に比較するつもりは毛頭無い。けれども、自然の恵みや脅威を人々に語る土木構造物の役割を知り、自然物と土木構造物の調和をいかにはかるのかを知る上で、沖縄の石造用水施設に学ぶ点はたくさんあるように思われる。

【参考文献】福島駿介他『沖縄の信仰に関する建造物―近世社寺建築緊急調査報告書』沖縄県教育委員会、一九九一年

井上房一郎と音楽の街・高崎

昇 秀樹・名城大学教授

文化は生命と財産を守る!?

今年も暑い八月でした。

八月といえば甲子園。甲子園でも広島・長崎の被爆の日、八月十五日の終戦の日にはゲームを中断して戦死者に黙とうをささげます。

一九四五年のあの日から五七年。

日本各地でたくさんの人が死に、財産が失われました。

そんな中で、空爆にあわなかった都市が三つあります。

京都、金沢そして倉敷です。

何故だと思います?

「文化の力」です。

日本の古都、古い街並みが残る京都、金沢を破壊し、燃やしてしまうのは戦争とはいえ許されない、と考えるアメリカの将校がいたのです。

倉敷は大原美術館があったからです。大原美術館に所蔵されているフランス絵画は〝人類の宝〟。戦争とはいえ、それを燃やすのは許されない、という訳です。

ドイツの名将ビスマルクは、普仏戦争でフランスを追いつめたときもパリの街を砲撃しませんでした。〝華の都・パリ〟の街並みをいかに戦争とはいえ破壊することは許されない、と考えたからです。

〝文化のある街をつくることは安全保障につながる〟〝文化のある街はその街の人と財産を守る〟側面があることを知らねばなりません。

焼跡の中から生まれたひろしま美術館、群馬交響楽団

戦後の廃墟、焼跡の中にもかかわらず、いや、そうだからこそ、人々は絵画に、音楽に、文化に飢えていました。

焼跡の中から、二度と戦争の災禍を繰り返すまいとの祈りをこめて「ひろしま美術館」が設立されました。

戦後の荒廃の中から一筋の光として、高崎市民の心の泉となったのが、「群馬交響楽団」です。今回は映画「ここに泉あり」でその活動が全国に知れわたった群馬交響楽団と〝音楽の街・高崎〟にスポットをあててみたいと思います。

市民参加型で生まれた群馬交響楽団・群馬音楽センター

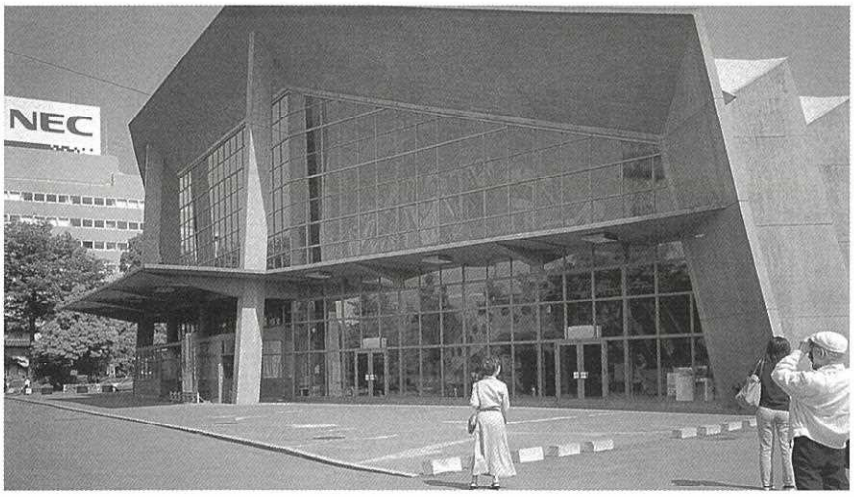
群馬交響楽団と群馬音楽センター（アントニン・レーモンド設計）の所在地、〝音楽の街〟として知られる高崎市の礎をつくったのは故井上房一郎氏（一八九八～一九九三年）です。

井上氏は明治三一年（一八九八年）、実業家井上保三郎氏の長男として高崎に生まれます。（父保三郎は白衣大観音を建立したことでも知られています。）

「高崎中（現高崎高校）から早稲田大学に進んだ房一郎は、山本鼎の自由画教育運動に影響を受け、山本のすすめでフランスに留学しました。パリではセザンヌの絵や建築家ヴィオレ・ル・デュックの理論に傾倒しました。」（高崎文化情報マガジン「劇場都市」VOL25・二〇〇二年七月・七頁）

七年に及ぶパリ留学から日本にもどると、井上氏は工芸運動に力を注ぎます。ナチスに国を追われたドイツの建築家ブルーノ・タウトを少林山の洗心亭に迎え、タウトと共同でミラテスという工房を設立。「タウト・井上」印が入った工芸製品を日本国内はもとより、海外へも輸出しました。

「戦後は群馬交響楽団の設立に奔走しました。群響の前身である高崎市民オーケストラの練習場だった喫茶店『ラ・メーゾン・ド・ラ・ミュージック（音楽の家）』の命名も房一郎です。店の一階は喫茶店、二階がオーケストラの練習場、そして三階では、若い画家の卵たちに房一郎がデッサンの指導をしていたということです。（前揚「劇場都市」VOL25・七頁）



群馬音楽センター

房一郎のすぐれたところは、市民参加でものごとをすすめるところです。房一郎はその生涯を自身の信念に基づいた文化支援・保護者＝パトロンとして過ごすのですが、自分一人だけでものごとをすすめないところがユニークです。（この点が倉敷の大原家、久留米の石橋家と違うところです。）

房一郎は井上工業のオーナーですから大変なお金持ちなのですが、それでも自分の私財だけで文化支援をやる、ということはしないのです。

もちろん私財は投入するけれども、多くの市民の方々が常に一緒に行動するというスタイルをとります。

たとえば群馬交響楽団も、もちろん房一郎のポケットマネーがかなり投じられていますが、同時に①演奏会をやる時、また②音楽センターをつくる時には市民の募金をつのります。

「音楽センターは三億五千万円くらい最終的にはかかったらしいですね。（当時の）市の予算の三分の一を投じたわけです。その三分の一の一億円近いお金は市民の浄財でした。今だったら百億円くらい集めたわけです。井上先生は市民がそれをやるという大切さを同時に伝えたんですね。」（熊倉活靖高崎哲学堂常務理事インタビュー・前揚「劇場都市」VOL25・二頁）

群馬県立近代美術館も市民参加型でつくり出した井上房一郎

県立近代美術館をつくる時も、房一郎は、まずコレクションをつくるところからはじめます。井上工業のビルの三階にファウンデーションギャラリーというギャラリーをつくって、群馬県美術館設立準備会という財団をつくりました。

そこで美術館とはどういうものか、美術とはどういうものか、という展覧会を毎月開催します。

同時に、埋もれた日本の美術品や郷土の作家の作品をもとめて東奔西走。美術品の寄贈、寄付運動を展開します。

「自分が中心となってある程度のお金を出したり、運動をするけれども、たった一人の運動ではなくて、それを大きな呼び水としながら、できるだけ多くの人々がそれぞれの立場で関われるような運動をしてきた。」（前揚・熊倉活靖高崎哲学堂常務理事インタビュー・「劇場都市」VOL25・二頁）

そういう働きかけをした房一郎も立派だが、それに応えた高崎市民も立派だ、というべきでしょう。

今でいう、市民参加、パブリック・インボルブメントのまちづくりを戦後間もない頃に高崎の地で房一郎は実践していた訳です。

レーモンドも房一郎に協力

房一郎の呼びかけに応えたのは高崎市民だけではありません。世界的建築家のアントニン・レーモンドも、「音楽センターのための市民運動を『盛り上がった形がデモクラチックだ』と言い、正式依頼の前から、市民にイメージを伝えるための模型製作を無料で引き受けたのでした。」（前揚「劇場都市」七頁）

こうして、房一郎のまいた種は高崎市をはじめ日本全国に、世界に広がり、今も脈々と受け継がれているのです。

施設ウォッチング⑰

ガスとくらしの歩みをたどる

GAS MUSEUM

がす資料館

ガス灯館

（平成14年8月23日に）

ガス灯が照らした近代日本

日本に初めてガス灯が灯ったのは、一八七二年（明治五）の横浜であった。

それまで行灯や提灯の明かりで生活していた当時の人々の目に、ガス灯の光はどのように映ったのだろうか。

初期のガス灯の赤い炎は、炎にかぶせる発光体「ガスマントル」の発明で明るさは五倍、光の色も青白くなり物の色が判別しやすくなったため、商店や家庭で盛んに取り入れられるようになった。

照明としての利用が始まったガスは、その後、調理器やストーブなどの熱源として活躍の場を広げ、一世紀以上を経た今なお私たちの生活を支えている。

開館時間　10:00～17:00（入館は16:00まで）
休館日　月曜日（月曜日が休祝日の場合は翌日）、年末年始
所在地　東京都小平市大沼町2-590　TEL042-342-1715

そうしたガスの歴史や暮らしとの関わりを、古いガス灯やガス器具を通して学べる場として、東京ガスのガスミュージアムは、昭和四二年に東京都小平市に設立された。

家族連れや小学生を中心に、毎年二万人以上が訪れている。

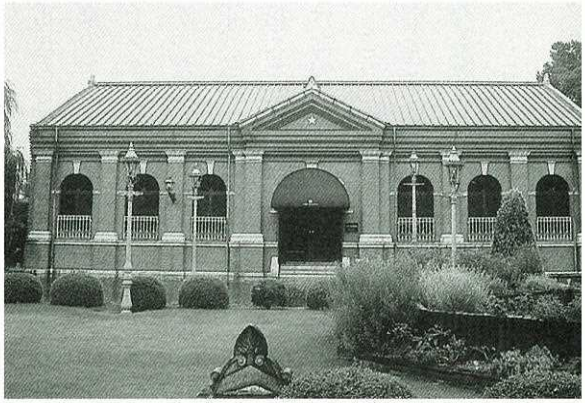
明治建築の保存が設立の契機に

昭和四〇年代はじめ、旧東京ガス本郷出張所の建て替え計画が持ち上がったとき、この明治から残る唯一の煉瓦造の出張所を残そうという声が社内からあがり、社史編纂等のために集めていた古いガス器具や資料を公開する施設として移設し利用することになった。

展示品は、開館後に積極的に収集され、貴重な古いガス器具やガスにまつわるもの約一〇〇〇点が集まった。

「まだ古いものが残っている時代にミュージアムという受け皿をつくることができたので、古いガス器具などが見つかると社内だけでなくお客様からも声をかけてもらえた」と学芸員の高橋豊氏は振り返る。

現在は、本郷出張所を利用した「ガス灯館」に加え、千住工場計量器室であった「くらし館」、そして、日本に初めて設置された横浜のガス灯などを展示した「ガスライトガーデン」から構成されている。二棟の展示館は、ともに東京都の歴史的建造物に指定されている。



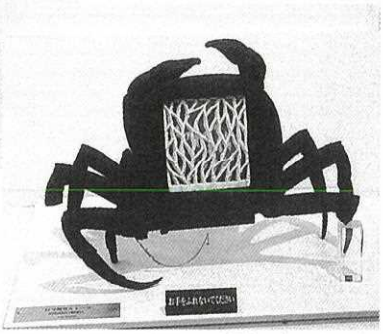
くらし館

ガスの文化を伝える資料館

「ガス灯館」一階の「ガス灯ホール」では、日本で初めてガス灯を灯すのに貢献した事業家高島嘉右衛門とフランス人技術者アンリ・プレグラン、一八八五年に東京瓦斯会社（現・東京ガス㈱）を設立した渋沢栄一が紹介されており、ガス灯がどのように日本に普及していったかを知ることができる。

そのほか、明治の風俗の代表として

ガスかまど



蟹型ストーブ

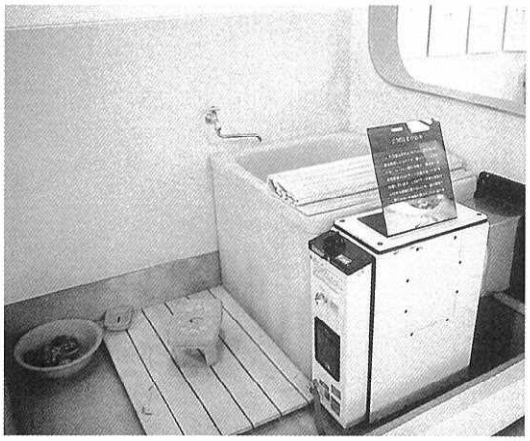
錦絵などにたびたび登場していた、ガス灯の点灯や消火を行う「点消方」の衣装や東京瓦斯会社本社の位置が記載された地図といった資料、豪華なシャンデリアから家庭用ガス灯まで様々なデザインの照明器具が展示されている。華やかな舞踏会が開かれた鹿鳴館で電灯が普及した後も非常灯として使われていた豪華なガスランプや、デザインは簡素だが手元を照らすために角度調節や伸縮が自在になる家庭用のガス灯は興味をそそられる。

「オリエンテーションコーナー」では、団体見学の場合は学芸員の演示によりロウソクと裸火のガス灯、ガスマントルを使ったガスランプを比較し、明るさの違いを体験することができる。水銀灯に慣れた現代人にとっては、明治の人々がまぶしく感じたガス灯さえ薄暗く感じるのではないだろうか。

二階の「錦絵ギャラリー」では、所蔵する七〇〇点もの作品の中から定期的に企画展を行っている。

明治の「錦絵」は文明開化の新風物やニュースが描かれており、当時のジャーナリズムのような役割も果たしていた。そのため、ガスに関する映像資料として収集していたが、現在はガスにこだわらず明治の風俗がわかるものを幅広く収集・展示している。

所蔵数が多く、何度訪れても違った絵を楽しめるため、企画が変わるたびに足を運ぶ人も多い。希望すれば展覧会の案内状を送ってもらうこともできる。



公団住宅の浴室の再現

「くらし館」では、明治から現代までの調理器具や給湯器といったガス器具の変遷、ガス原料の移り変わりを中心に展示されている。自分が使ったことのある製品が展示してあったりと、懐かしさを感じる来館者も多い。

「ガスとくらしの一世紀」のコーナーでは、明治三〇年代に大隈重信邸で使われていたものと同型のイギリス製料理器や昭和初期の卵ゆで器、蟹型ストーブ、日本独自の製品「ガスかまど」などが展示されている。

ガスが熱源として使われるようになったのは、一九〇〇年頃といわれている。初期の家庭用ガス器具は輸入品かそれをまねた国産品で日本人の生活に合わなかったが、ガス七輪（コンロ）やガスかまどといった製品の登場で、ガスは生活に不可欠なものとなっていった。ガスかまどやガスアイロンは、現在でも業務用として使われており、隠れたロングセラーなのである。

「ガス製造のうつりかわり」のコーナーでは、石炭から石油を経て液化天然ガスへと移り変わったガス原料の歴史、家庭への供給方法や災害対策について学ぶことができる。腐食や地震の揺れに対応したガス管、異常を感じたときに自動的にガスの供給が止まるマイコンメーターなどは、私たちが毎日使っているガスの安全や利便性を支えている身近な技術だ。

給湯器やお風呂の変遷の展示では、家庭用冷蔵庫並みの大きさであった給湯器がアタッシュケースほどに小さく改良されていく様や、ボタン一つで湯はりができたりと便利になっていくお風呂場の様子に、しみじみと便利な生活になったものだと感じさせられた。

二一世紀のガスとくらし

敷地内の歩道には、かつてガスの製造に使用していた石炭炉の耐火煉瓦が敷き詰められている。独特の風合いが醸し出されているその煉瓦からは、ガスが歩んできた歴史が感じられるような気がする。

日本の近代化と共に歩んできたガスが明治の闇夜を照らしたように、これからどのように私たちの生活を豊かにしてくれるのか、興味は尽きない。

ガス灯に明治のロマンを感じ、散策がてら訪れてはいかがだろう。

（取材・小野久美子）

誰とでも触れ合えるスポーツをとおして、心も体も元気に

人間として根本的な問題を目にして

アジアでもっともHＩＶ感染率が高い国が、カンボジアです。私にとっては、一九九六年に地雷廃絶を訴えるハーフマラソンに参加したのを機に、ＮＰＯ「ハート・オブ・ゴールド」を設立し、活動を続けているかかわりの深い国です。ことし、国連人口基金の親善大使として、エイズという深刻なテーマに取り組むことになりました。

エイズを考えるとき、そこには生まれてくる子どもたちや子どもを産む母親を取り巻く環境、健康の問題などがあります。人間として知り、考え、守らなければいけない根本的な問題です。

イベントは情報発信の場として最高

エイズ対策としては、まず多くの人に予防の知識を広めることが大切です。しかし、集会などを行っても患者に対する差別があるため、なかなか集まりません。患者が傷つかずに快く参加してもらうことができて、エイズでない人もいっしょに集まることのできる場が必要です。

どの年代の人も集まりやすく、楽しいイメージをもち、世界共通のもの、それがスポーツです。スポーツイベントをとおして、エイズに関する大事な情報をみんなに伝えたい。大会に冠をつけて大げさにするのではなく、集まった人がその場に来て初めて知るようなさりげない方法。ＮＰＯで行っているスポーツイベントともいっしょに動いていけたら有効だと考えています。

エイズに感染している人たちにも会いました。発症していなくても職業につけない、家族の元にも帰れないといいます。しかし、同じ立場の人を増やさないために、発症するまでは自分たちのできることはしたいと活動に参加しています。自分たちが立ち上がらないと、この問題は解決しないという思いを感じました。患者と子どもたちが触れ合う機会が少ないので、スポーツイベントを開いて交流をしていきたいですね。

賞味期限切れ

冷蔵庫の中には、賞味期限切れの食品がけっこうあったりする。それを捨てるかどうか悩むところであるが、期限切れだからといって、すぐ捨てるのはもったいない。期限切れでもたいていのものは食える、というのがワタクシの見解である。

賞味期限とは、メーカーや流通業者が自主的に決めたものである。これぐらいは大丈夫と自信をもって、あるいは、こんなところだろうと適当に決めたもので、ある程度の余裕をみている。

期限切れでも、保存状態がよく、変な臭いもせず、変色もしていないなら、まず大丈夫と思ってよい。むろんそのときの体調や個人差もあるかもしれないけど、食べても腹を下すようなことはまずない。下しても賞味期限切れが原因とはいえない。というようなことをいうと、保健所は文句をいうかもしれないが、品質の良し悪しは味覚や嗅覚で判断すべきものである。賞味期限をみなければわからないというのは情けないではないか。昔は賞味期限表示などなかった。なかにはある程度日がたっ

国を動かす 次の世代に問題意識を

私たちがカンボジアで取り組んでいるのは、一〇歳から二五歳くらいまでの若者のピア・エデュケーターを育てることです。同世代に情報を伝えることができる子どもたちの育成です。そのために、診療所に図書館や娯楽部屋などを兼ねた施設を作ります。自由に出入りでき、週に数回みんなが集まり、ゲームをとおしてエイズについての情報提供を行ったりディスカッションをしています。首都のプノンペン市内ではある程度成功しているので、都心から離れた場所でも同様のプロジェクトを始めました。情報の少ない田舎ではエイズに対する危機感はゼロに近く、病気になっても祈祷師にみてもらうような生活環境にまだあります。

一方、都心部では、エイズだけでなく女性差別の問題などに対する意識も高くなってきています。「女性にも問題がある」とはっきり口にできる、意識の高い若い女性たちがいるほど。「何が問題なのか」「これから何をすればいいのか」を、その世代なりに考えているのではないでしょうか。そういう子どもたちが発信者として増えていく。やがて大人になって国を動かすのは、いまの子どもたちです。ですから彼らの意識が変わることはとても大事なことなんです。

すべて「できること」でつながっている

NPOや国連人口基金の仕事などでは「新しいことを始めましたね」といわれることがあります。私にとっては、走ることを含めて自分ができる範囲で、それがフルに生かされる活動であればやっていきたいと思っています。ですから、無理をしていないし、特別に新しいことを自分の中に取り入れているわけではなく、全部つながっているのです。

「できること」の幅は少しずつ広がってきています。これからは、いま取り組んでいることを、少しずつ形にして結果を残していきたい。そして「人と人」「できること」のつながりを大切にしたいですね。

有森　裕子（ありもり・ゆうこ）
マラソンランナー

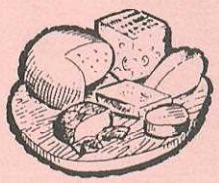
たもののほうがうまいものがある。牛肉などは腐りかけがうまいといわれる。鮮度がベストではないのだ。

おおむね発酵食品は日持ちする。納豆などは賞味期限をそれほど気にすることはない。味噌・醤油のたくいもそうだ。チェダーやゴーダといったナチュラルチーズはかなり長持ちする。

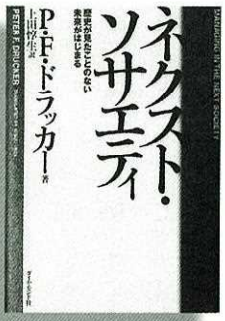
以前、冷蔵庫の奥にしまいこんでおいたチェダーチーズを見つけたことがある。賞味期限を一年以上すぎていた。硬くなり、ボロボロ状態。恐るおそる食べてみたところ、これが美味。通常の市販のものよりうんとうまかった。熟成が進んで、味に深みが増していたのだ。酒でいうと古酒ですな。これに味をしめ、現在、冷蔵庫の奥にチェダーチーズをしまいこんでいる。一年後が楽しみ。

というような話を飲み屋のオヤジにしたら、「うちなんか、五日や十日ぐらいたった豆腐を出すことがあるけれど、平気だね」とオヤジ。

ゲッ。そりゃないだろ。でも、成り行き上、反論できなかった。



『ネクスト・ソサエティ』



P・F・ドラッカー　著
ダイヤモンド社
2200円

二一世紀を迎え、世界経済は米国経済の失速、日本の閉塞感等、多くの不安定要因を抱えている。

ビジネス界に最も影響を与える一人として名高い著者が現在の経済・社会の問題点を洗い出し、今後の世界において着目すべき重要な点を説いている。著者は、IT革命などに代表される経済の変化は、経済自身が変化したのではなく、むしろ社会の変化に起因したのだと主張する。ネクストソサエティ（異質の次の社会）では、経済の変化とともに社会の変化に着目しなければならない。

本書は、日本経済のために書かれたかと思えるほど日本社会を的確に表現しており、ビジネスマンのみならず、政府関係者や企業経営者等幅広い層にぜひ読んでいただきたい一冊である。

（H・I）

『建築家がつくる理想のマンション』
―住みごこちのよさとは何か―

泉　幸甫　著
講談社＋α新書
780円

「理想のマンションとはなんだろうか。」この疑問が、本書における根源的テーマであると共に、著者が常に自分に問いかけ、その答えを模索し続けている問題である。

建築家である著者は、実際に自分が建築に携わってきたマンションの事例を紹介しながら、『人が心地よく住むための建物』という、そこに住む人々の観点を道標として、読者を理想のマンション探しの旅に誘うのである。

住宅環境において、量的のみではなく質的な充足も強く求められている今、自分自身で「理想のマンション」を探してみようではないか。そんな前向きな勇気と知恵を与えてくれる珠玉の一冊である。

（A・S）

『江戸・東京はどんな色』

小林忠雄　著
江戸東京ライブラリー
1500円

日本の色ってなんだろう。そう考えると、まず国旗である赤と白。もしくは記憶に新しいサッカーワールドカップのジャパンブルーを思い浮かべる人も多いだろう。私も日本代表の、ジャパンブルーに日の丸のユニフォームを着て応援した一人だ。

そもそも「色」というのはどんな意味をもち、どのように表現され現在に伝えられてきたのか。

本書によると、江戸の色彩表現の大きな特色は赤色と紅白。それが近代、東京へと時代が移り変わるにしたがって赤・白・青・緑・黄色やピンク・紫など七色が定着したという。

これらの色が織りなす江戸・東京を中心とした大衆の生活文化を、著者は都市民俗学の視点から分析しており、街中にあふれる「色」に改めて注目したいと思わせる好著である。（m）

『坂本博之・不動心』

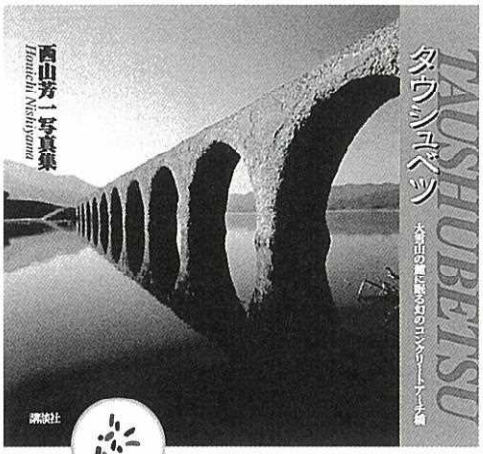
坂本博之・加茂佳子　著
日本テレビ放送網㈱
1000円

豊かさを標榜して憚らない日本というこの国で、ハングリーという言葉が死語になって久しい、そう思っていた。坂本博之というボクサーを知るまでのことだ。現時点で、戦績三七勝五敗、うち二七KO。あくまでKOにこだわる坂本は、「悲運のボクサー」とも呼ばれる。早くも伝説化した、あの凄絶な畑山戦で世界タイトル四度目の惜敗。それでも、負けは認めない坂本にとって、幼い日々に舐めた「飢え」の記憶が、ここで満足することを認めないのか。

「不遇な環境だったからグレるというパターン化はカッコ悪い」と言う坂本の直截な生きざまは、不器用ゆえに魅せてくれる。だからこそ、十三万人にも膨れ上がった不登校と呼ばれる若者達にこそ勇気と、生きる力、を与える一冊と見た。（お）

ひがし大雪の湖に眠るアーチ橋を、数年にわたり撮り続けたカメラマン西山芳一の集大成作品!!

西山芳一写真集『タウシュベツ』
～大雪山の麓に眠る幻のコンクリートアーチ橋



北海道のほぼ中央、旧国鉄士幌線に架けられた一連のコンクリートアーチ橋は、廃線となった今も、大雪山系の渓谷美に調和した美しい造形を残しています。

平成13年には、次世代に引き継ぐべき有形の財産として、「北海道遺産」の選定を受けたこれらアーチ橋のひとつが写真集「タウシュベツ」の主役。この橋はかつて「タウシュベツ川」に架かる鉄道橋だったのですが、ダム建設によって生まれた人造湖に水没し、水量の減った時にだけ姿をみせるまさに幻のアーチ橋なのです。

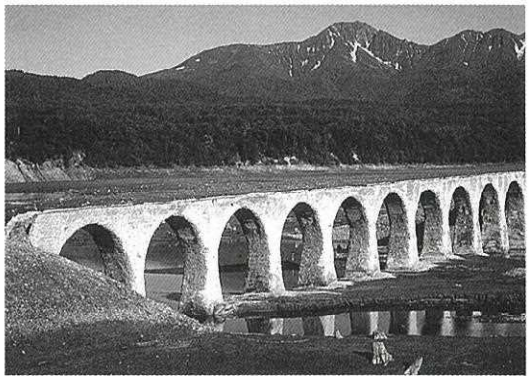
土木写真家西山芳一は、数年前このアーチ橋に魅了されて以来、四季を通じて現地に赴き、大自然に抱かれたこの橋の姿を撮り続けてきました。これは「タウシュベツアーチ橋」の美しさを余すところなくとらえた写真集です。

さらに、アーチ橋の技術的な価値や、旧士幌線にまつわる物語などの記事も掲載。見ごたえ、読みごたえのある一冊です。

価格3,000円（税込み）　発行元／講談社
- 本文88頁（カラー72頁）
- A4判変形、上製本仕上げ

西山芳一写真展『タウシュベツⅡ』

日　　時：11月15日(金)～11月21日(木) 日･祝日は休館
10:00～18:00(月～金)、11:00～17:00(土)
※21日(木)は15:00まで
場　　所：富士フォトギャラリー日比谷
東京都千代田区有楽町1-4-1　三信ビル1F
TEL 03-5510 -3716
FAX 03-5510 -3717
交通案内：地下鉄日比谷線「日比谷」駅下車
A11出口より徒歩1分
ＪＲ山手線「有楽町」駅下車徒歩3分



from　土木の文化財を考える会

『第9回 講演と討論の会』開催

＜講　演＞

1．「日本の近代化遺産を歩く」
増田彰久（写真家、早稲田大学講師）

2．「日本の近代の城と石垣」
新谷洋二（工学博士、東京大学名誉教授）

特別企画 「安芸皎一博士生誕百年を記念して」
高橋　裕　他

日　　時：12月21日(土) 13:00～17:00
場　　所：東京大学構内　山上会館
東京都文京区本郷7-3-1
TEL 03-5841-2320
主　　催：土木の文化財を考える会
会　　費：一般1000円／学生500円
お問合わせ先：土木の文化財を考える会・前島
TEL 03-3988-7733
FAX 03-3988-7747

その他ご案内

地域住民による土木遺産活用
～堀川運河の弁甲筏流し～

宮崎県日南市にある油津の堀川運河と、その運河に架かる堀川橋は、映画「男はつらいよ」のロケ地になったりもしてポピュラー化しているが、毎年５回、地域住民や日南市によって＜弁甲筏流し＞が行われ、土木遺産が一般市民と一体化して親しまれていることをご存じだろうか？土木遺産の保存と活用は、あくまで地域住民に認められ、親しまれ、愛されてこそ地域振興にも結びつく。その顕著な事例の一つとして注目されている。

＜今年の予定＞
5月3日、7月20日･21日、10月19日、11月9日

研修名	期日・人数
災害復旧実務	1月 50名・5日間
災害復旧実務中堅技術者	5月 50名・5日間
河川計画・環境	12月 40名・5日間
河川総合開発 —ダム設計—	5月 50名・5日間
機械設備設計積算 —水門・樋門及び揚排水機場の設備等—	12月 40名・5日間
ダム工事技術者	2月 50名・12日間
ダム工事技術者特別	4月 60名・5日間
ダム管理	11月 40名・5日間
ダム管理 (操作実技訓練)	4月～2月 各6名・各3日間
ダム管理主任技術者 (学科1回・実技15回)	学科90名、4月・5日間 実技各6名・5月～7月・各3日間
道路計画一般	11月 70名・10日間
道路計画専門	5月 40名・5日間
道路舗装	7月 60名・5日間
舗装技術	9月 50名・5日間
道路技術専門	6月 50名・5日間
道路管理一般	9月 60名・11日間
ITS開発	5月 40名・4日間
透水性・排水性舗装	5月 50名・4日間
市町村道	11月 60名・5日間
地質調査 (土質・岩盤・地下水コース)	4月 70、50、50名・各5日間
土質設計計算(演習) (Ⅰ)(Ⅱ)	9月・11月 各50名・各4日間
地盤処理工法	6月 40名・5日間
補強土工法	11月 40名・5日間
くい基礎設計	4月 70名・5日間
地すべり防止技術	5月 70名・9日間
斜面安定対策工法	9月 70名・4日間
橋梁設計	9月 70名・12日間

研修名	期日・人数
用地一般 (Ⅰ)(Ⅱ)	5月・9月 各60名・各12日間
用地専門 —特殊な補償についての事例研究—	1月 50名・5日間
用地事務(土地)	12月 50名・5日間
用地事務(補償)	12月 50名・5日間
補償コンサルタント基礎 (Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)	4月 各60名・各5日間
補償コンサルタント専門 (物件、営業補償・特殊補償、事業損失部門)	6月・7月 60、50、50名・各5日間
用地補償専門 (ゼミナール)	10月 40名・5日間
土地・建物法規実務	7月 40名・4日間
土地家屋調査 —不動産登記実務—	6月 40名・5日間
不動産鑑定 —土地価格等の評価手法—	10月 60名・5日間
都市計画一般	5月 70名・12日間
都市計画街路一般	10月 40名・12日間
都市再開発一般	9月 40名・5日間
街なか再生実務	10月 40名・5日間
都市デザイン	12月 50名・5日間
ゆとり(遊)空間デザイン	7月 50名・5日間
宅地造成技術	7月 70名・5日間
宅地開発一般	9月 50名・5日間
下水道	11月 60名・5日間
下水道積算実務	5月 40名・5日間
小規模下水道	7月 50名・4日間
河川一般	10月 50名・5日間
市町村河川	11月 50名・5日間
河川技術(演習)	7月 60名・5日間
河川構造物設計一般	6月 50名・11日間
砂防一般	6月 40名・5日間
砂防等計画設計	9月 40名・11日間

平成14年度研修計画

研修名	期日・人数
環境（生態）デザイン	7月 50名・5日間
花と緑 —緑化（花・緑）の実務—	2月 50名・4日間
環境アセスメント	2月 60名・5日間
建設リサイクル	1月 40名・5日間
公共工事契約実務	10月 40名・4日間
公共事業決算・検査 —会計実地検査受検の基本—	6月 40名・3日間
世界測地系	5月 40名・3日間
耐震技術	9月 40名・4日間
情報技術利用 —建設分野における身近なパソコン利用—	4月 40名・4日間
データベース	6月 40名・4日間
建築指導科 （監視員）	6月 60名・12日間
住環境・住宅市街地整備	9月 40名・5日間
建築計画	2月 40名・4日間
建築耐震技術	10月 40名・4日間
建築（設計）	11月 40名・10日間
建築（積算）	9月 40名・5日間
建築構造 （S構造）	7月 40名・9日間
建築設備積算	11月 40名・5日間
建築設備（衛生一般）	7月 50名・5日間
建築設備（電気一般）	2月 50名・10日間
建築工事監理	10月 60名・5日間
建築保全	2月 40名・5日間
第一級陸上特殊無線技士	1月 50名・12日間

研修名	期日・人数
鋼橋設計・施工	1月 50名・5日間
プレストレスト・コンクリート技術	7月 50名・5日間
橋梁維持補修	10月 50名・5日間
シールド工法一般	7月 50名・4日間
ナトム （工法）	12月 60名・5日間
ナトム （積算）	7月 50名・4日間
推進工法	9月 70名・4日間
推進工法設計・積算	5月 50名・4日間
トンネル補強補修	11月 40名・3日間
道路トンネル付属施設設計・施工	9月 40名・4日間
土木積算体系 —公表歩掛による積算—	1月 50名・5日間
土木工事積算	6月 60名・5日間
土木工事監督者	7月 70名・10日間
工程管理 （基本）	6月 50名・3日間
品質管理	12月 40名・5日間
ISO規格（品質・環境） —マネジメントシステムの構築—	9月 40名・4日間
仮設工	9月 60名・5日間
仮設工実務	11月 40名・4日間
近接施工	9月 50名・4日間
港湾工事	7月 50名・4日間
コンクリート施工管理	7月 40名・5日間
コンクリート構造物の維持管理・補修	11月 50名・3日間
シビックデザイン —土木施設デザイン—	9月 40名・5日間

研修のお問合せ先

財団法人 全国建設研修センター

研修局　〒187-8540　東京都小平市喜平町2-1-2

☎042（324）5315（代）

ホームページアドレス:http://www.jctc.jp/

平成14年度技術検定試験

種　目	受　験　資　格	試験実施日（平成14年）	試　験　地	申込受付期間（平成14年）
一級土木施工管理技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級土木施工管理技士で所定の実務経験年数を有する者。	7月7日（日）	札幌・釧路・青森・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・岡山・高松・福岡・沖縄	3月1日から3月15日まで
一級土木施工管理技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	10月6日（日）	札幌・釧路・青森・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・岡山・高松・福岡・沖縄	8月20日から9月3日まで
二級土木施工管理技術検定学科・実地試験（土木・鋼構造物塗装・薬液注入）	所定の実務経験年数を有する者。	7月21日（日）	上記に同じ（青森を除く）（但し、種別:鋼構造物塗装・薬液注入については札幌・東京・大阪・福岡）	3月1日から3月15日まで
一級管工事施工管理技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級管工事施工管理技士で、所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による管工事関係の一級技能検定合格者。	9月1日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	5月8日から5月22日まで
一級管工事施工管理技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	12月1日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	10月18日から10月31日まで
二級管工事施工管理技術検定学科・実地試験	所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による管工事関係の一級または二級の技能検定合格者。	9月15日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	5月8日から5月22日まで
一級造園施工管理技術検定・学科試験	所定の実務経験年数を有する者。 二級造園施工管理技士で、所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による造園の一般技能検定合格者。	9月1日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	5月23日から6月6日まで
一級造園施工管理技術検定・実地試験	当年度学科試験合格者。 その他の該当者。	12月1日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	10月18日から10月31日まで
二級造園施工管理技術検定学科・実地試験	所定の実務経験年数を有する者。 職業能力開発促進法による造園の一級または二級の技能検定合格者。	9月15日（日）	札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄	5月23日から6月6日まで
土地区画整理士技術検定学科・実地試験	学歴により所定の実務経験年数を有する者。 不動産鑑定士及び同士補で所定の実務経験年数を有する者。	9月1日（日）	仙台・東京・名古屋・大阪・福岡	5月8日から5月22日まで
土木施工技術者試験 管工事施工技術者試験 造園施工技術者試験	指定学科の卒業見込者	12月15日（日）	全国・50箇所	9月13日から9月27日まで

平成14年度研修・講習

種　目	受講対象	研修実施日（平成14年）	研修地（地区）	申込受付期間（平成14年）
二級土木施工管理技術研修	学歴により所定の実務経験年数を有する満年齢35歳以上の者。	6月中旬	沖縄・九州・中国・東北・北海道	3月1日から3月15日まで
		6月下旬	九州・四国・中国・北陸・東北・北海道	
		7月中旬	沖縄・九州・四国・中国・北陸・東北・北海道	
		7月下旬	沖縄・九州・四国・北陸・東北・北海道	
		9月上旬	近畿・中部・関東・	
		9月中旬	近畿・中部・関東・東北	
		10月上旬	近畿・中部・関東・東北	
		10月中旬	近畿・中部・関東・東北	
二級管工事施工管理技術研修	学歴により所定の実務経験年数を有する満年齢35歳以上の者。	8月下旬	近畿・中部・東北・北海道	5月8日から5月22日まで
		9月上旬	近畿・中部・北陸・関東・東北・北海道	
		9月中旬	近畿・中部・北陸・関東・東北・北海道	
		10月上旬	中国・近畿・北陸・関東・東北・北海道	
		10月中旬	中国・近畿・中部・北陸・関東・東北	
		10月下旬	九州・中国・近畿・中部・関東・東北	
		10月下旬～11月上旬	沖縄・九州・四国・近畿・中部・関東・東北	
		11月上旬	沖縄・九州・四国・近畿・中部・関東	
		11月中旬	沖縄・九州・四国・近畿・関東	
		11月下旬	沖縄・九州・四国・近畿・関東	
		12月上旬	沖縄・九州・四国・近畿・関東	

種　目	講習対象者	講習実施日（平成14年）	講習地（地区）	申込受付期間（平成14年）
監理技術者講習	監理技術者資格者証の交付を受けようとする者。	逐次実施	各都道府県庁所在地及び帯広市並びに旭川市	随時申込受付

技術検定試験・研修等お問合せ先

財団法人 全国建設研修センター

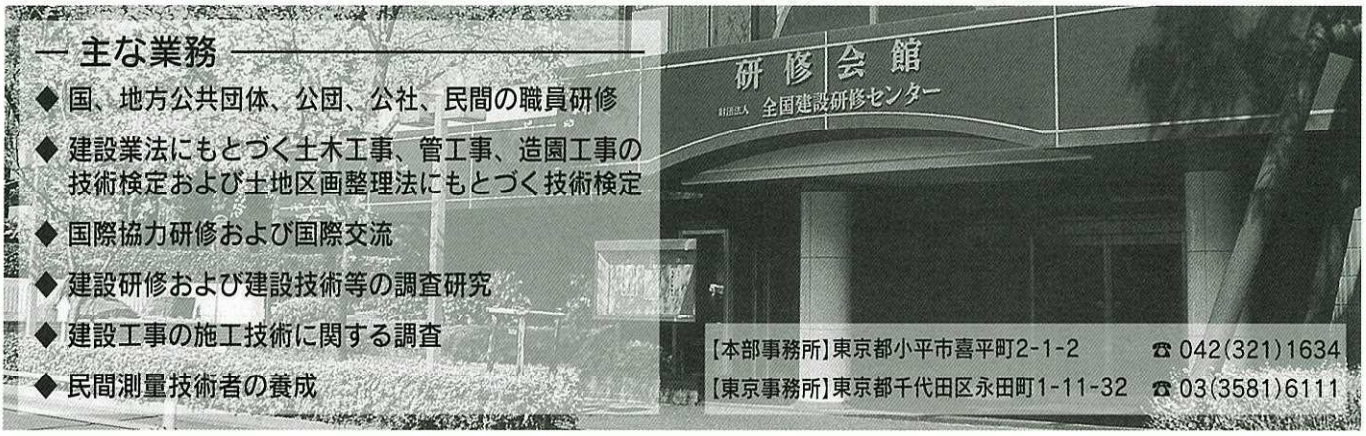
試験業務局　〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-30　サウスヒル永田町ビル
ホームページアドレス:http://www.jctc.jp/

- ●土木施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉（土木試験課）
- ●土木施工技術者試験（施工試験課）
- ●管工事施工技術者試験（施工試験課）
- ●造園施工技術者試験（施工試験課）　☎03（3581）0138（代）
- ●二級土木施工管理技術研修（土木研修課）　☎03（3581）7611（代）
- ●管工事施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉（管工事試験課）
- ●二級管工事施工管理技術研修（管工事研修課）
- ●造園施工管理技術検定〈一・二級学科及び実地試験〉（造園試験課）
- ●土地区画整理士技術検定〈学科及び実地試験〉（区画整理試験課）　☎03（3581）0139（代）
- ●監理技術者講習（講習課）　☎03（3581）0847（代）

FAX情報 0120−025−789
（FAX付き電話からおかけください。＝無料サービス）

情報番号
11−実施日程
12−1・2級土木試験
13−1・2級管工事試験
14−1・2級造園試験
15−土地区画試験
16−施工技術者試験
17−2級土木研修
18−2級管工事研修
19−監理技術者講習
20−申込用紙販売先
21−情報一覧と操作方法
31−合格証明書の再発行

財団法人　全国建設研修センター



— 主な業務 —

- ◆ 国、地方公共団体、公団、公社、民間の職員研修
- ◆ 建設業法にもとづく土木工事、管工事、造園工事の技術検定および土地区画整理法にもとづく技術検定
- ◆ 国際協力研修および国際交流
- ◆ 建設研修および建設技術等の調査研究
- ◆ 建設工事の施工技術に関する調査
- ◆ 民間測量技術者の養成

【本部事務所】東京都小平市喜平町2-1-2　☎ 042(321)1634
【東京事務所】東京都千代田区永田町1-11-32　☎ 03(3581)6111

出版案内

□建築設備計画基準・同要領
平成12年版　定価6,090円

□建築設備設計計算書書式集
平成10年版　定価3,570円

□下水道維持管理の手引
定価5,403円

□建築設備設計基準・同要領
平成10年版　定価12,600円

□改良復旧事業の手引
平成7年版　定価4,587円

□下水道事業の手引
平成14年版　定価5,040円

□技術革新と国土建設
谷藤正三著　定価6,321円

□建築設備設計計算書作成の手引
平成10年版　定価3,885円

□用地取得と補償 新訂3版
定価5,460円

□下水道計画の手引
平成9年版　定価5,775円

□排水再利用・雨水利用システム計画基準・同解説
平成9年版　定価7,350円

- ● 各図書の定価は税込みとなっております。
- ● 送料は実費です。
- ● 購入ご希望の方は、書名と部数をご記入の上、現金書留で下記あてにお申込み下さい。

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館　(財)全国建設研修センター・建設研修調査会 ☎ 03-3581-6341

進路相談室を設置しキメ細やかな就職指導体制

就職先は官公庁、測量設計、土木建設、建築設計などへ

平成14年3月卒業生
就職率 92%

国家試験免除

■国土交通大臣指定資格
測量士・測量士補無試験取得！

■国土交通大臣認定資格
1・2級建築士、木造建築士
1・2級土木施工管理技士
1・2級建築施工管理技士
インテリアプランナー

■在学中取得
車両系建設機械運転技能者
小型移動式クレーン運転技能者
玉掛技能者
トレース技能検定

資格・就職に強い建設の伝統校
北海道知事認可校　国土交通大臣指定校　国土交通大臣認定校

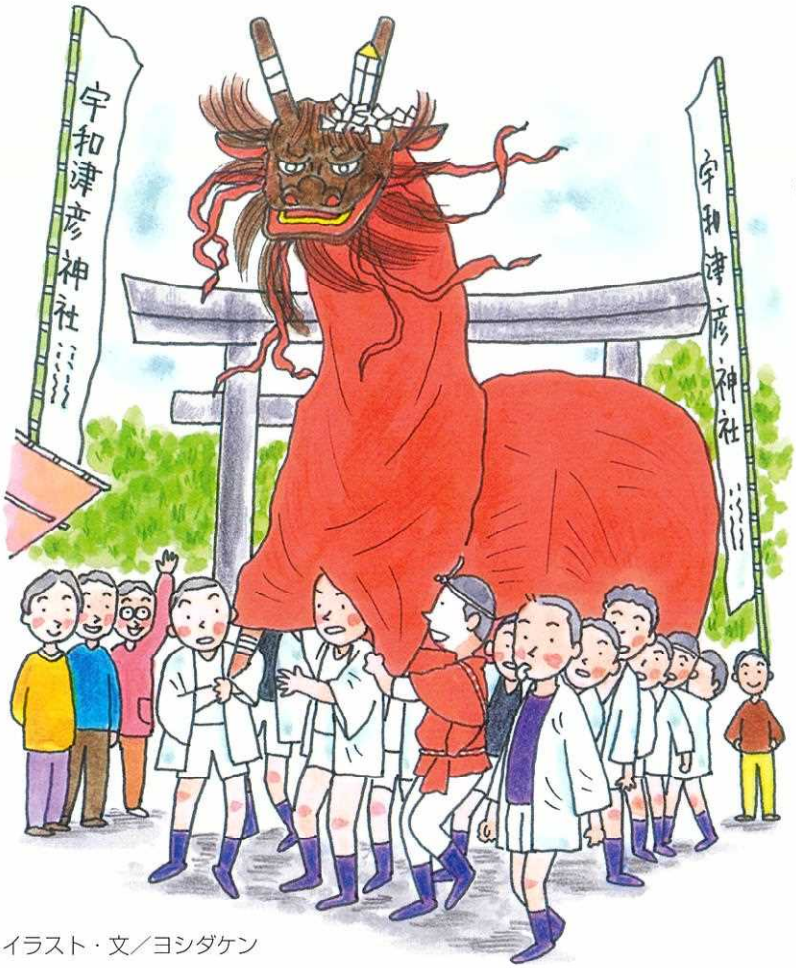
財団法人 全国建設研修センター付属
札幌理工学院

〒069-0831　北海道江別市野幌若葉町85-1
0120-065-407
TEL 011-386-4151　FAX 011-387-0313
URL http://www.srg.ac.jp/

日本の風物詩 Vol.⑩

宇和津彦神社秋まつり
（愛媛県宇和島市）

「名おそろしきもの」と枕草子に記された胴体五、六メートル幅三メートルの魁頭牛体の「牛鬼」数十人の若者に担がれ竹ぼら吹きを従えて首を振りながら市中を練り歩く。今では牛鬼は魔よけとして「うしょうにん」と親しみをもって呼ばれ秋まつりの主役である



イラスト・文／ヨシダケン

☆毎年 10月28日～29日

編集後記

「日本民族は赤が好き」とは篠原先生の言葉だが、「赤」と聞いて私が思い出すのは旧岩淵水門の赤く塗られたゲートだ。通称「赤水門」と呼ばれるこの構造物は、新しい水門の建設により機能を果たさなくなってからも市民の要望で残され、地域のランドマークとして親しまれている。去年、その赤水門が創建時の淡いグレーに塗り替えられるかもしれないと新聞で知り、心中穏やかではいられなかった。結局、計画は白紙に戻ったようだが、水門が赤くなかったら、はたして現在まで残っていたのだろうかと考えてしまう。専門家の言うこともわかるが、そこが色の難しさなのだと素人ながら思った。（K）

国づくりと研修
KUNIZUKURI TO KENSHU

平成14年10月30日発行©

編　集　『国づくりと研修』編集小委員会
東京都千代田区永田町1-11-32
全国町村会館西館7階
〒100-0014　TEL 03(3581)2464

発　行　財団法人全国建設研修センター
東京都小平市喜平町2-1-2
〒187-8540　TEL 042(321)1634

印　刷　株式会社　日誠

次号の特集

社会資本　百年の記憶・百年の未来

明治から大正、昭和、平成と受け継がれてきた社会資本整備、この百年という近代化の道筋のなかで、継承すべきもの、失ってしまったものは何か。大いなる時代の変換期を迎えたいま、後世に何を伝え、何を生みだしていけばよいのか。

次号の特集では、社会資本百年の記憶を検証することで、百年後の未来を考えてみたい。

今号の表紙スケッチ

【 松重閘門 】　愛知県名古屋市

17世紀初め、徳川家康によって名古屋城が築かれ、城下町がつくられた。当時大量の物資を運ぶ手段は船しかなく、名古屋城築城の資材や、城下町に必要な建築資材、食糧、日用品などの物資の運搬は水運に頼るほかなかった。1610年頃、熱田の浜から城が築かれることになった那古野台地の西北端まで、約6㎞の堀川という運河が開削された。明治になり、堀川河口に名古屋港が開港し、名古屋は大都市へと発展するが、より大型船が航行できる運河が必要となり、中川運河が造成された。そして昭和初め、両運河をつなぎ、船の往来を可能にするため、大規模な閘門が造られた。松重閘門はその一つで、両端のゲートの間は長さ90m、幅8.5m。船は20分で通過したという。急速な自動車輸送の発達に伴い1976年この閘門は廃止。現在は埋め立てられ、公園として保存されている。皮肉なことに4基の塔の間には高速道路が走っている。また堀川は一部埋め立てられ、久屋大通りに変わり、市民に親しまれている。

（絵と文／安田泰幸 ©YASUDA YASUYUKI）

名古屋城
徳川家康の命により、1612年に築かれた。
膨大な資材の運搬に、堀川が重要な役割を果した。

テレビ塔
名古屋の中心、久屋大通公園に
1954年建てられた。高さ180m。

国づくりと研修
KUNIZUKURI TO KENSHU